田舎織糸線褄衣

川柳作

へ 13
3979

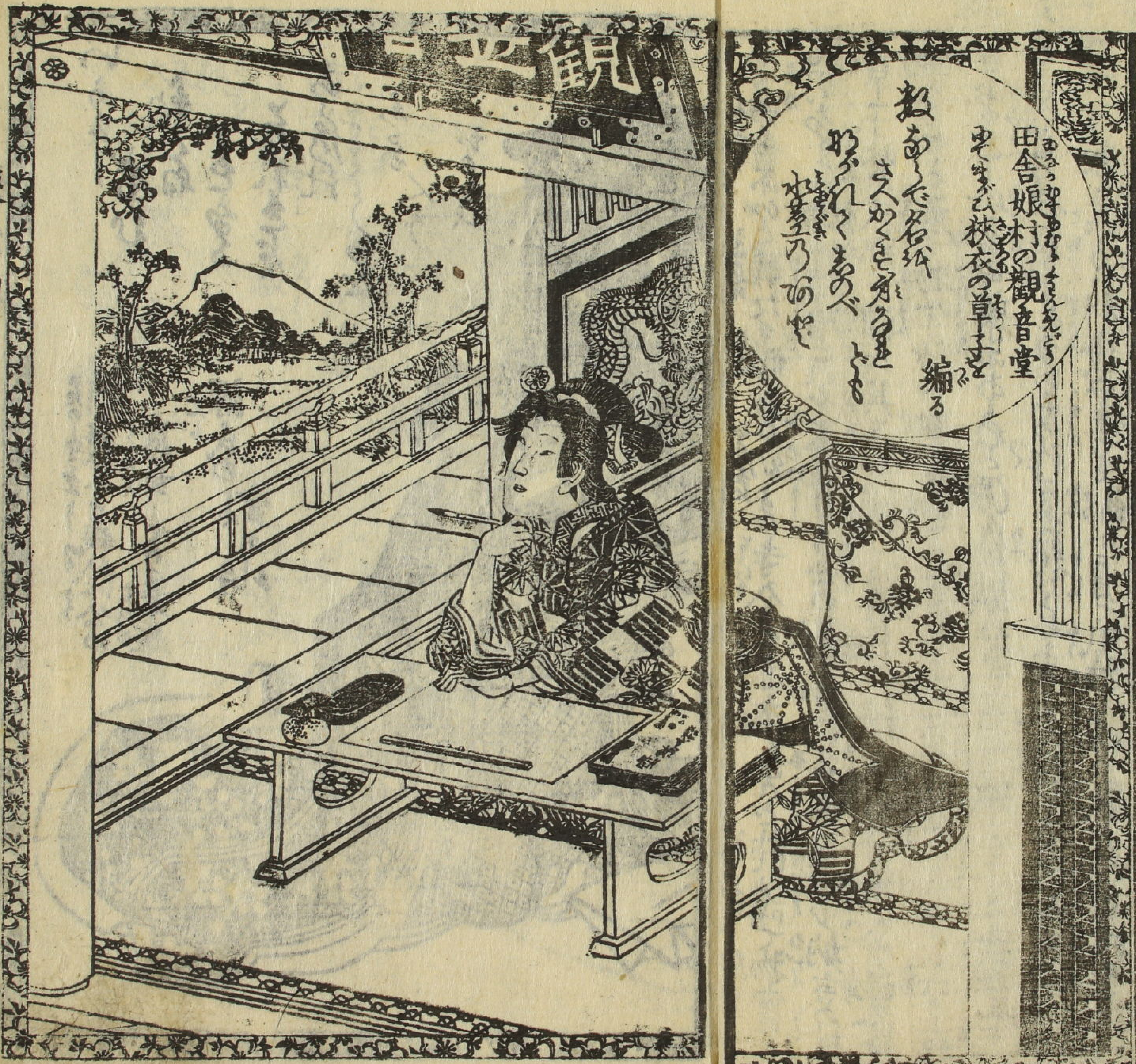
ある田舎にひと媚たる娘あり幼より寺へ入て赤本なんど能讀て物書ことにも好なりしかば師の坊殆これを誉昔より女の筆意に名高き清少納言の枕草子紫式部が源氏其子大貳三位の作し狹衣何れも雅人の愛ば物なり女と産て物学びせば斯こそ有たきものぞと云へば彼娘是を聞それ六くも古文にもあらば五母紫にあらねど源氏の旗めきし白布織と上なき我身も夫を見習ば狹衣ごろもてふその作るに雑もとやあるとまた額ふるもさければ師の坊いと可笑く其方は利發る生でも鄙に育て風雅に疎く歌と云ば田植や盆踊に唄ふと心得枕草子は春画と推し狹衣は田舎木綿と思ふならんなど風流者同ども名まても異物かとまた譬言もあり衣擣る砧と縁ばあまの羽衣にや衣田は其嶋林は雨の夜わび衣玉藻菰ると縁ば蚕の著物なり夫ならぬ弁もなく猥に口きたなきその狹衣は草子の名突目切に作られて物にあらぬと言れて娘は悔しく思ひ言出したるも一念力狹衣に似る書作らんと観音廿日に祈拵書

門 へ13
號 3979
巻

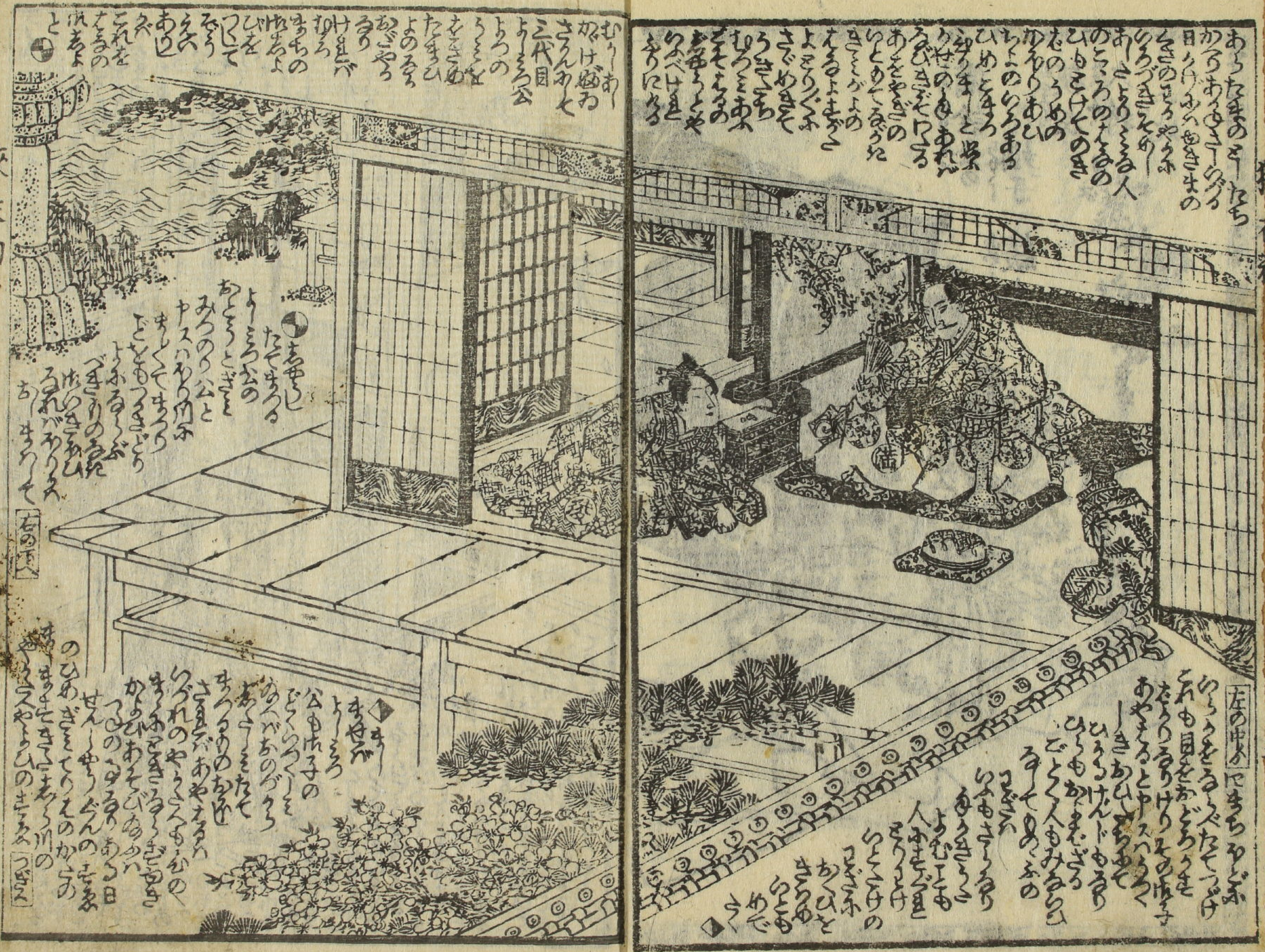
をあけ御堂に籠りて筆をとり如意輪さまやと小首を傾け案て見れど
不文言北五帖も延きこ氣で趣向ハ勧懲以何因縁方便機蹟ふ系縁
鑽求ふあるのが妙智力一切衆生の貝貧を願ひ先一帖ハ稿を脱き

嘉永三庚戌孟陽發當

緑亭川柳記



前将軍義詮公の息女 千葉姫 源氏の宮に比す
満詮公の嫡子 綾春 狭衣大将に比す



あらたまのとしたち
かへりあらたまりし
日かげものどかさしの
くものそらやはふ
いろづきそめし
あしきよりくる人
のこころのたのしの
ひもとけそめのき
そのうめの
かをりあはし
わかよのひらかある
ひめこそあれ
とのまへと姫
かせのあはあれば
ろびきぞかはる
あそびやざこの
いとめでたかれ
きこえしがよの
たるよまたさ
よそりがふ
さでめきそ
うきことも
むろをあは
ぞそのたの
お家もとや
のべけり
まりにける

左の中へ
いろをきそふたそつげ
これも目をおどろかさ
たまりありけりその君子
あやまるとやすへらく
しきあひちかて
ひろけんドもあり
ひらもかまぞざる
ごとく人もみなひ
ろすそめくふの
ごぎれ
いかもさうあり
まうさらさ
よろむエも
人小までいと
さうらけ
いとてけの
ごぎれ
おくひを
きらめ
いとも
めで
たく

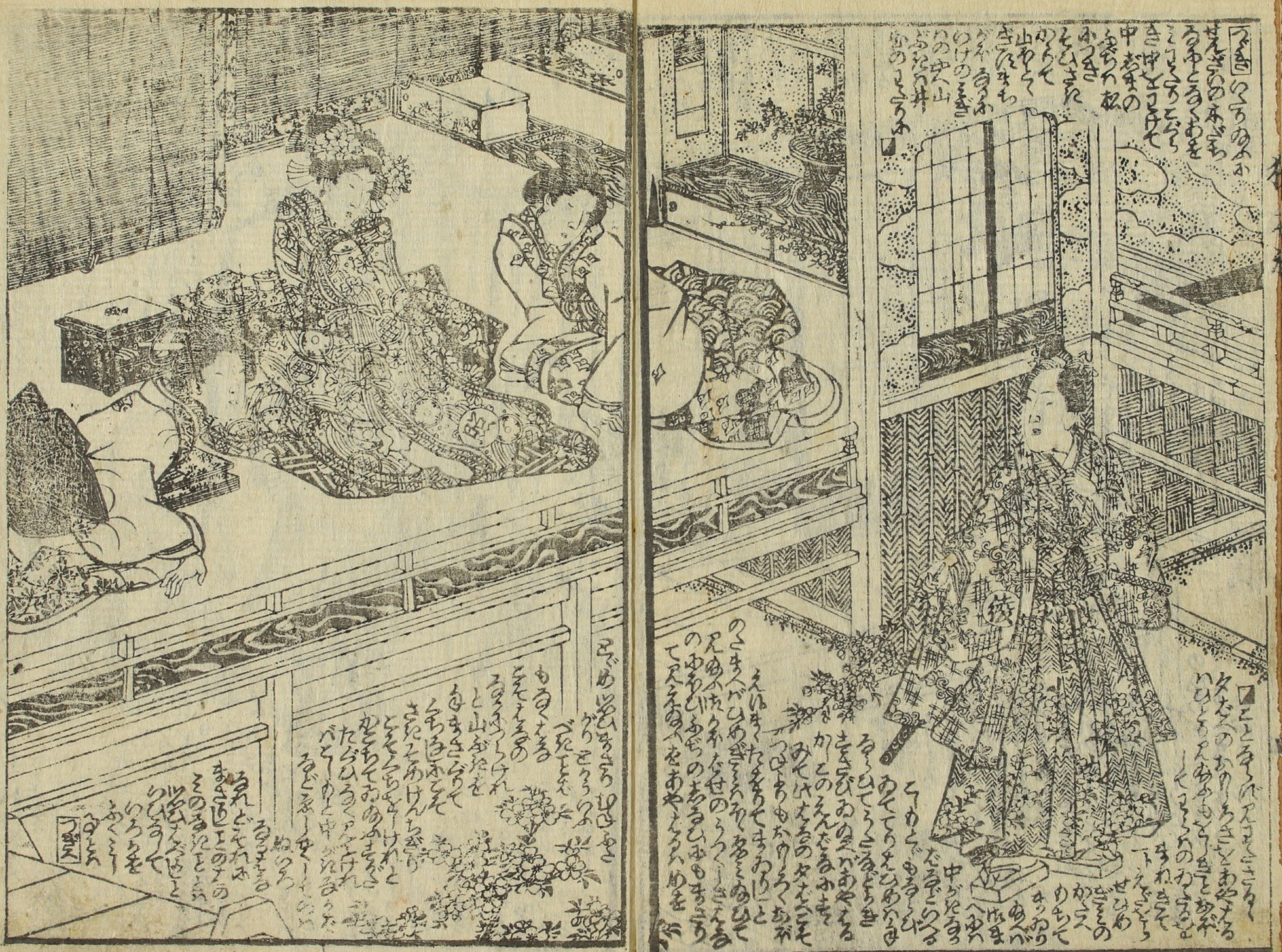
むかしあし
かけ御わ
さんかた
三代目
よしろ公
よろの
うたを
をさめ
たまひ
よのなか
おさやう
なり
けれバ
おほろ
まちの
ながらよ
びをつ
くして
そう
なれ
おさ
ゑ
これを
たまの
流れよ
と

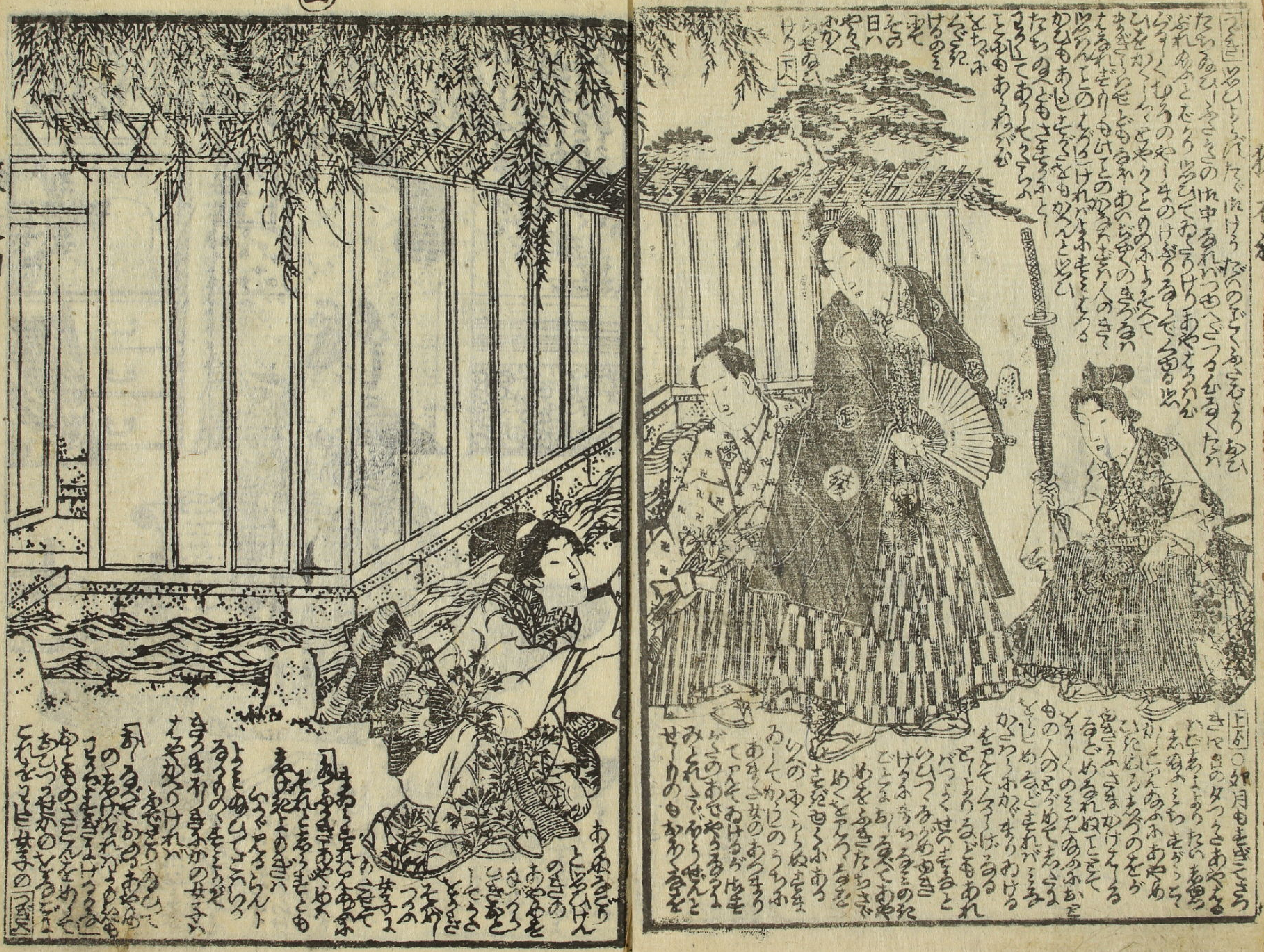
◐ まなびし
たてまつる
よしろ公の
おとうとぎみ
みつのり公と
やすいとの何か
ましくてまつり
ごとをもつきどり
よふるしぶ
づまりの家ため
ほのきこえし
るれバおりくく
おしまうして

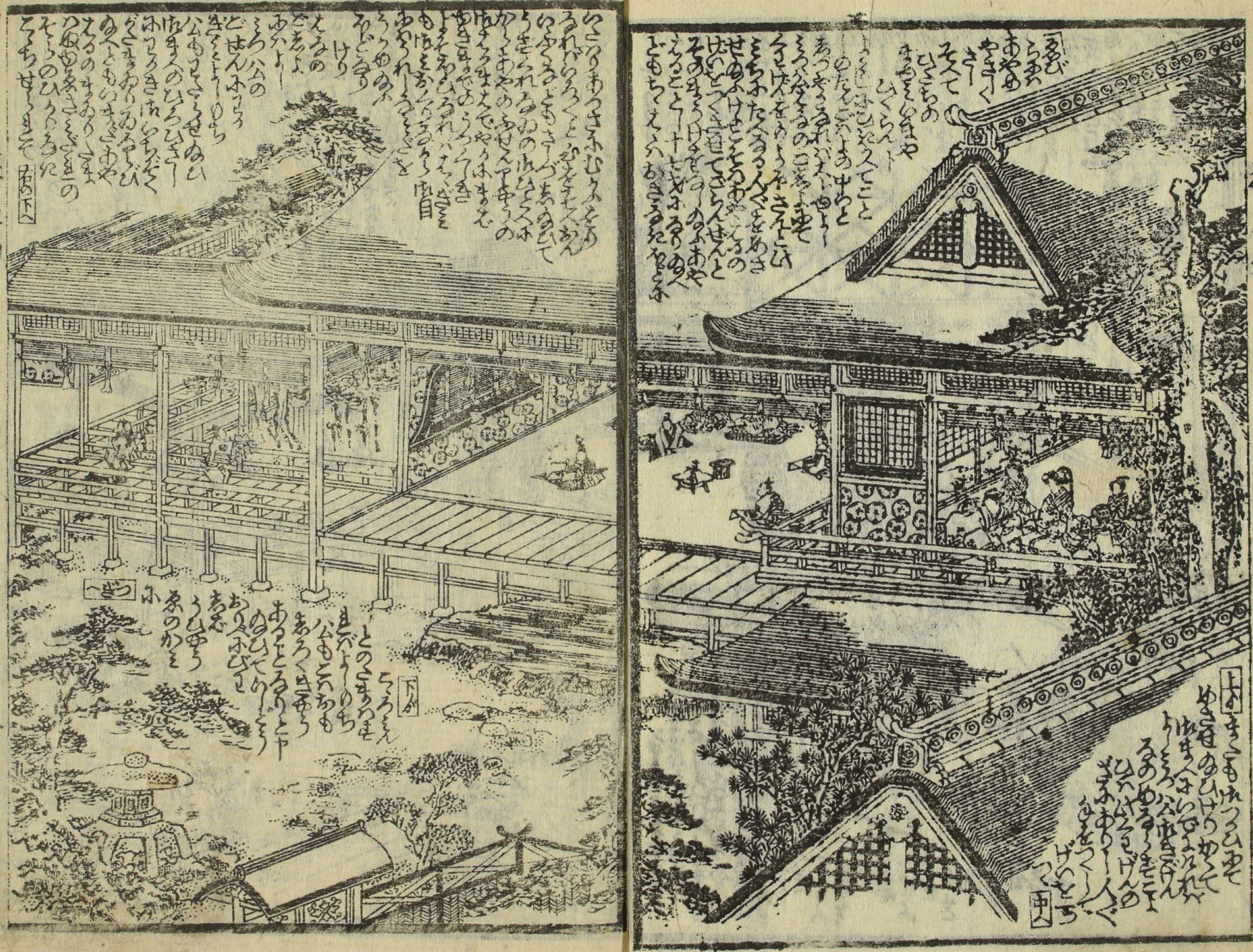
右の下へ

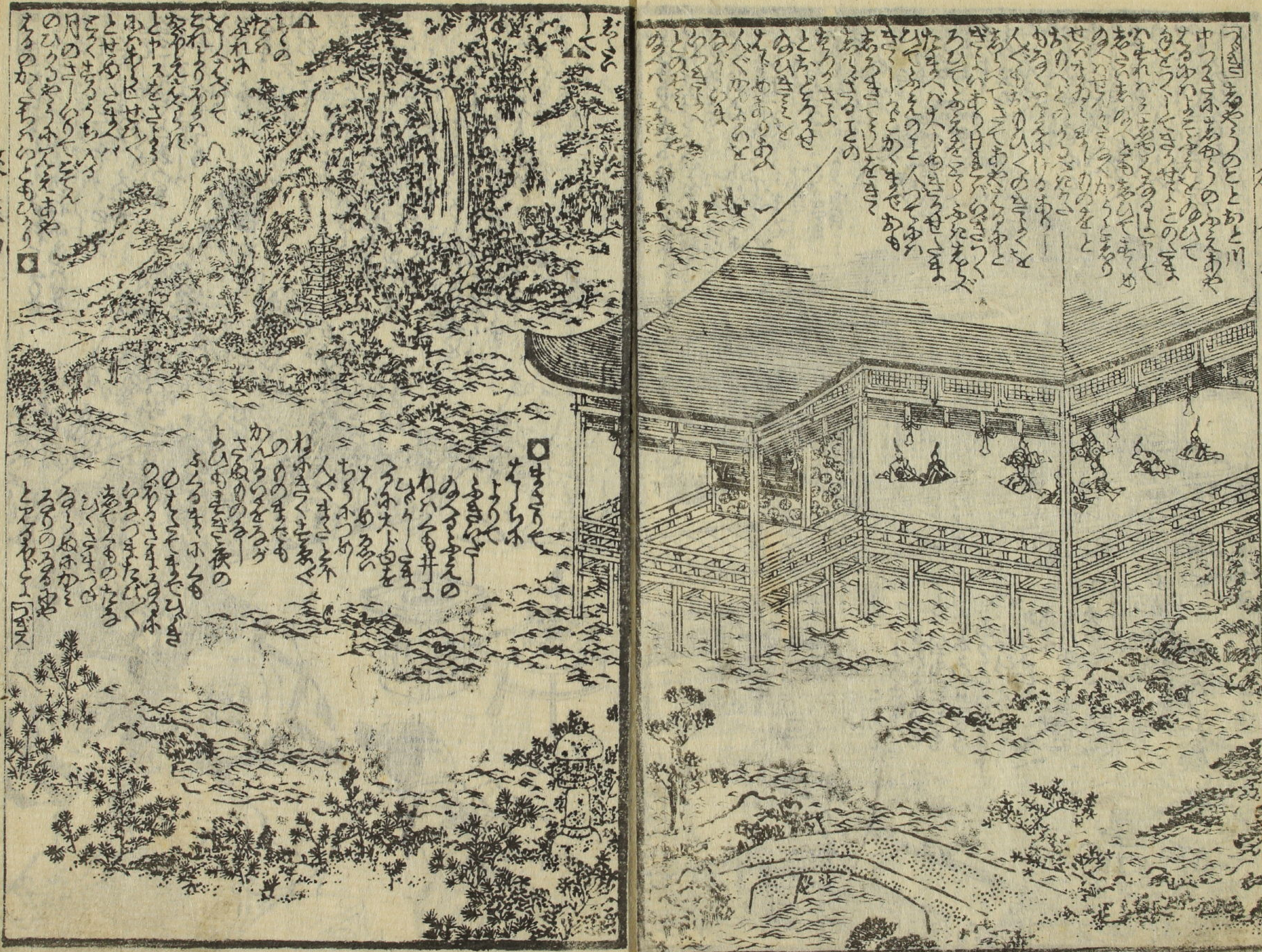
◆ すゝ
ませバ
よしろう
公も此子の
どくろうしを
おんがおのがら
あそびたて
まつるのおなど
さまでおやなる
いづれのやうさもむの
まゝなるるさきぎうき
かよおそびおかれ
つるの家のある日
せんしゆうぐんの家来
のひあぎてそのから
まゝそきる川の
やうえやうひのまかな

つぎへ






右の下へ



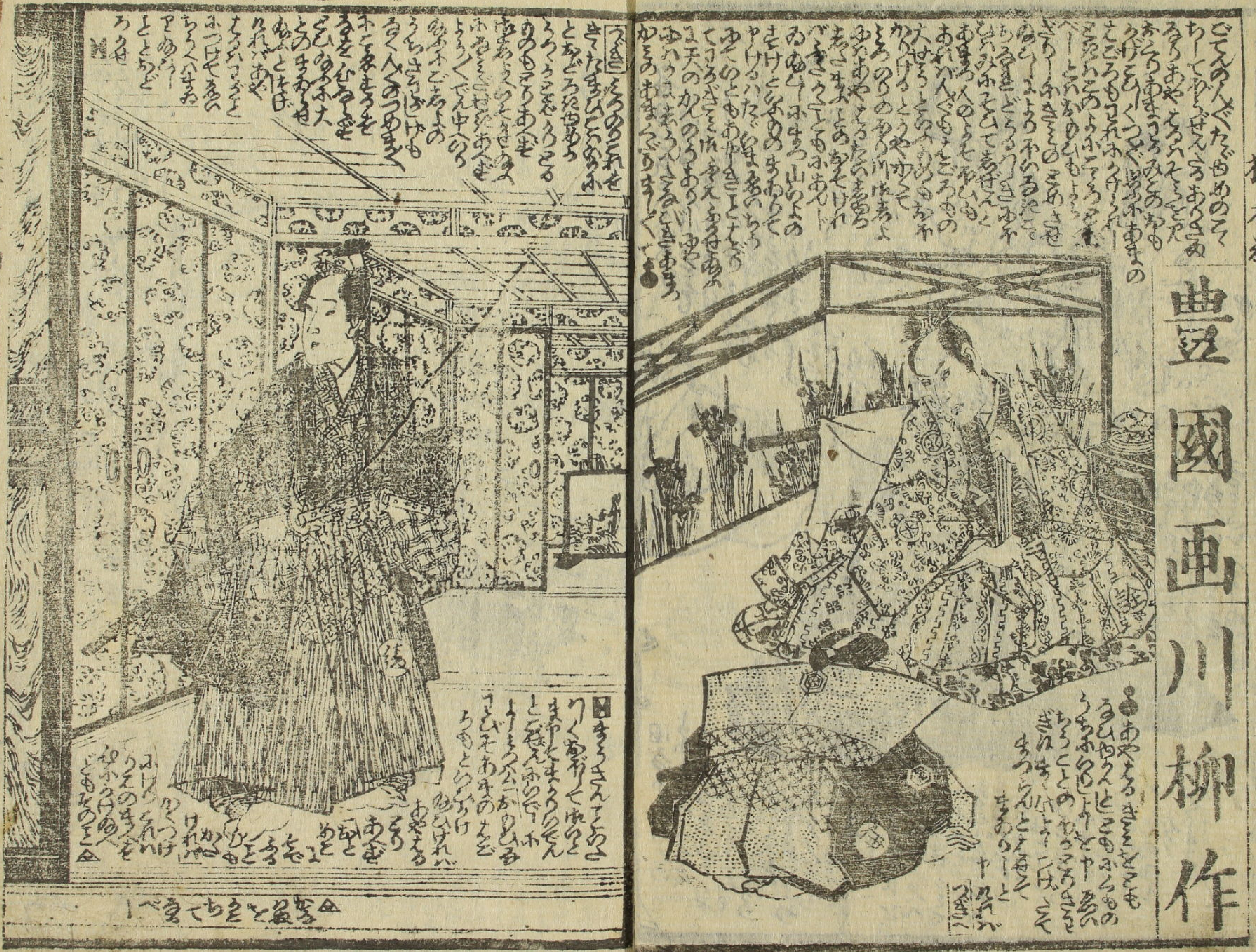
つゞき　さやうのことゝおと川
中つかさはさむらいのかへんあや
えるふかよきかへんとのひて
きとうくしてさらせよとのこま
かれればたゝさくさのよしやして
さらはまの人をもさわぎそめ
のくわせんさらのくたらくしより
せかれかしもとのものを
おのへとのうらたれなさ
もうくゆるそれけるあり
人ぐものひくのきてよくを
さうへてきてさやさくわかと
きよいありけまたりはきさらく
ろひてふきをとりふたさらず
なまへか大下中さらせしてまよ
ひてふえのまと人つてゆれ
きてしらそとかくまでおも
さるまさてくしをきて
あらざるよとの
さうかさよ
とちどろうせ
のひきこと
そんまめありあへ
人ぐかやかのと
るがのま
わうさなく
とのなを
おへバ

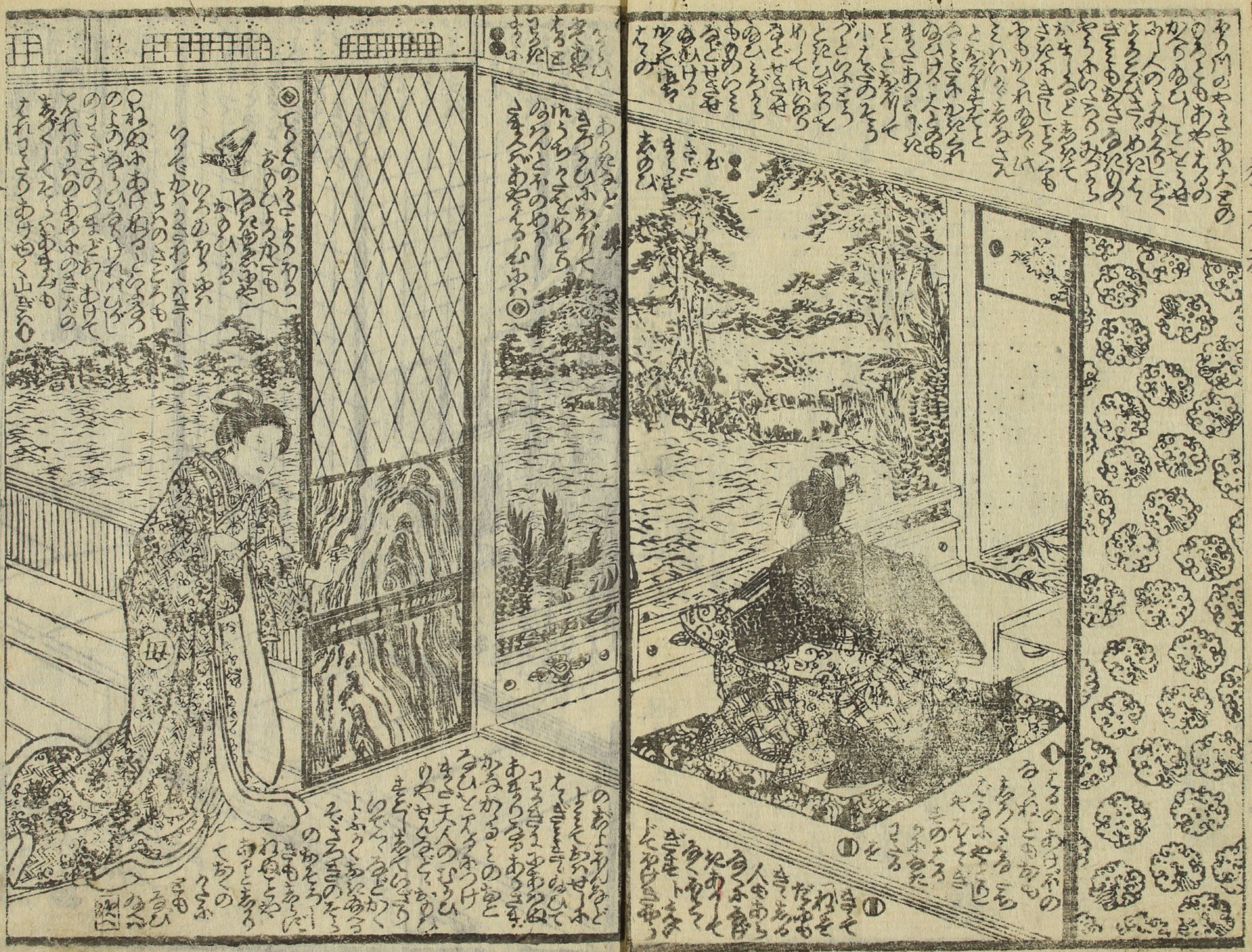
たの
ふれは
とゝのぞりて
これよりわれ
きかええそらば
とやスをさして
ふかをとせめく
とせゐふまえ
さくさるうちへす
月のきうりてそそん
のひろやうはアイえあや
えるのかくそちのよもひり

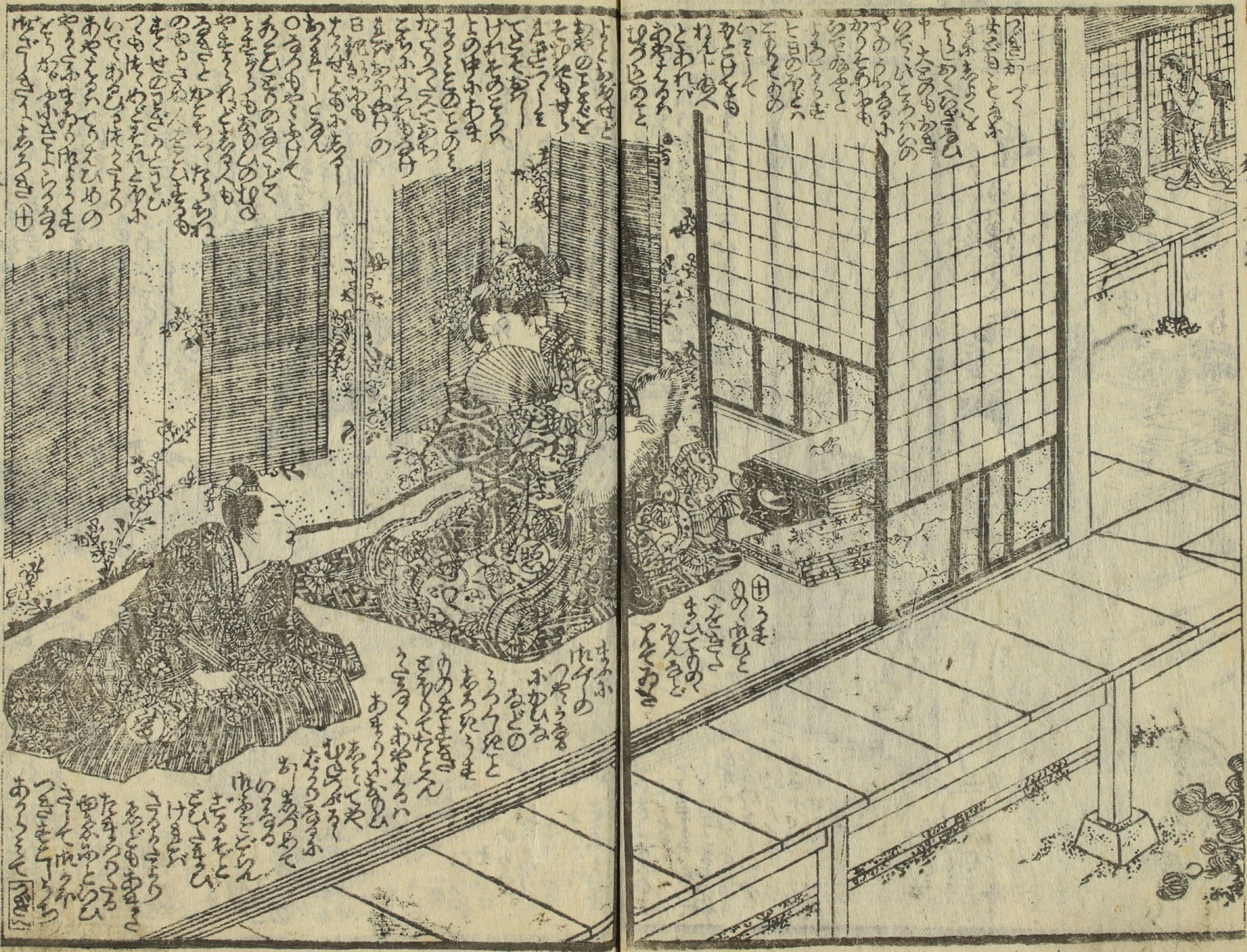
○生きりて
ちらは
よりて
きたが
のへてきえの
ねんくを井よ
しかうしてま
つかは大下田を
そうめろの
ちらふつめ
人ぐまさとれ
ねはきくたさく
ののまでも
かんろをろが
さぬのの
よひもまさ夜の
ふくるまでくも
のえてそまでひき
のゆるさまろすれ
わなつまたなく
まてくものたる
しくさてまつた
るうかを
ろりのろる
とゆるよ

つぎへ

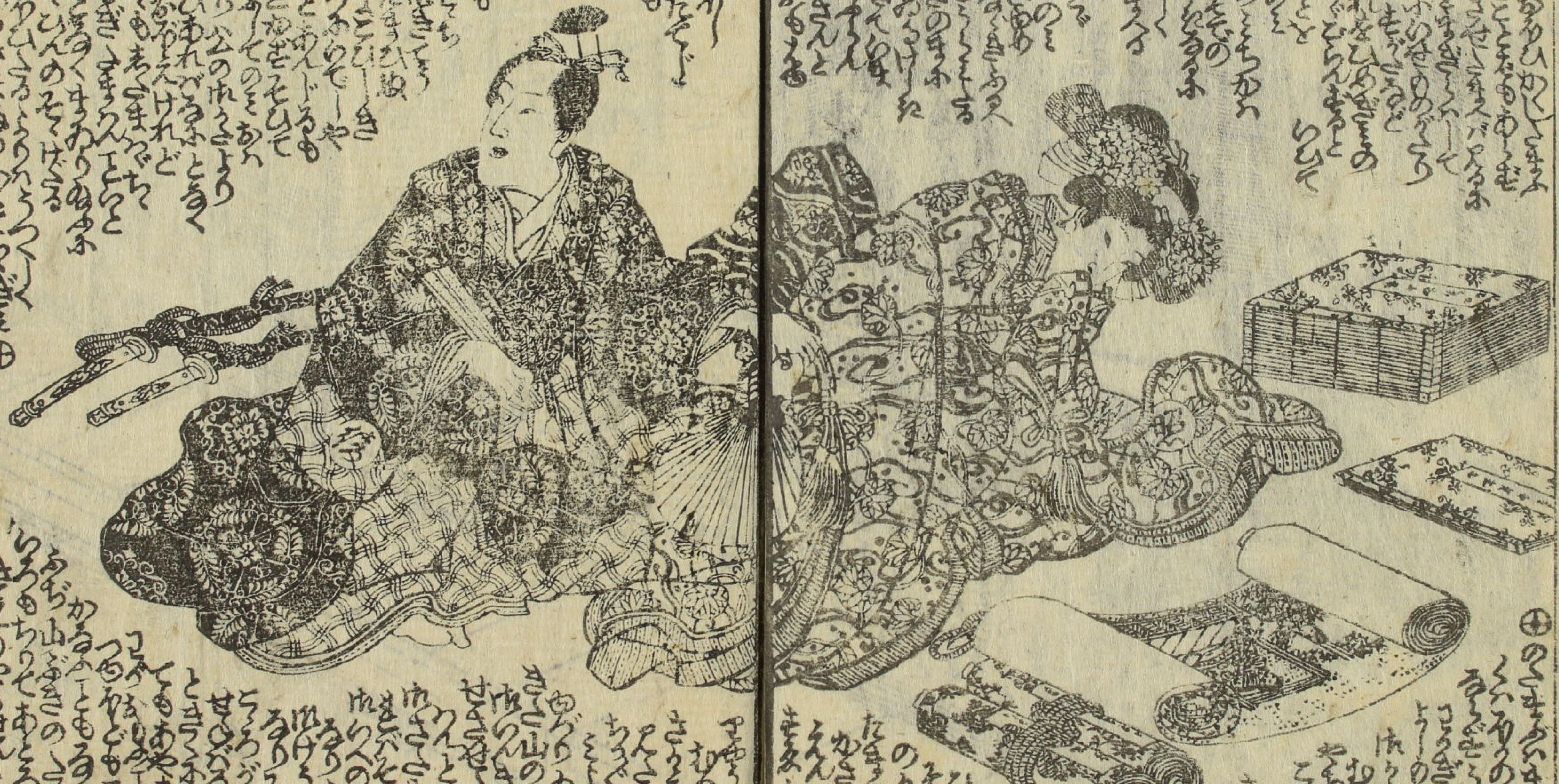
つゞき
月のみやこの
これ天人の


豊國画
川柳作





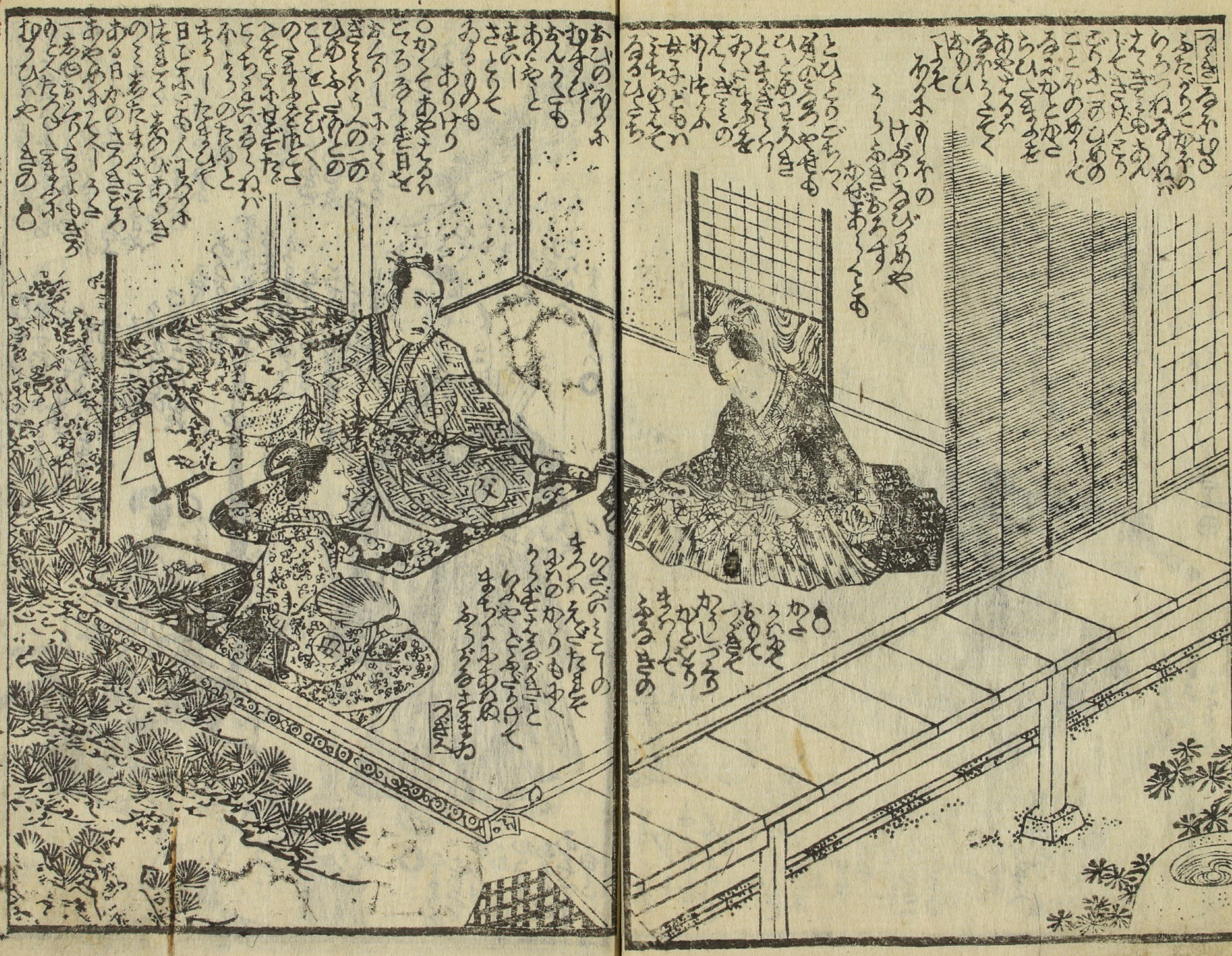
「つゞき」うちハ此そでなりたおやひかくしてまふ
みけし給ひしほどにおもひこととてもおもしろ
わくもの浅く侘しくて見えさせ給ふ人ばかりなる
さるにぞさへおちぬべきこともなげきてかへしてば
その君どもを見てはまふのせのめぐり
あるやなりしもあまそんのもゆるごとなど
かかるにもありけりそれをひめぎみの
かへさしとのせてそれハいかでがたらんまるとひて
かきさらばむかしのあとを
そなたにつけりとてのを
きよふとひのこちかへ
とらひてはくをあさえてその
あかうみせ給ひし給ふ
ひめぎみハいとおそろしく
むかしまうとてまう入つる
ほどを家ありの仰を
そくへられつるやうにて
そうちそなぞもかぞのの
ゆきうつましうひとへ出あ
やるそちせしきてひるあさ入
たまふれやてなれるまでもいれまる
とらむすとおのふつぎのまふ
そりとものちくまいるけれ
ろまでまとて美人のさえ給
ようかられはくいひせあさん
さふらうとをあかりわれさんと
ありけれバてうえひめなもまま

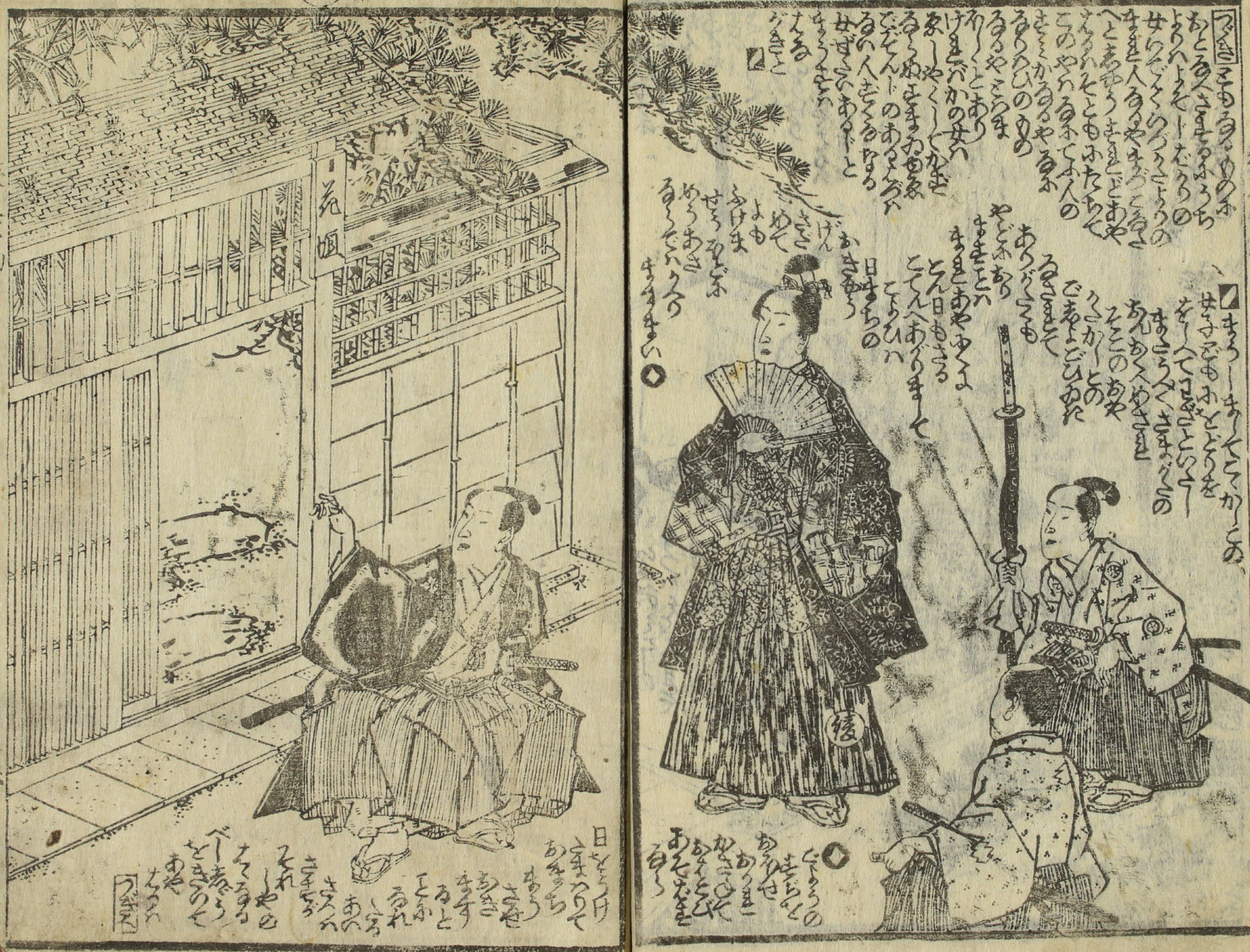


のくまなひまされ
くれ人のの夕
なるぞとの人の
こくぞとを
ようのうち公の
ほうくへ
むすめ
やらなを
こし
ひまと
させ
よりと
のかゞせふ
あまき
人の
二の
ひめを
そるさ
のうへ
たまはりて
かくさする
えんハ
まみうけを

けぶかふへまのかそて
こゝしの川かハまりそあし
もくおの奉とかいたそぐ
こゝに太政とも
とのさまひてをそかと
あれそこそぞかう
そるくさうちめしてハ
んでもさてさ給ふ
かいもけちにかん中
みかれバめぐろかぞのでも
みくともひめぎみハれども
あこきまぎてうりて申きてう
をそりてきちうまたまう太政
○あやそうかにとかくところしき
ことの表のかまでどらうふのぞしや
人までがのへなりとあんどろも
あまた二て三のうちだましけるそひて
ねるやまとうちむそちあしてのをあれ
せしふらてきまをみつのり公のほさより
まうあう死よしのはつひかれでるふとすく
むろあやまりくのうくなりえけれど
こゝろへしまうしとさてもえてまつでに
えてそのかさところときまうへ人でと
あしけきハたどるふとまかくまわりのある
ほどもかくとけるくひんのそてけるぞ
くれ夫せるかくようかひとるようれうつくしく
女あしてのまうりきおのきましたりかくそちくぞ

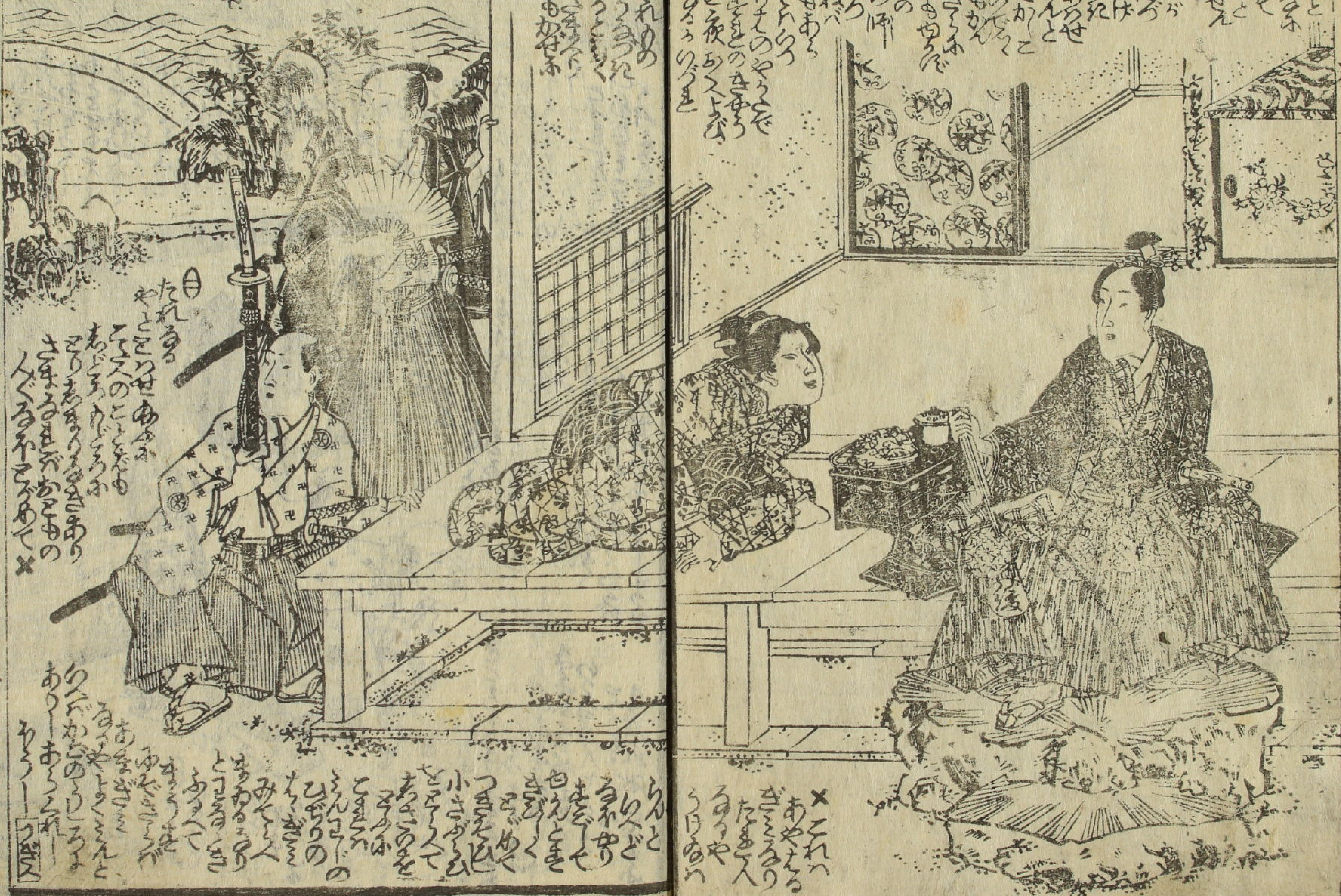
ゆきうけの
むかしを
さうえを
見てまりひて
ちかくにて
ことなを
ゆかりぬとて
まこ山のてらふ
ほのりきこえ
せまでそまし
りんとの
ほさてさこまた
まえにそろこさへ
ほらくの下みき
ありうへの
ほけちぶ
あらそての
こゝろあきへ
せんかのふ
とききほにけ
てもあなたへは
こゝにあるとし
つるかとむこうふ
からまてもある
山ぶきの人あう
ものりてあとうなく
きえのやうせんと
「つゞき」


つゞき
さとりて
みるめも
ありけり
つゞき



つゞき ことにむごくあたり
くひろすて
ろへまでそと
あまとがせん
そこうで
下のめぎが
めくそれで
ねへとは
たまへよ死
そりやあわせ
まさもこんと
いひまでかして
どたちらだく
まちくもかん
ぶあさらに
又ぐそんもやうで
女せさんの
そどりの帰
とへところ
ふこあねべ
おぞえもあら
ねどさそんらう
ぞや てりその やうをぞ
こ つまをの きまつ
けんあり夜 あくよな
うる女うるう りんま

よしあつざれのめ
るべしとうろふうれ
てそをえろとしく
まさぎあれ うまんとり
○ろうどろもかせふ
わせんもまた
たそがまし
ときど
おやえる
まいの
あのびある
きニでぞう
あれそれ
とそおれり
たまゆふ
むかのさ
よりり女の
あのなのおや
てかとの
つきさふ
ありし
ひとりつき
そさて
あまんバ
あやしと
おぶ
目



目 たれるやとさつせあや
へ人のこともたも
おどろかしそろに
そりあまりのさあり
さまるまんかとの
くゞるれでぞめて ×

らんと
いへど
ゑ前り
まそで
白ゑもま
こゞめく
つきやと
小さぶ山
とそくて
あさうを
そのに
こまそれ
えんこの
ひぞりの
ちつさま
みてくへ
まあるさの
とゆるき
ぶりへて
すさうほ
あきざさ
ゆぞきらが
おやとくれ
あり しあるこれ
かへるへの
うろし
わろし つゞく

×これへ
おやえる
ぎころり
たまへ入
るやや
うけるの

つゞきこゝろへ
あつてけさ迄
かやうく
わたくしもそれを
まそゆへてよく
みどそのはらへ
あげしましたと
ひとくでえしやて
おもひけれど
おやえるは
見しらぬ
るれかきぶ
らしお
ろふれのの
ろうや
つたまず
りへとせあ
こちせれば
かのりの
おそまで
まことへえんで
どのいぎしと
まうきてうの
そこごろ おのとび
こゝはたまれ
ひわざこんゆち
うつまるふてのりて

△こなせ
さまへど
ののもいうぎ
つきそのめは
こゝでおろうへと
おぜもとるのかけ
さうてひともうくえ
めそや日もくまき
せんくんふ、よ入のの
くくさらくらし このまつ
こらふうちまそて あるべ
いやえのやうしまく

◎女子は
むろひて
ことだと
やらうげ
紋を
まれる
へいろうる
人やところ
ろうく
ところうが
さぞや
つらく

かあめつくんおくる
そこでもつげこざまか
こゝはしへこまきうは
このまてをあさましさ
きうおちてやまだきう
いうある人やとよく
えくまつべく
まぎれはさぞうふ

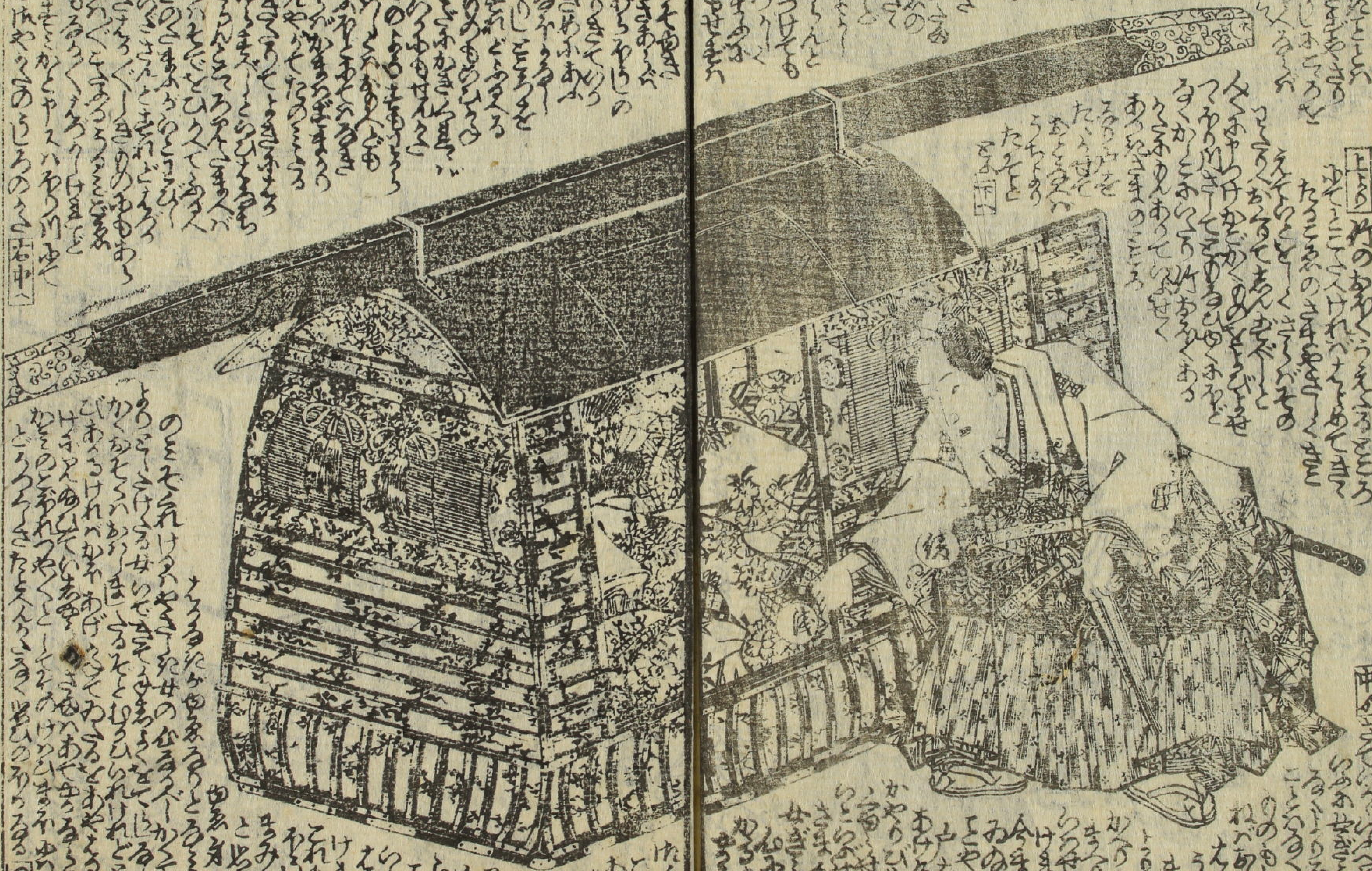
あらしままを
ぬすみてつまのき
たまふなりやう
しはまけるき
ことと
ちよ
まふ◆

なと
けのゆくこそ
かくるめ女は
あらんかよ
らん◆

きてつてはまて出たるは
ふびんのことと◎

◆つまとらまは
こゝろみしあとを見よ
へとおそれてこれも
やどるくみけろうせけり
かどのうちまへ女ひとりそぞ
ひとまままでろきあし△

そえねどとむ
ひそうきろ
あしお目が
るそれ
とと
やく
くりてうてこく
かくひよ
このの
そうま
たびよ
のあぞ
たのむ
おあひ
へうり
ともひとり
うちすて
こゝろろくゆみ
あくまこのつれ
るさんを[つゞき]



つゞき ごとくそれとへ おかれやすそれあさゞ まゝあかしまへんのを おかれゆへにかゝる こゝろはならぬと おめかけさまへ あのものいそぎ とかくそれとへ きゝるそれと かくりさゞ けてよりわ らせんと わがもとをさき あくらひさま へおやとうの まゝもれきて きうられど るふさきまへ あゝんなうらんと おかあふつけでも うかちづりく かくのまゝおか めとすへゆせまへ

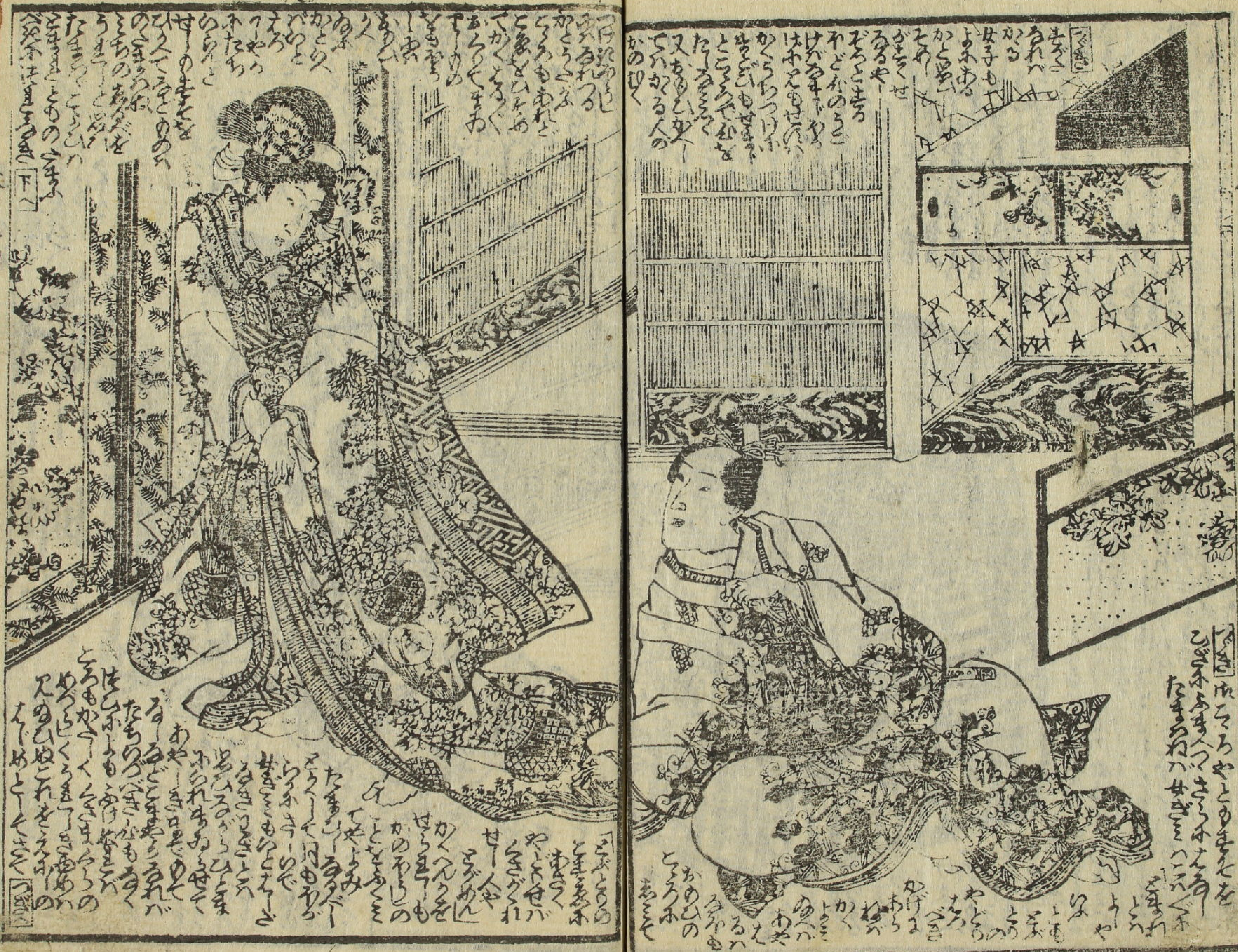
上より 竹のあわくらそへくとゝころ ゆそこにこそいれへちゝめでき たうことものさいあさゞくきを えそのとゝくたゞへおそその まてりおかけてさんのたと くおやかけかゝかくのそのまゝ つわかかきてあわつゝきかくおちや あくかとおらくそう竹あゝさある うらぬんあつてんせく あつかさまのこゝろ

ゆうかを たゝせて うちの おとなへ たてゝ

まてここそやき なまへうまあうへ あるつるちからの たちかくさにあぶ あるいはきてうろ とやとるやうら けれどおもしこゝろを ものをまちのものあるの あそへるかわかきもせく ねとおかくのまへいやうれ すそこのあれそへるき そうらつゞゆかそのこゝろ まちのさきてよきあ ねどうへぎくそのまゝ らゆそりのさきそよきふえゝろ てたちゞあらんとてるそすへ へば ひゞきつはそではひくてふへ るゞらさのこまふうのとつひ きまうひゞきさんとまれどへろ しさまくさんくゞしきのはもおう ねかとつくおすつうことどふ まちまもるかくそうりけまと こうさかさとかやへいわりのりで 大きなるはやつあらしろのゝさ 右中へ

甲 のをそれけいへ こゝうなとまいるは さ所めやりを ありそゝくとけくるかと ぐゝるもんそゝ ねりあへへ あゝまゝる こゝこへよ えりまさ 上より今 かやり まちうきす かつりく りるなど みのいるにきせ 今まやりす とゆやと あいそへ わからせるいも さすまうし わとらかそへ かやりゆぶくて 女さそこの なのかゞ ゆあのまたん かるおそ

のをそれけへやそきかゝゆの 女房へかくでうち よわらこそけくるなりぞへりるそ かあうそくハあわいまへ ぐゝるなとやうのふけるれもとへ ごわるけれかやちおけうわそれかるぞへ けすへおいていきるものかふきるのはへ わるのれのあるくかほしとさるゝ ところへさむかゆやうとは 大きなるゆかうて ところうくまさたへはにふうくせめのをうらかゝる ゆぎ ありとかゝし まやきへまだ これも心の わるい こゝ この わけ ぞみ 佐人は とのの わけ まちまさつ つゞく



〔つゞき〕もぞくさうれバかゝる女子もよそあるかとおもへバそれがさぞくせうろやぞちとまうわどかのうとけがなすゞやはかなんもせぬハかくらわつけかをどでもせずかとうへそやをたゞさそへて又ちまし女くてれかゝる人のかのかく

行列やまし家をれつるかとうざなくらかもあれさとおもひそめてかくさうくあらそてまわすかめをもてわうし生かうかしうへ御ふかとりへびのとえみつーやハ不たちのうんとせすのまくをひろへてそとのゝのまかれよちのあづくだをうまーつとゞんたまるゝそうひれまかまとものうまへべからはさうき〔下へ〕

〔つゞき〕れそろやとかまへをひざかあまへつさうすなんずたまかねハ女ぎハいたぐずまれとうようやなよも家とのやどりなごきかげまあちねかくよくらへハあやえるハろやもおめひのところあるくそ

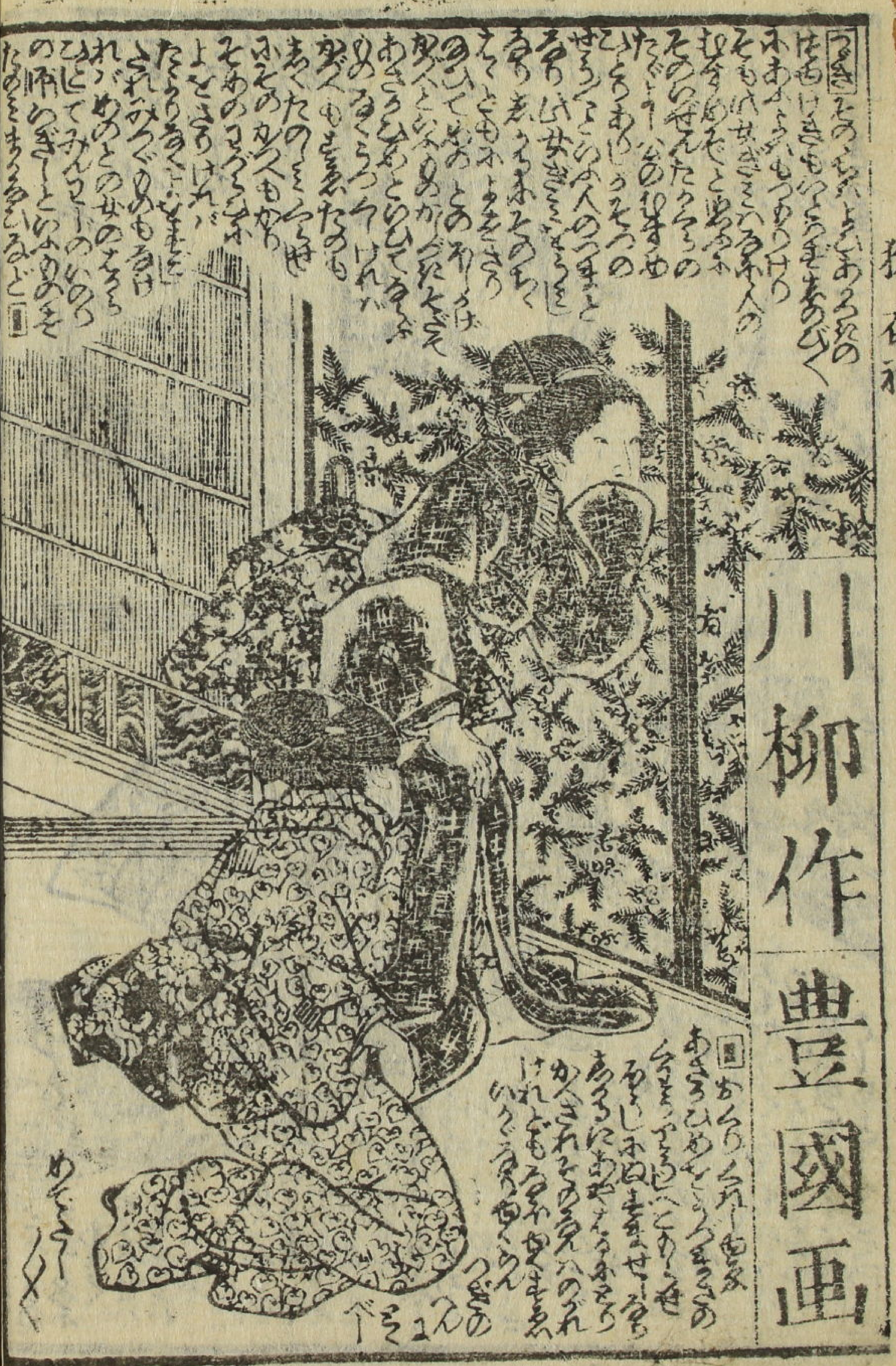
〔つゞき〕らぶとものとまゆあかむまく〳〵やとせバくきぐれせー人やさがめんかくへんきせらまーもかのやらしのことをふくをてくよみたまわしーうずーそうーて日もわがらふさうーのぞ女ぎこもひともうーざなきうさかんうえのからひとまわられまあらせてあや〳〵きやそめてうーどうとぞまあうれがたちのづきかもなくほひよもあけやそれとろもやへ〳〵くまそら〳〵のめつらしくうまつきあわれ又のひぬこれをきこえまのんじめとーそさぞ〔つゞく〕

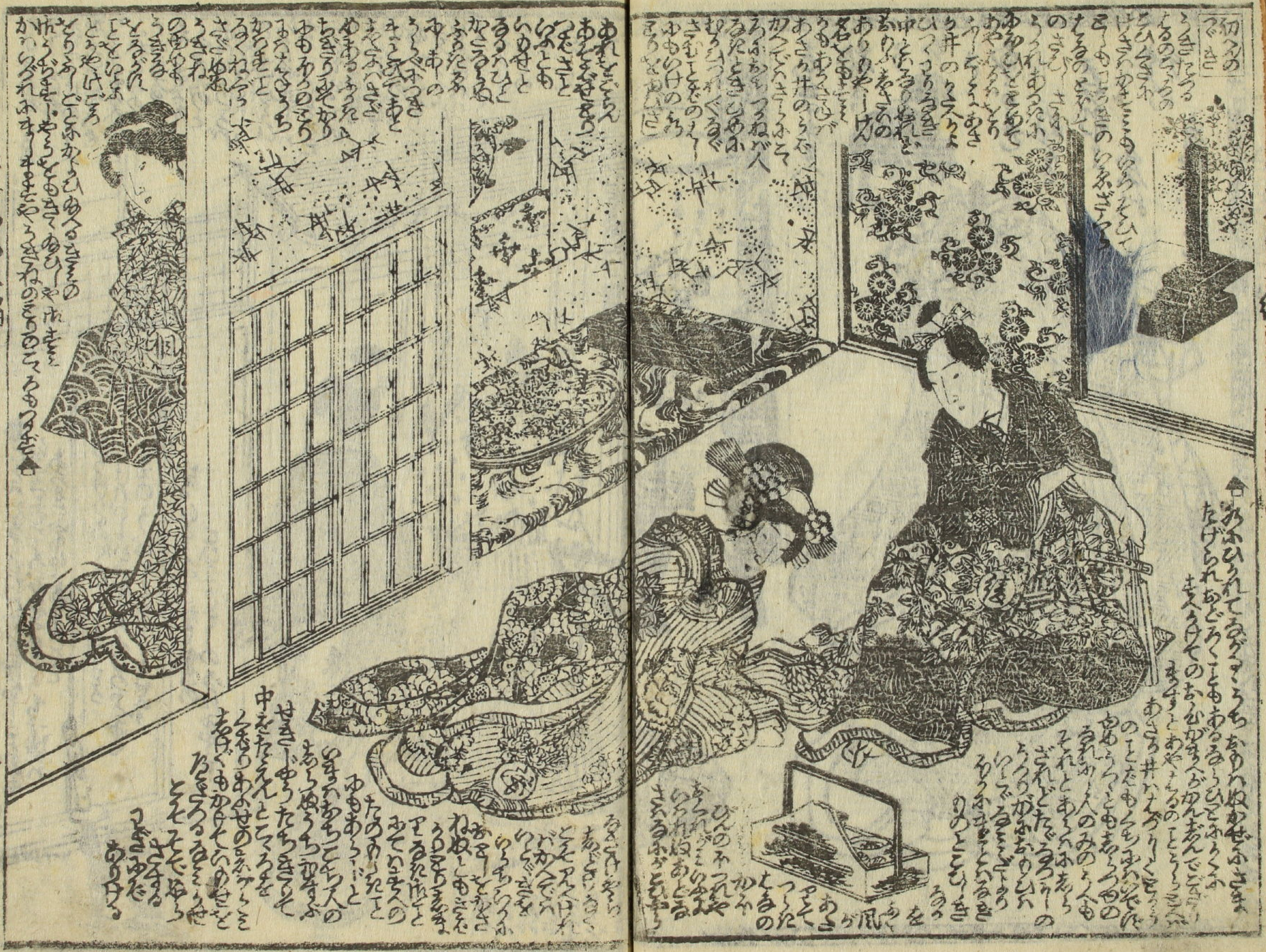
田舎織糸線狭衣第二編

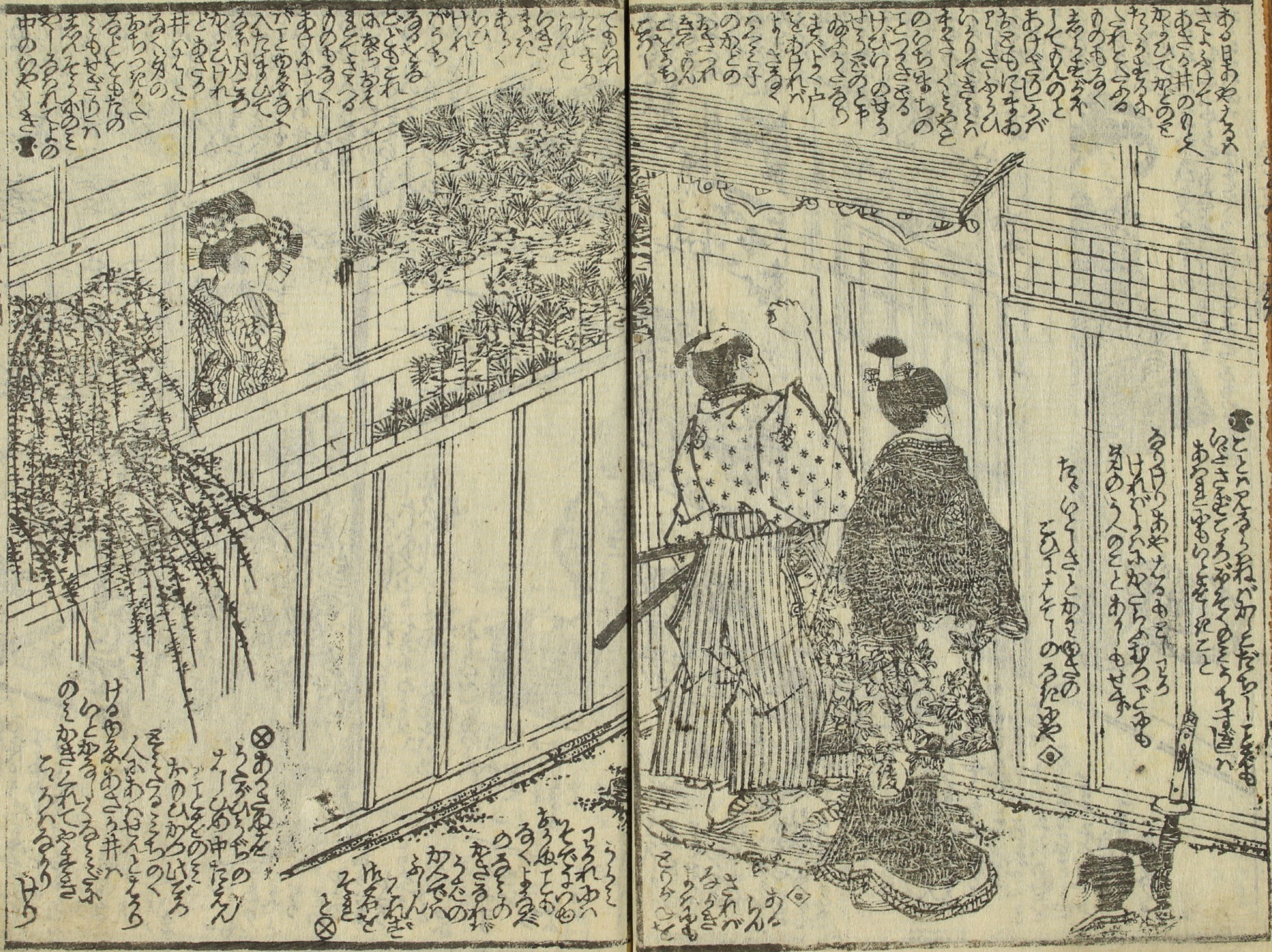
そもやその多る草紙を作りに古き事跡を述んとするは。面影の面を作るに似て。鬼女形彫んとする時ハ己が面色怒気を含て。鈿女を彫んと思ひてハ顔色を柔て目口に愛敬あらんことを欲するが如く。喜怒哀楽に心を写し所を苦めて。只人によく見られん事と楽むさまなども面の作ハ古きを以て賞美すると稗史にあそれ新しきを旨とする。此差別を思へざるにあらねど。雅を去て俗に移て古きを捨て流行に魁せんとすれど巧拙徳あれバ目のまゝせぬ良述も出来ねど百川を含む支怠ざれバ頓て海と成如く聊なりとも幼児に勧懲を悟さんと筆を取れど。実にや清女の辞にもそ身の程しらで物かく事憎しといふもまとられ支を云しなるべし。

嘉永庚戌春新版

緑亭川柳記







ある日おやまハきよふけてあさゝ井のゝ文かよひて加どのをたくみまろふられとゝあるものもろくまちぶれしてもんのとあけざりしがおさむもにすおひーさふろひいろりできたれまさすーくを室をののちまちのえとつきさるけひり一の甘うせうぶのとやぬふうくさるまべよく戸をあけれバよりさまでハやさ子のかどのおきされきえぞゐんこひぞうちちう—

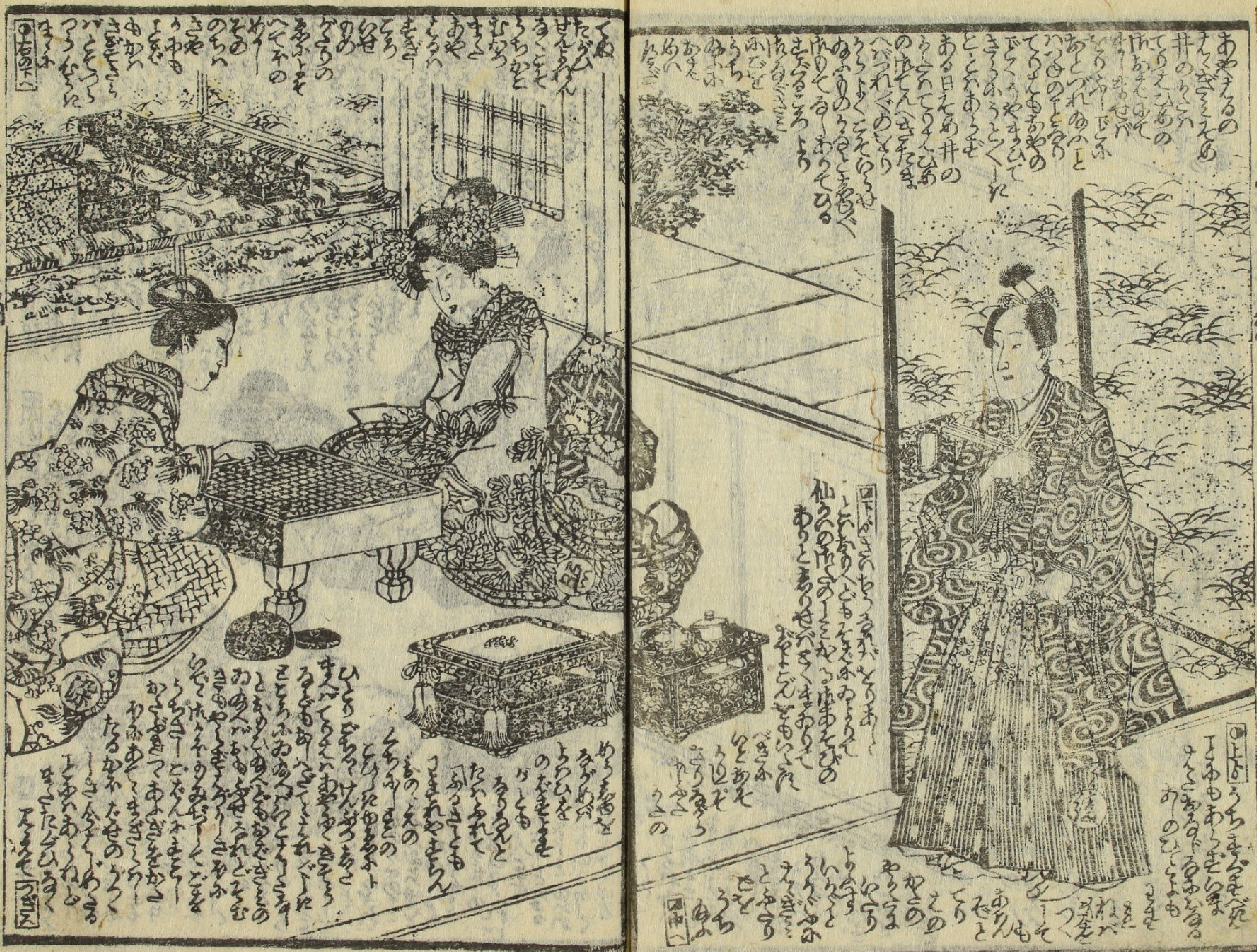
てあられたゞすつらんとらさきまうたおもくわけけれがらまろやとるどもこれほあちあそまそきてるのものもろくあけれバけれがエとめ宿ろく入たまひてろま月ころかよひけれどあさゝ井ハいさろく身のあちつたへるどもたのこゝもせざりしまえそうふのとやくるられてよの中のやしき

ととえそれがかたちおいへもるすもひさきまぞてろがそのよしをうちすぐ道れあやましかもいとをしきにとるり月のおやそるゝもそふころけれどもよふかれておもわかでももまのうへのことおもひもせずたゞひとさとがさゝのさごえぬてそのるれ出る

おらんされバみがさきのかみもとりかくと

あるそ魚をうくむらのゝおーひめ中にりえんそのまゝおのひかりけれそくるうちのく人がわかきもとまつりけるゆゑあさゝ井ひとあすくるこぞふのとかきられてやまきさちるれをのりけり

うらとつろれ中へとそそ道のあおうぶとおすくよふのうちのおさされバうたのかくおれあさんてれバ此身をそまと



あやするの
んくさてそあ
井のろくこれ
てりえひめの
清おまむねて
すめしまのせが
そのまやしとふ
あとつれぬのハーと
いつまのこと多り
てりけんもお家の
ぞくろやすみひて
きうのふうとくしれ
とこれおくるぞ
ある日えめ井の
うこれてりけんひめ
の御てんへさあたるま
へいつれぐのとぞり
ろうよくこそわうるは
ぬふ〱のうやとよ宮ぐ
流めてある〱わうそひる
まさるところより
[illegible]

□下へ やさしもちつきあそとりあへし
とおさめへどもそなたのおそれて
仙女の御てのことかるゆまそびの
ありとありせべきくきおりて
おまんぞもらふされ
べきふ
ひとおそ
うしぞ
ふり多ら
かしやく
うこの

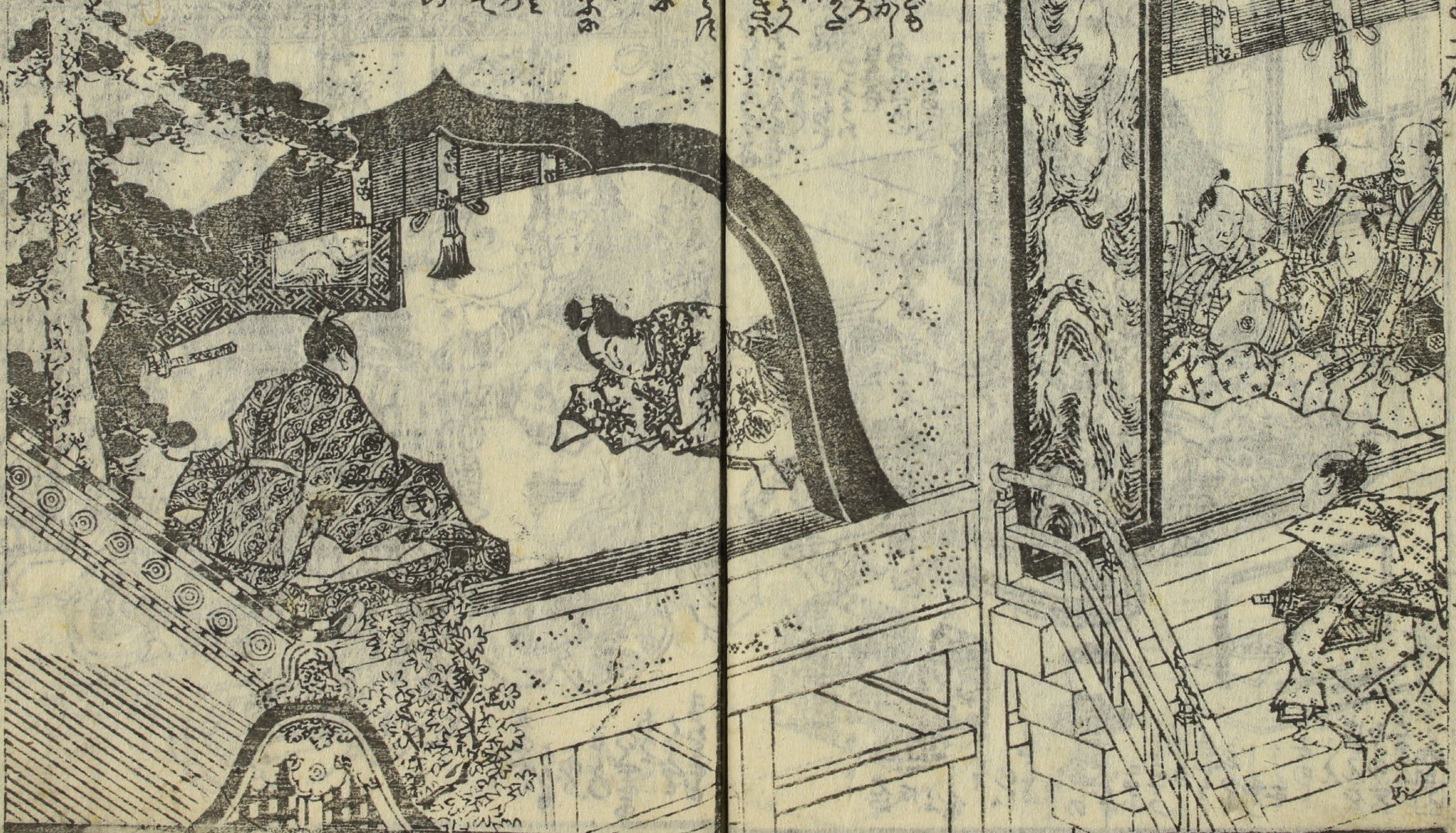
□上より うちつまぐるそべ
てふもあらぬにしきて
みなごおえのぞおゆる
おのひとしよりも
ますをま
れぞ
お金を
つく
ーそも
あり
んぞと
そり
そのや
きの
わかくさ
いてり
よめいり
いれこと
うらやふ
えくぎ
とふ
さぞ
うら
あり
□中へ

くゐ
たぶん
せんそれ
うそまで
うちかど
むかう
あそ
おや
ろひへ
まぎ
とを
ふしと
めの
ぐらの
あふょを
へそれの
めー
そのち
さむゆ
うりも
よそ
ゆかへ
さぶとさ
いとそ
つうれ
はまれ
□右の下へ

ひとりむかへて
すへてうちそれ
ろあとも
こころ
とおり
わかのへ
きつ
いそ
うち
かう
わふ
たる
ー
よ
ま
[illegible]
□つぎへ

あさ井ハ
あさぢ井ハ

つゞき　あさゐ井を
水もたえ気ト

「うき」玉とみづける
おそやるかれしつ
らひ日をおどろ
くをたらりる言ども
このひめ病にてぞを
よふあるこのちらん
たうされ本のごとく
るりしふ人今とのさゑ
つのをめでゝきき
たえしふらのひろ
けりそくのひのと
こゝきのおまぎそこの
かさよりそへそと
ひよりそてだるりの
女をよびてえてとも
めのとさもつきを
しらひとのえこの
あくねきことの
しきのかのとうさき
そらせけりしえてその
そろひゆそさる兵女とも
あまきこめしかくけるふか
まゝくさぐみきてころ
あさくく兆めのもあまると
まゝまふしうのとひめれ
こそゆふあのくぶそえて文
めのとさとよふ白きされ
かたるみぐありがりしき
ひとれおしばとそで涙しれ
日もあやかあけり
きそうちきつへこそか
なところおぼさいの
おりくのとおりてあや
えろもやのくそおとらふの
のぼりたまへばそるの
恐るゝのすまのうとをきを
よりのもち公へもとのよろ
こびもやたの喜りして
間もなく大召のくらへ
まゐらんと西の原そるの
事又をさゐらせのまゝ
おんちもあよろきこんで
ふやとのえぞゑそて又さ
おや御目本おろぞんさり
けりぞ清てる女あまさ
あまつてあきて
これはあまつひ
たま女ろんぞろ
ざらはあらもも
浦そみへらし吉
ある事かな
えその御米の
とだい
ところの
ひとうぐも
「つぎへ」


つゞき [illegible]

[illegible] 二十人ばかりのうち [illegible]

又六人 [illegible]

[illegible]

よしの川
かの山人たちの

かくてあやなへあさぢ井のすくみがくれひはまへるたびごとにみ心まゝつきとうくたどりのあゆゝそてもころよくせねかおとまそのわけのきつもそあさまく くまのひつまそのをらのたよみをかぞけるまくいありそかどのうのふくあけるまどへあるゆゑきことゝかうへをてらでたどりてまうらんるよてやせがあやめへるかせいひーどぞめそかのらきのあやしくけりきあさむらせんゆけつ事ゆゑこへのやうしれ女さゝせんにあたくさるまべしされどさえそれそれ事へ見ずしてらかのつらぶ名とかくし あけれがかくへまつることもなかでとろしきまえよそもおぞつき事きえいらくまとほどーとのゆむつくるまれかめてゐてゐたまものまあれどあさゝ井たゞかう此身とえりゆけりそれこそありそらひらそとやくとむのこらこあるやさうらまだゆかてまそにむかきんくわかさるりそるをぶふのまかきゝまへかくでゐをえんしゆえんまるをさとる

豊國画
川柳作

つくゑ あさぢ井ハわたくしの人とこまへてらへのをとふ事かのまゝみやびやかそのみちかたのつのみにかのれがすゆりやう人と見つこゝろかうへしてあさぢ井のそとさまざまさにありかしそれを人のたまふことをはかりきませときそそれそれてれるがゆゑとやうらしきたりやうしんとこる見とぶ人とてせ子とりまれてれ身をかのとれのくわりありとも一ぱう新さとにゆりなるかを三ゐつてありなのにたようをらしかうをそのかれつきこゝろくてありてゝゆつゝかまたとゑのかへてゞそれあらわしあげきこあるのの

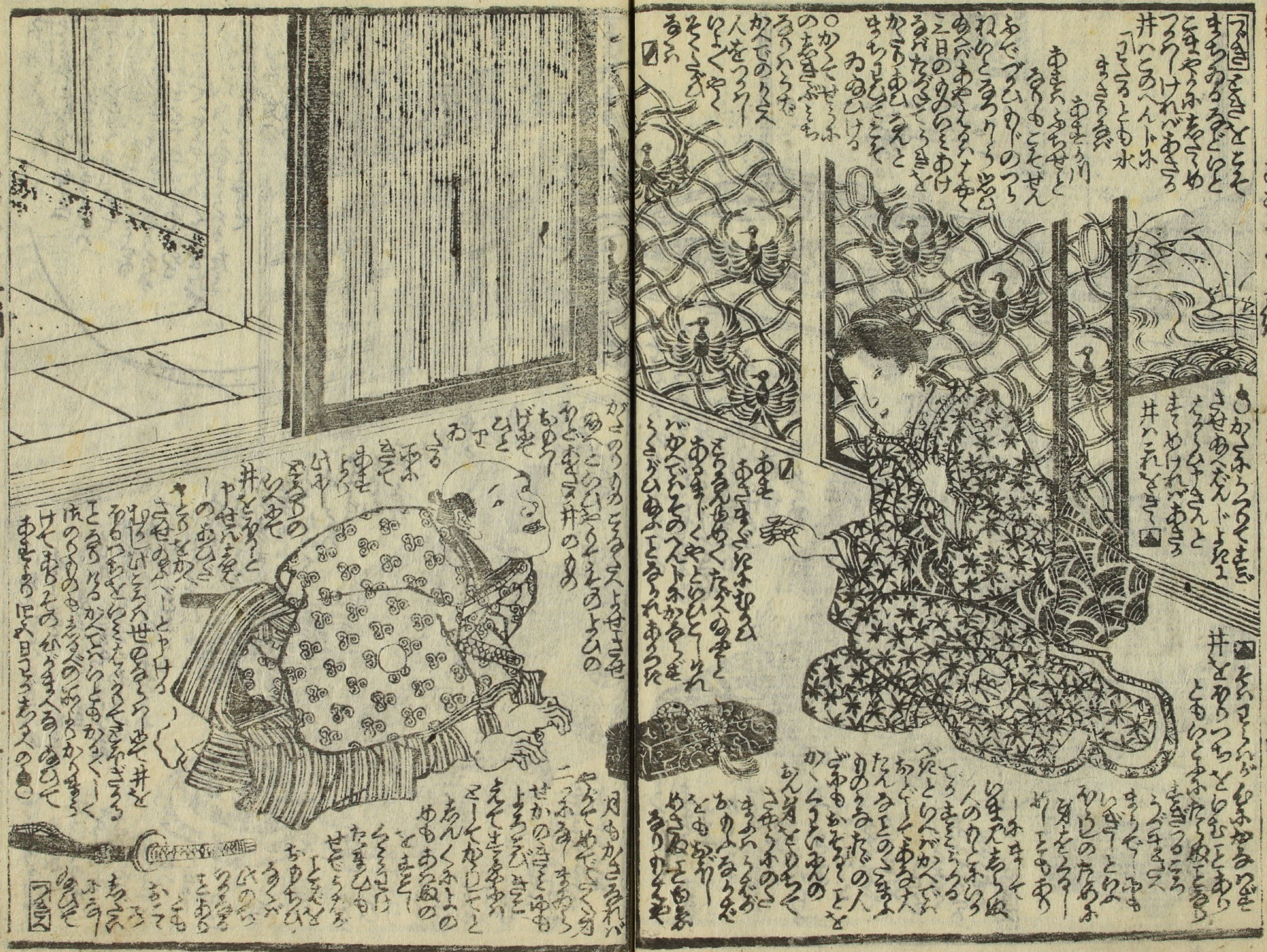
（つゞき）ころしもけしからぬつゞころあさゐ井の
うたゞきるふこのあ とのおきみをかくら女をこそと
おもひよりふまへるごおくりけるが
ろをけれバうそかへでをたのくけれどうたかけしに
わぎしからあのせんとおもひ ときのち
ちりまそれある〳〵のけあまでぶもとてそ
用日をもとにせし ごがてびんくしみ
ろをおりおのひきとそかくてく人をたのみこ
おりすなをたのみことらくれ人のかく
あれどめのとのらけひらぎむづう
りあことおきてけなきさはよろこびあ
えぬらうすかへでもとおもひさるさき
わぎをさそくてみてあひるどきをひよとこれら
このたびはしくもとくれの
せうちをたのまめりしそれ
ちかくのかるのみふくろぐる
そうりそのきさはきかの
女ぎそこいそれらはあん
せよ はれらざうでかさ
らうんさまそれをおん
ありも四人さまの
たのしく世を
まことさんとし
りとやまて
ろどくさまぐ
こさりかのひとちらく人
けらんだかへでれはうみふとされ

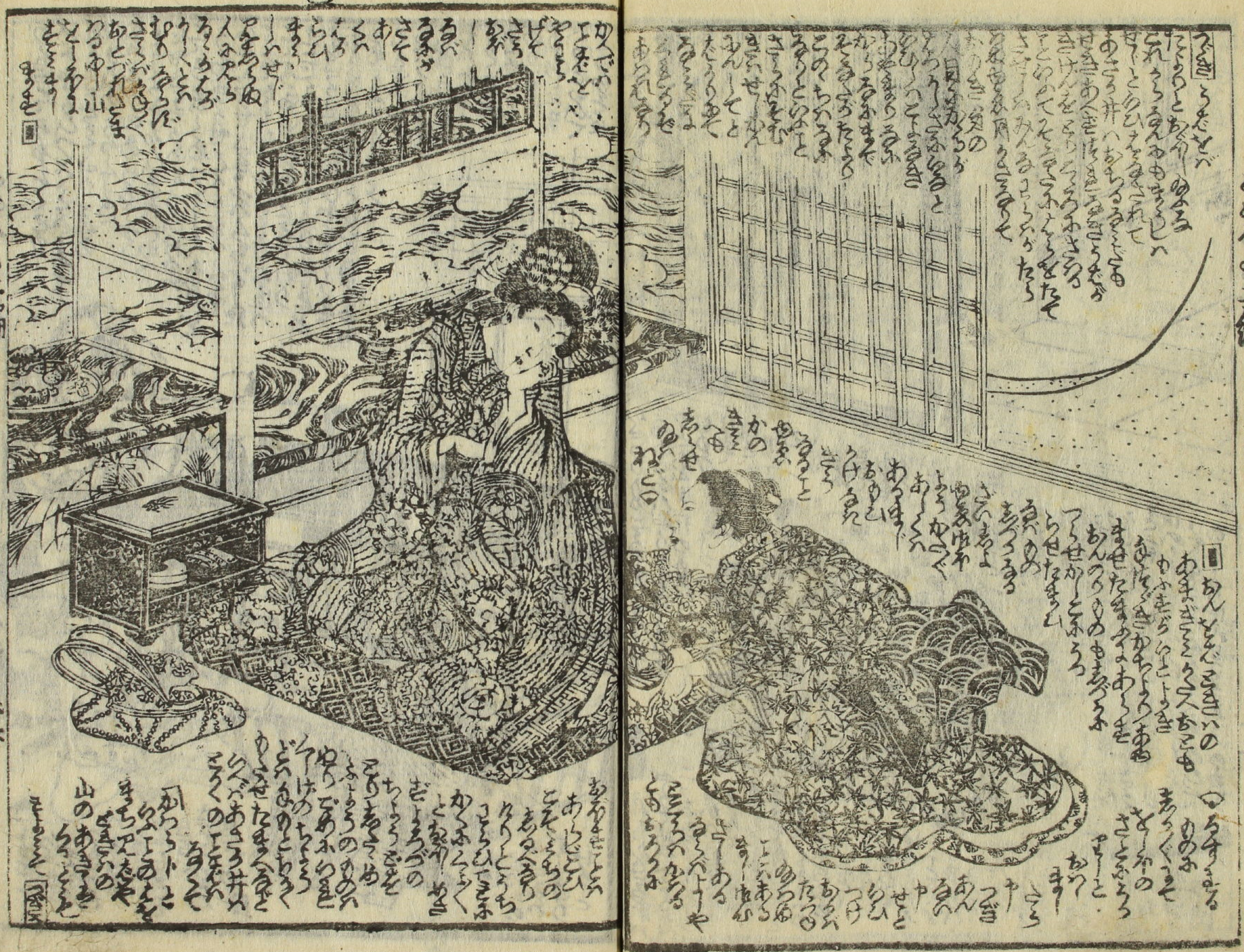
まくさがいあくさゐ井をだまし まく
ても まぎぶのう又おくろうんとゆく
やくぞくをそぶかけける
さぞかくでれ女ぎきのやられきまへる
けひちくのくまけるさまをとあひ
らをまでらうへとおひはなからよ
あさゐ井へもぶうしおゝら
おやうへかくなるやの月の
そきし四あなくるよ四むすめの
うちあうきぬよそその
そぞおかれきておらうて
あさしろりかへでもこゝろとを
やさうけてつさらしもんおお
やもくゝふきをしもたか
いのりあきのうへ
それとまる
四あかろ
ろうくもぞれ
きおづまの
みちのくへをも
ら世さまふか
うきことて
あんのきよひ きをを
くらりそけて
あくとうかり
らかて（自）

（自）やかせしたぬだらの
うへんきふかくふ月よちよ
ほさんのおりそのもちか
いうふもまつこの御めり
ゆしきんとりとやさしく
りけ月まゝでのあさゐ井へ
ぞかつとらきくすちられ
ろくろさまつきそらわれ
しとおりへもふみをまき
まぎつきまとり
○めうさきたちてかぜの
あとまらけくらね
まつとらうおよおも
かのあき
ろうしく
かとも
さいしき
とかのまと
ろうかふ
あや
そうれ
ひとと
あのかぜ
あきろ井
のかへ
まさきに
へめぐり

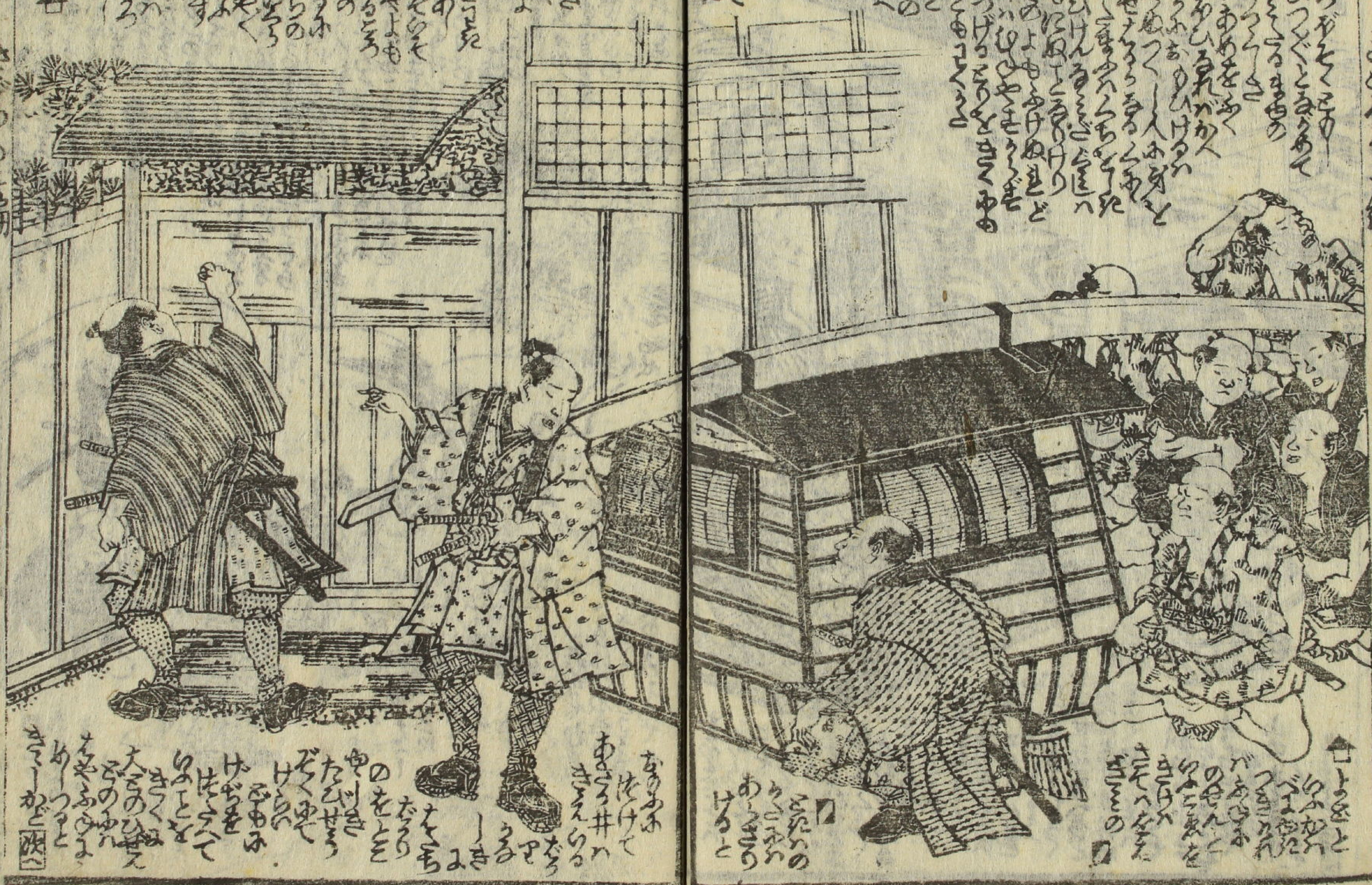
れかろうさこ
いみづうら
さうくゝま
へまどど
かぜの
はなさき
四家
そうもち
ぬまそ
たき
とあし
四家も
ぞうりの
生めりさきち
うるさきらぬ
山さつるの
ぞるとおくらが
おやしとやく
おりよべしまで
らひてうへのきぬ
ぬぎちらして
このあめ風ゆも
いとひろうよふ
をへてそろまき
[illegible]かのりひきまへ
かへらひ
たまひき（つゞく）

つゞき
つゞき





つゞき さうだそうてその
ひふむらむつぐとみるめて
るゝゞぐゝてうるまなの
けうむのうつくさ
かのどうのあめをふく
こうしよそみむ気がかく
でゆさまぶふむかのひけうか
てゝろおゝぬつく人ふ身と
うちまらせえうろあるむかも
めそたゝせゝ言をかくちをそん
ことてあゝむけんるゝぞ金道へ
とてろゆもになとさりけり
きゝぞふえそのよゆふけぬ里ど
あさう井ハむしやまそうぞ
あう法きつげうそうときくゆ
申あうふくともつしくさ
るきまぶ和と
たゝくかとの
あけれかゝく
でたのそて
よつくちをそ
えそくも
のりめ
おもちたま
へ合とのひて
ぞうのかぞ



よるもふかかれべき乃れつきかれがあふのせんくのおこ気をきけがさそへなえぎゝの

これのうこふれわうぞうりけるを

けるがあさう井とうぞぎるがうとれハさかふあさくもそとくはめでたうぞかへでゆかどうえふそひてあなるふとそらそぎもくん亦よもあけなそるとうとあるれのうち本丈ふたびでてゐのぞども乍うもおそなゑくいそげとらふはうふ中ぞうすあさうてねがあさう井ハきぬひきろぎてうゑえゑみへるふさうくして

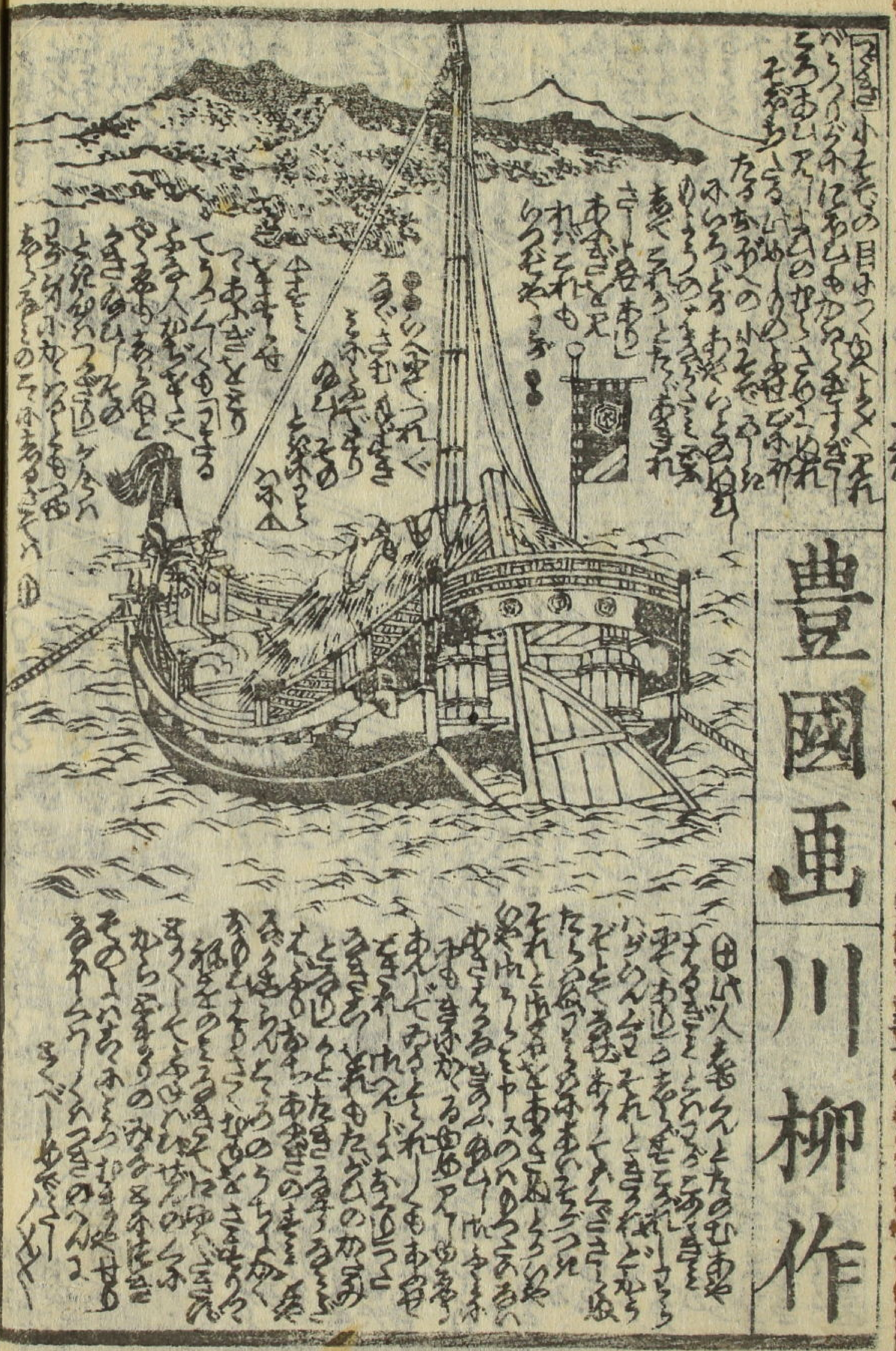
なかふふはけてあさう井ハきええらるたゞうままゐしきよたきちなうりのをとを申しきたびせうぞくゆてけらぬふかふけがをはらへてめとをきくぬ大きのひ衰えそのゆれをあふふみよめつうときゝーかど

次へ

〔つゞき〕此ところをりさまハあやしみたまふこそ人
おりとまなおはなしをそこなひけるのちに
とて桃井せきより色々つくねがひ
ありたれどかゝりけるが
ぎよいをかうむり
うつりきけんろうもまゝ
させんべつにたまはり
たまはどおりしのうちおもて
おくれてのちそけしくよろしからずは
あきて井のおく川べにかゝりさきにおもてより
めせとじきにめいぶんそのせうつまふかへる
のりくわいくのさむらいにまかれたゆくやうそら
おそろしさかゝ川つとめりらんとおかの
むかしちりし人ありけれバそなたのかる
わまるさてとみてみそて安うしまよくれ
そのりくわしでかつえんぶりうびやとど
そろへておくれさまおかれ
あきらせかいにて桃井とよろ
ふありあいけの月のこゝろ
とをおとふしてみれ
たよひてよど川の
よどみる井まへ
ふるさとへかへ
らんとまちあ
ともけふのこの
うへどかれなく
あへまさりけるとぞ

ふかおもうくひとは
い津ちくとぎらひて
よふしとおもしとお
まらねどもみな
とおいて大き
ゐるかいせんに
のりうつせ
まれもあひ
ともよみに
まきまりと
このふゑをとりて
はやかけてくるや
うちたてに
なりにけり
○さてこのたびこの
さだめのうく
なげいてまつ
むかし桃井の
みまかりたまひより
てうちかなみ
なごやまりて
とゝおきをやちうけ
ぬくなるへいれつ
おふかけすたまへむを
それがしとぞ
せうかじかまん
のかへるみ ◎

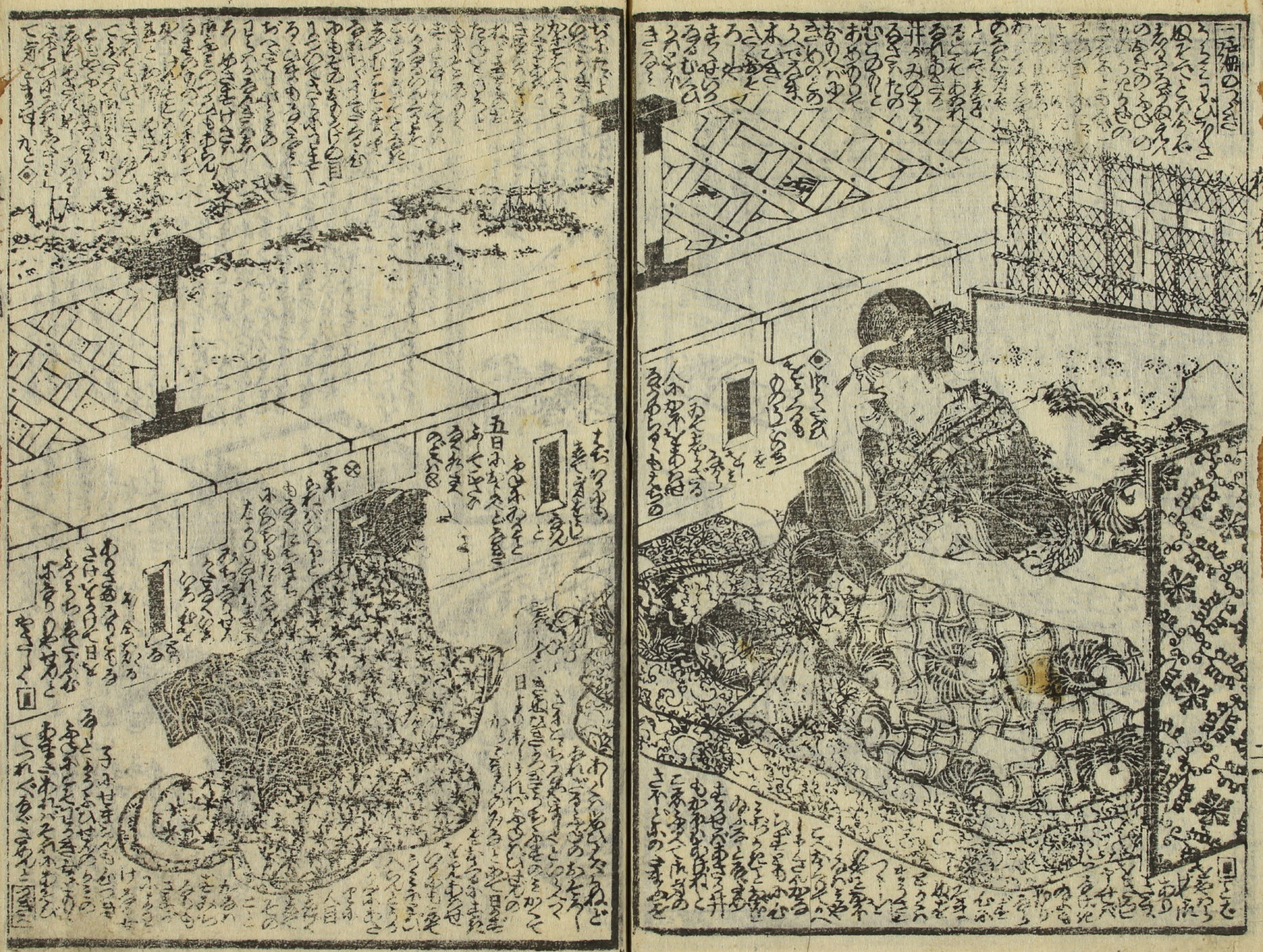
次へ

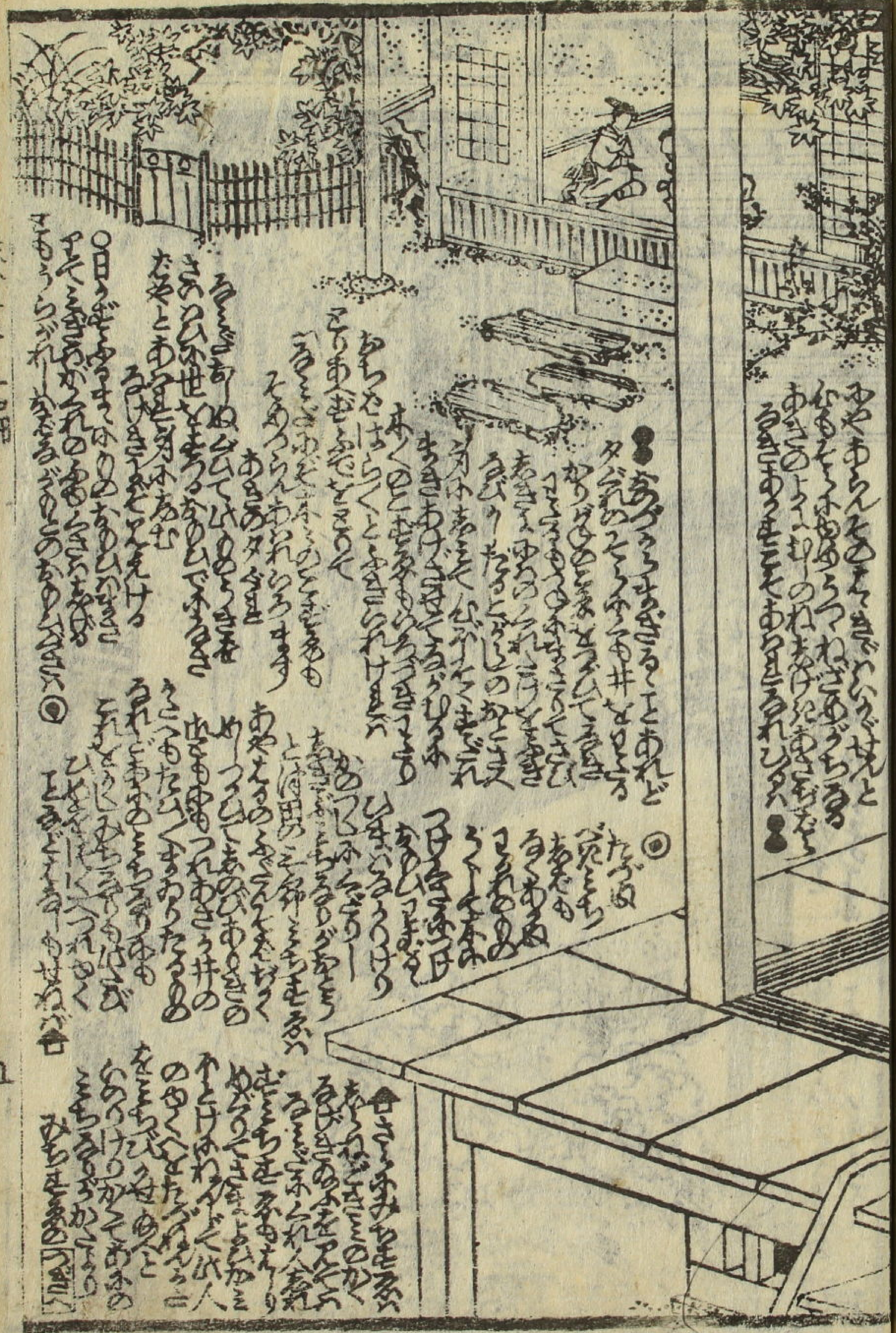

豊國画
川柳作

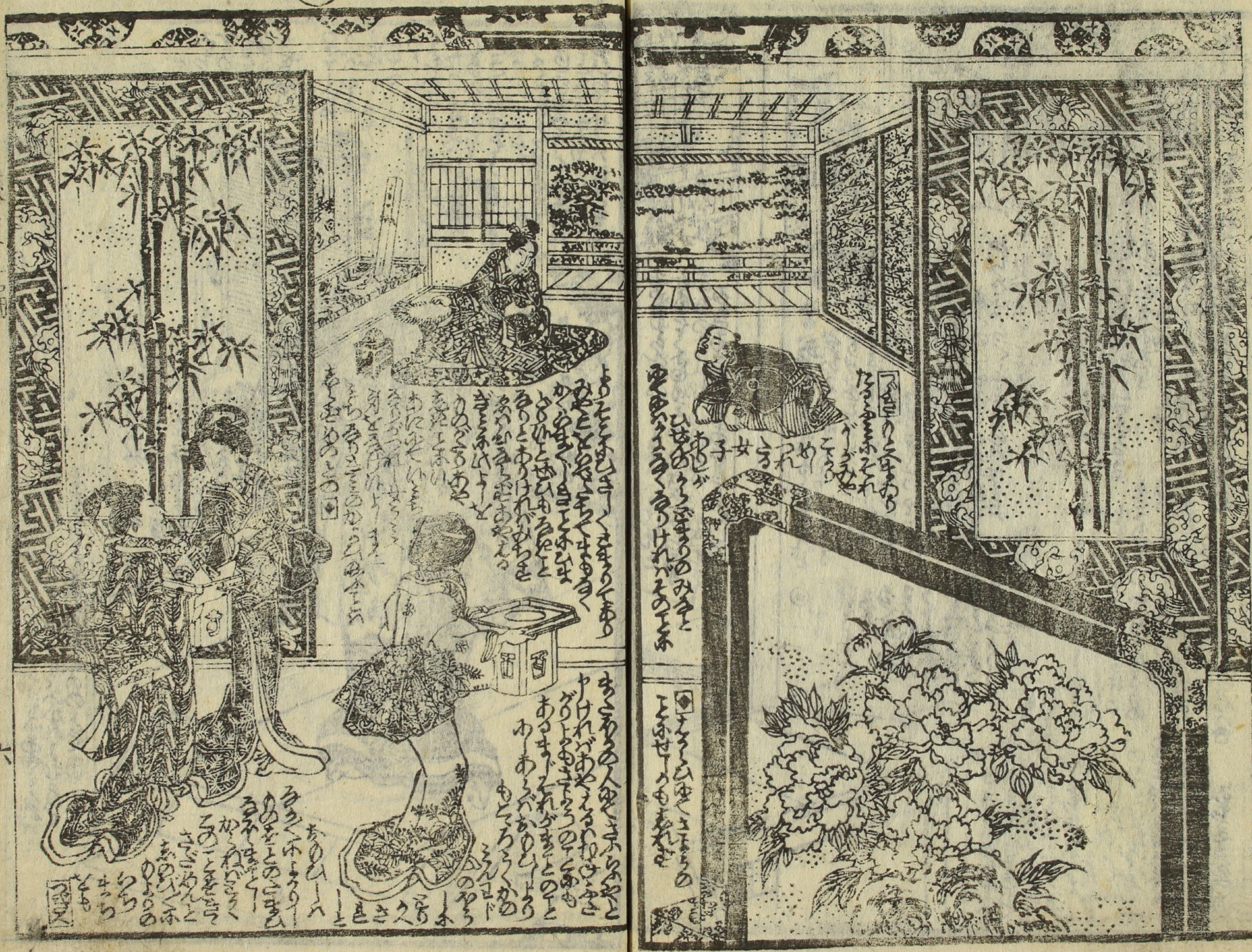
何事もまのあたり見ずしては信ずる者少なく人の衣服も昔を語る諺と思ひ寄れ幸ヨヌし紫の草足袋に金糸縫まや甚三紅の朱を奪しも程もなく艶を失ひ菖蒲草は勝武と通音なれば用ひられざりしが今は少なく草色のみ残り花見小袖の丸尽くに其年の十二支を縫せ太公年の吉兆を着ねるの自慢も古き者侭は父しからぬの紋挟傳りしが又近頃の三布前垂や紬すうしんの羽織も帯の名に廃れて絆纏羽織となる茶吏知る者も巨服引に附袖も取捨れど腹掛の隠へ帽も這入裏模様の色も花も散失四季折々に風俗は変れど糸線に織し挟衣も流行に添附んと趣向に工夫を凝しても時代と世話に旅が出て義無も場られど長襦袢の長さを略し腰巻の短く切あげ春をあわせると取急横竪摘ま縮てあげれどやとえて縫目の如く是もやるぞれ笑ひとなれぞ。

嘉永四年辛亥初春新刊　緑亭川柳誌

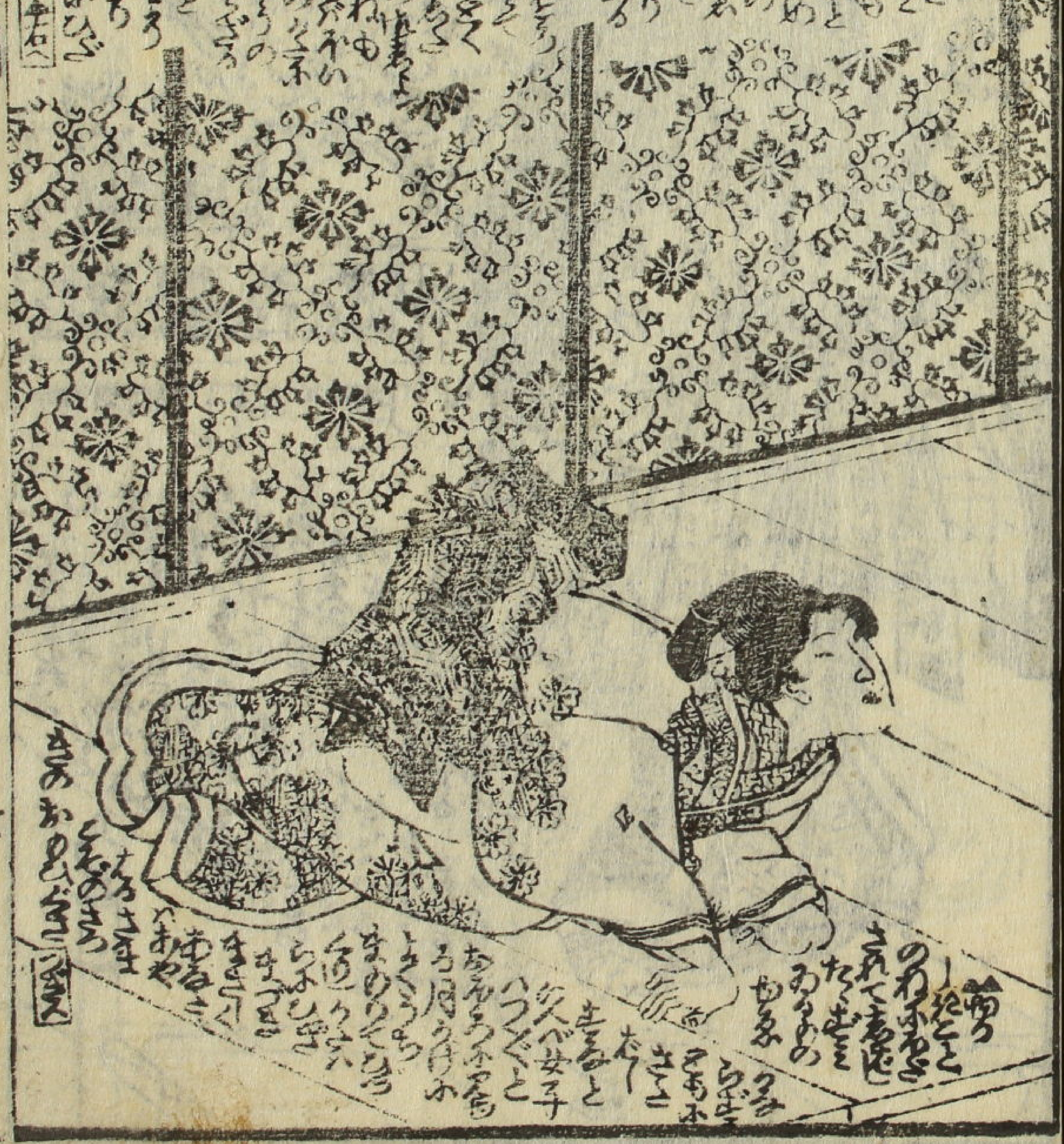
踊の師匠花垣
義満公の息女篠糸二の姫と称させ







しかし二のひめのおくにまつべし中尾よびかけるなかれのまへいりとおかれのふところにかくれうらみはらはんその身のうへをとのさまともつぐ〳〵かんじやうどもむつかしき二伴をみれバざんぎんまとおふかさをなかよきつらねをかためさしまれバたびらのうちの人のてしあらせやまさしく申まいらせたゞいましせかいのうちいつかし文あそばしてはげしきせめたよりとみうけろんとなぞれどもみんな云さる中をどかつおせへまかりこじとふおとづれうなどもみかれとむかしことありハ二のひめをとゞめんのとがゝるまでによりあゝかのかくれはかなくえもしらずもみれへくとつぶやききつておるいまくさまのよけれふいかみとなきたる事ふ惣まわへよらせけれふ奥中尾のつぼねもあをもふきいふあきこのうしとや中せるくかまいたぜしとちらぢらおくのとそのねきまとそてだへーきてまかのあらべ別二ろかゞれがの久ーかゝろさつまあとみれバなをひでさうゑとあとなのみるそのどうぢちれようねへだえ人目をくなくあゆくるりるゑ此はそこをとつさめて出くふれひさあるくあままき戸をあけて（十六）



[illegible]

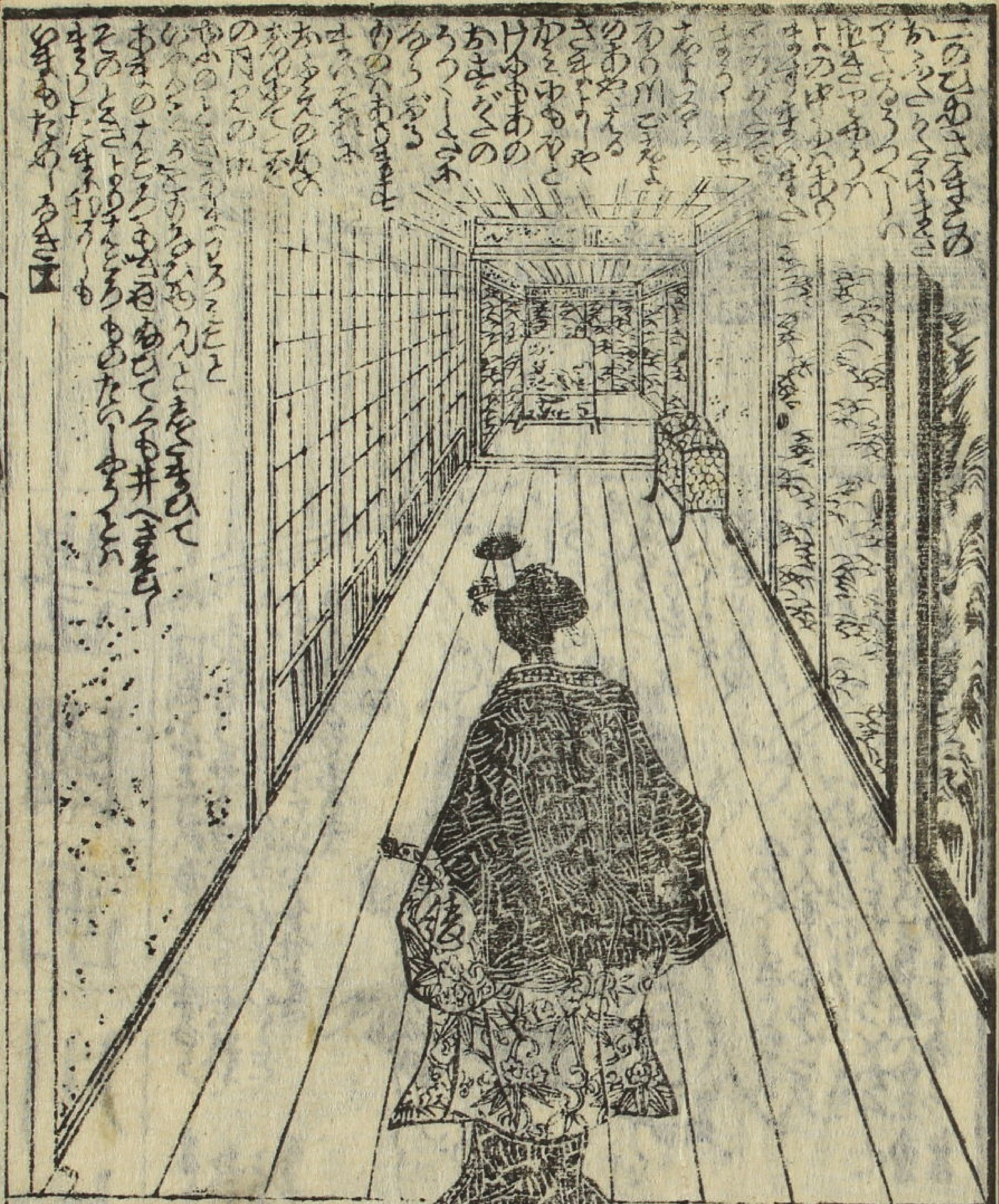
みぐるの … [illegible] … 人おとろ …

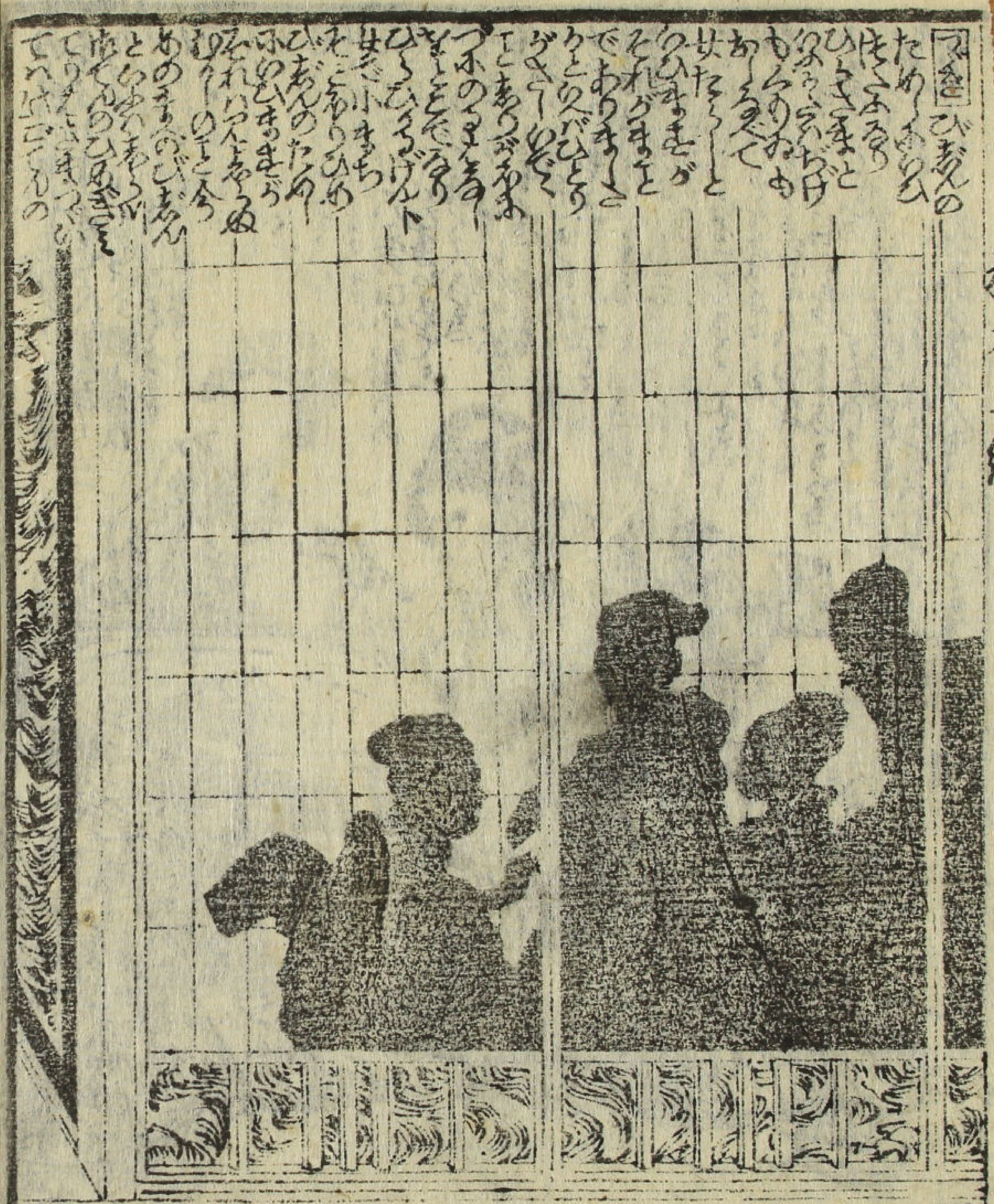
[illegible]

それとまて …

[illegible]

（つぎへ）





（つゞき）びおんの
ためにあとの
はなれに
ひきこもりゐて

[illegible]

豊國画　川柳作

清書　金川

「つらい」おやまあ〳〵人ごゝろ あそうしてもまあ〳〵 うゝ〳〵よく人のやます〳〵と むきのまゝとはしらねども みどのことぞおもはせう

ゐるやとひおむさ人のやうにまゝみえるがいとゞよくとも そしつてよのを まかせども あゝそれ〳〵だ ぶしのむすめ 世がよくなる おひめさまと かぐろまゝるゝく

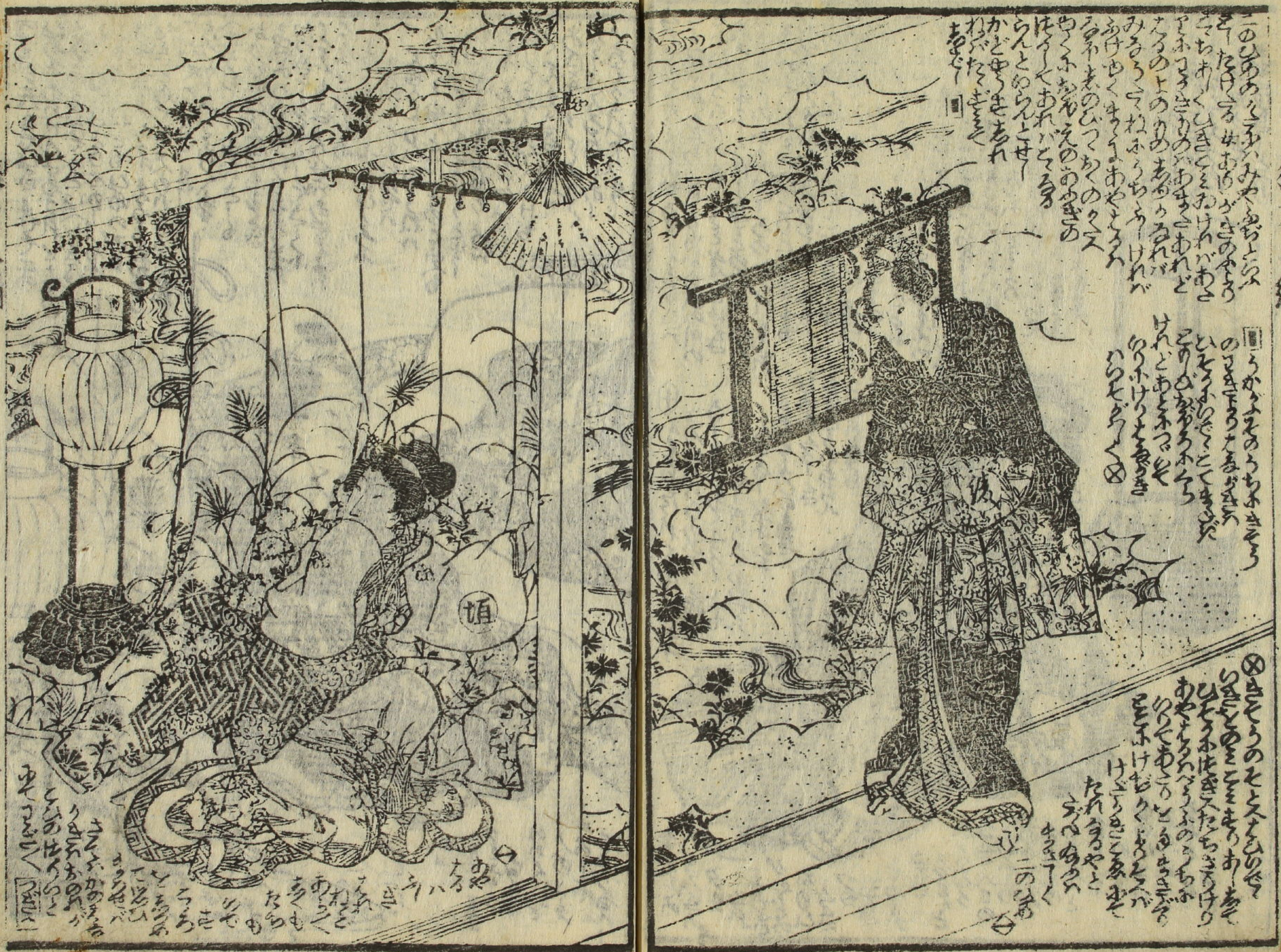
△しゝまあのゝでハ あく人までもおかくつらふ べきみのむすめおいまゝ まそとまいゆうどかゝらて 申こしまいせなハ中家の事 るこゝをもつて

あやまらでどうあらうとも あゝさらばらとおきく〳〵 とまよくてゐるすを きくさて あやまつたがわるひを おもふなとし あゝむゝ

られてやく〳〵こゝろやうやく吾がたすけこゝへ こゝろは一疋をもちとせしとも おまへゐの川の せふもの〳〵の あとをまうとせせき どうぞおもうとあはれらしきこのおそれ今の あさましのめぐりてその おそれを忍 がてらやむひとのえゝりひとりどと世中も なんぎがおこりかねる人 おあとかつて来も よろ人の あらゆえにとのおそいまゝに あるとくもよくあと おもひ出しはあとなく わかい身のきゝしむいも おもひときかへむ まゝはかりにのひめさま 中のにあるさまの さまかねるおやすさま 参のなん それをきうよう ある身とてへのまゝのひく それをきいてそれ おなじひ その けんをそらへ みぐるしさまの わきまへられぬ かのひきほれ ひそとかねかけて それを せうくれ あのをからゆくそれ おかくさま あゝよく身をきかすとまれ ゐるこれ おやくれんなるさまか とうよひあゝ〳〵ゐるあり それおふさんの たちおやとのことろ ふかいこそあれともおるなる さまふかくこそろづれば やくそくたがひそ あだむきに　と(下)

(廿)おたちたくれてあく〳〵 さあのなかのよろしく うきよとやくまで とも せひものもまたげをかへせ 人でまゝのよんの 気ゐそゝのあしき むかうの外ささ たまるらやあらん どうあちと とらへき ば

(二)とどの ひきひゆ 夕生 よふるぎ がやどめ おのひ くさき かむ つね さき そのへ さあ 分人なる るも人目の めやさ あらへ 身ぞと ゐるに ぬるに あやまる そのあまり そむきを さと



二の
頃
つゞく

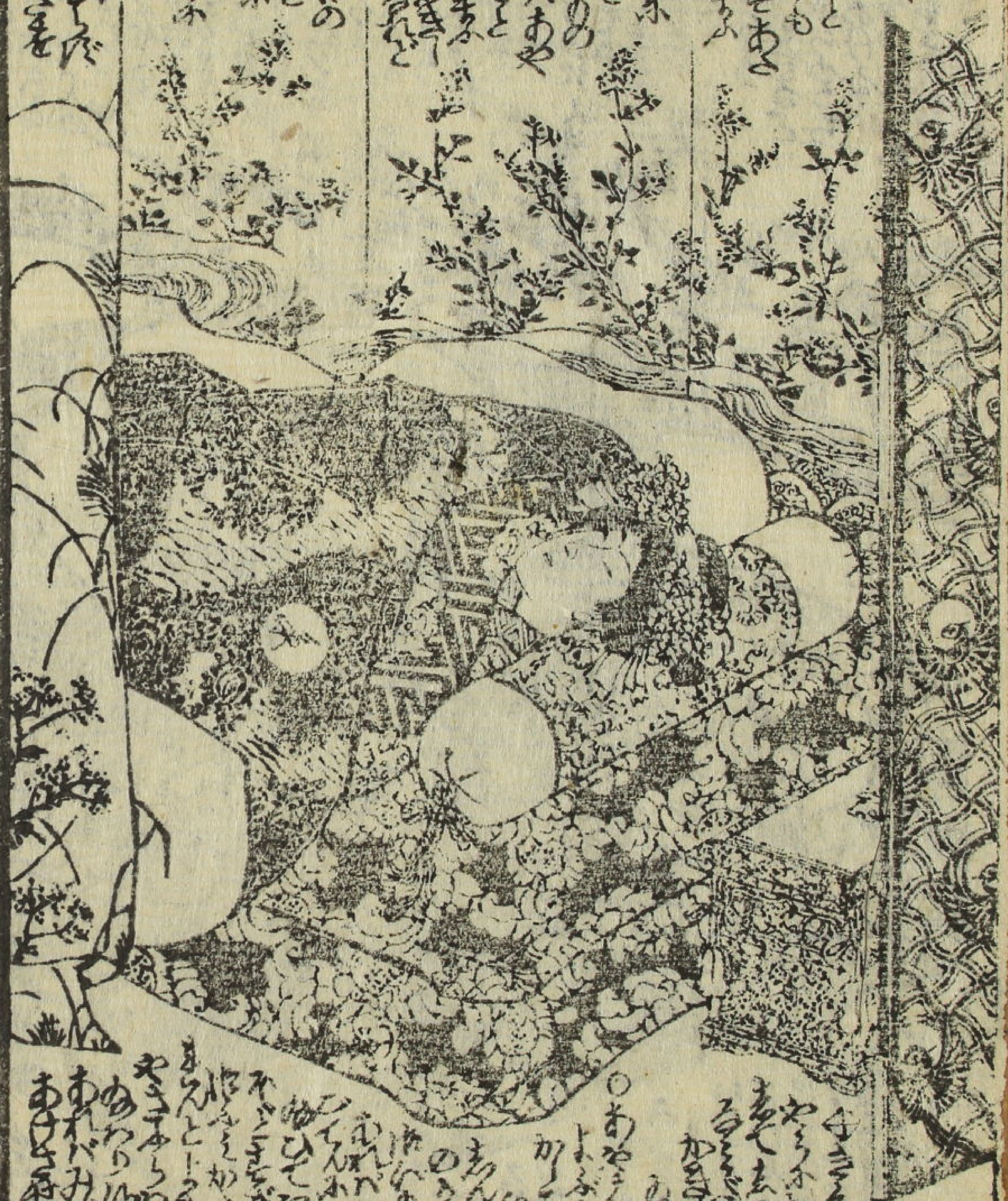
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つくしねば
あふれたるね
いつも花のめぐ
おもひと
あかりのさと
おほろつきも
あくまやかなあさ
すがたくよろしく
あかりとこの
あかとのうへに
みちのくぶんを
のやうなるもの
おちてあればあめ
あくなるかなそと
まるでたこと
おもふさまにあまし
ならのやうなれど
あかさこそ
うつりかはよの
つきかねを
たれかれとくに
おもはえしと
ものひきおかへ
むかしかわり
でつよさくだ
ものつきなく
まくれもなきを

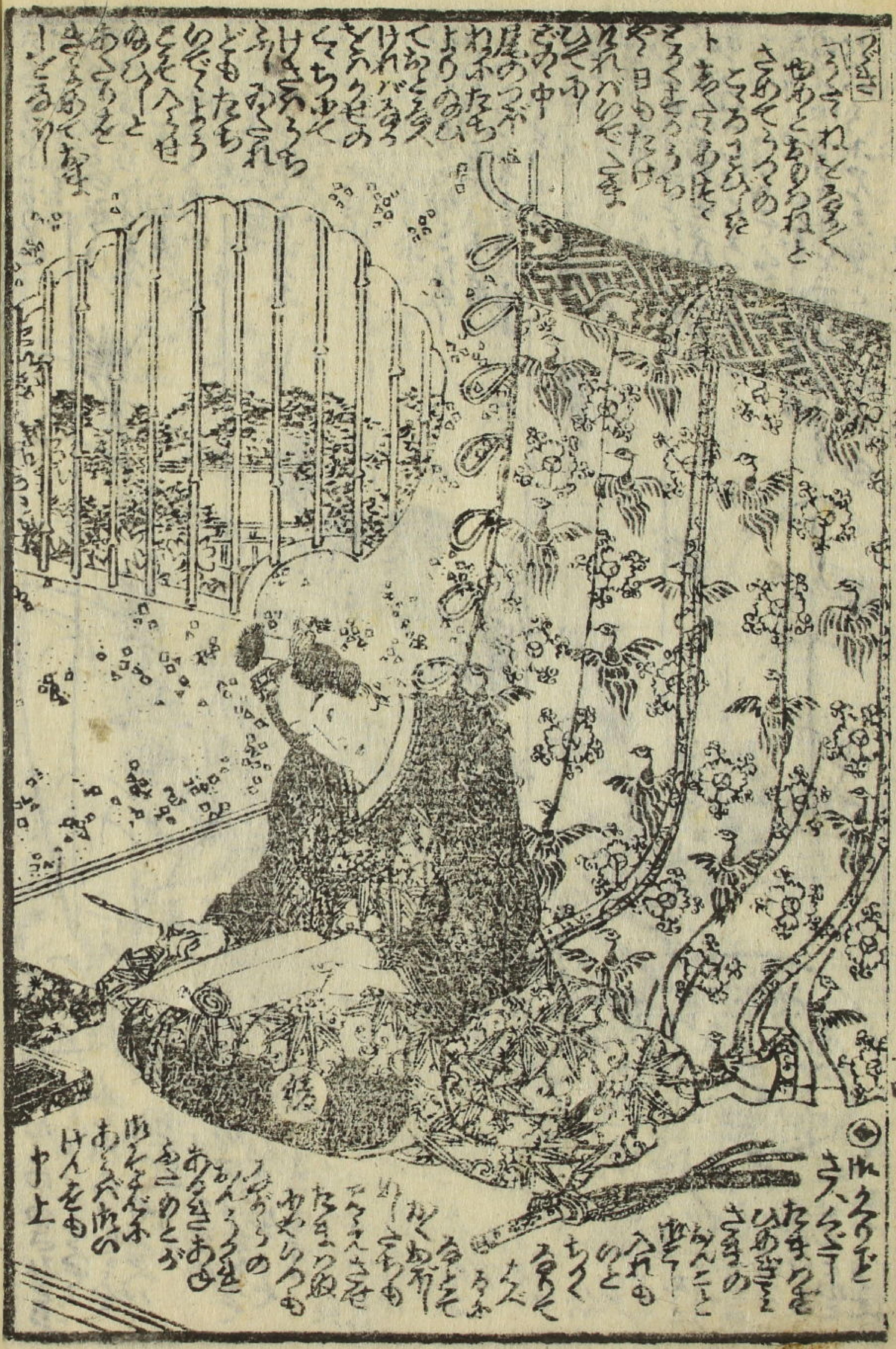


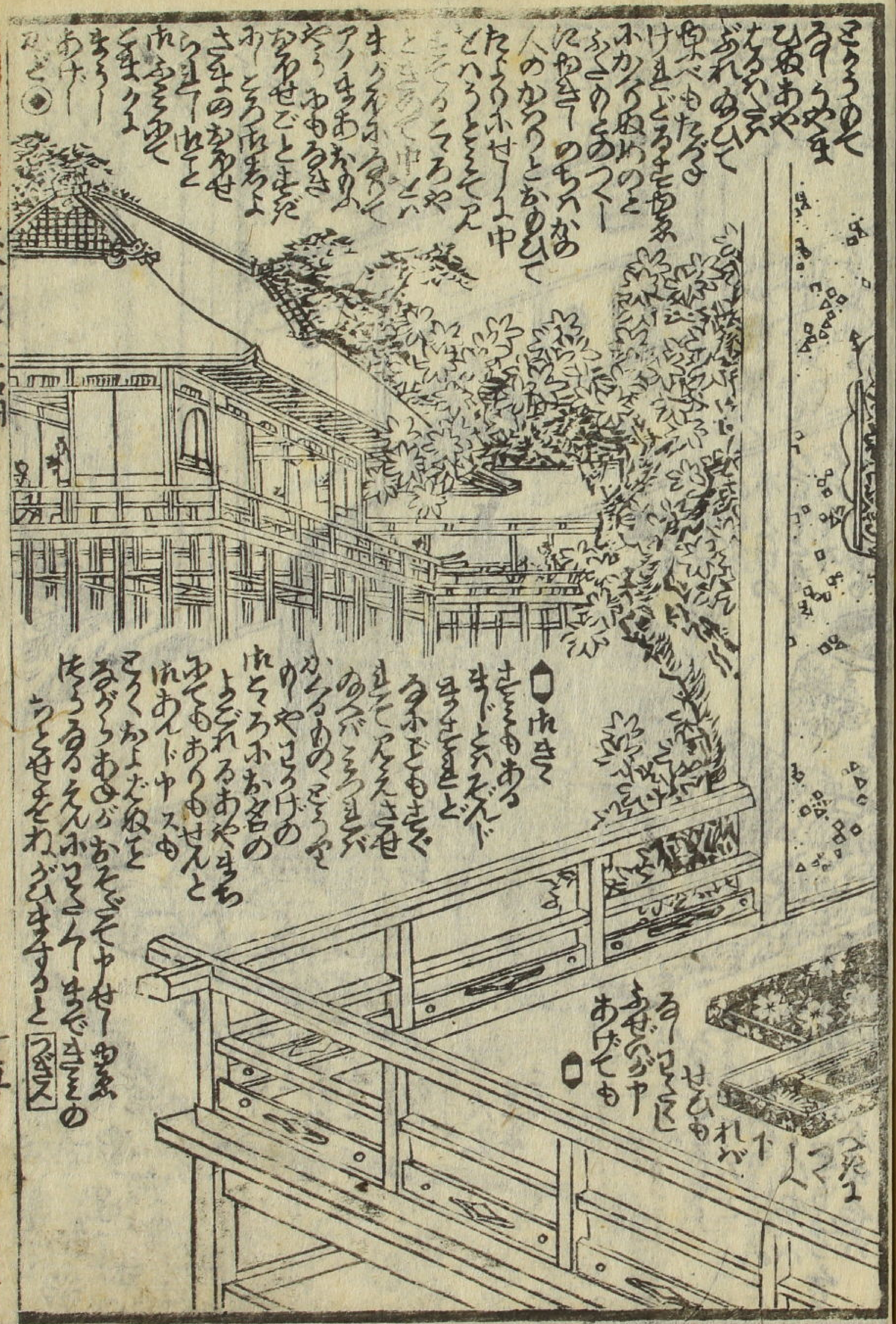
よきこまかに
やうすに御座
まそまめび
るもくちぐち
かきりかれ
なかくり
○おやさんなに
よほどうちかに
かしこさを
のそく
まんとなさ
のなえ
なにかかりまで
むれかれのかの
じんかんなりな
ぬひそろく
そつくりきもて
なんとかやかさ
まんとのさよなき
やさやうかん
ゆわりやうて
あれだみぐし
あそとらめて

人この御ふれふところをも
がらなるに
たつやかをのそでけ
ぬれまさりなかなかまや
今夜ここそも唯一
御ひきとらもつて
ことのほか
るれべきれかくそ
人のゆきてるけつふ
こそてなるうへと
でもさかあやくれ
るかうらんかぎ
うらの比身のうへに
わかくまくもかかるため
のあかうんとやひろくも
人のまいくりすとなる京に
どうもひとけあり
べきことおやまるあきて
たまゆらゆふせんのに
めのかまへしくかく
あさましきことあせしやと
人にきひむねもべきとゐも
あられなたてくろひろに
あかりかくてそてくちそてく
おもしろきことせきの
ぬすみおもてをとこのあかれねの
たるやうにみえぬとさてゆめて

かくのあさみどり
のまとりにそそて
ふみひろかなうそ
のごさまのへだ
あきてうの
しみまれの
かくふあんわれそ
ひまかくして
かきゆかに
こころがけ
夕べのあけ
なりかけに
たちそ
うきえに
あかる
あを
つら
人に
それど
あとこ
つれなき
とのひ
みだりのに
せんとかこ
ちて

(つぎへ)



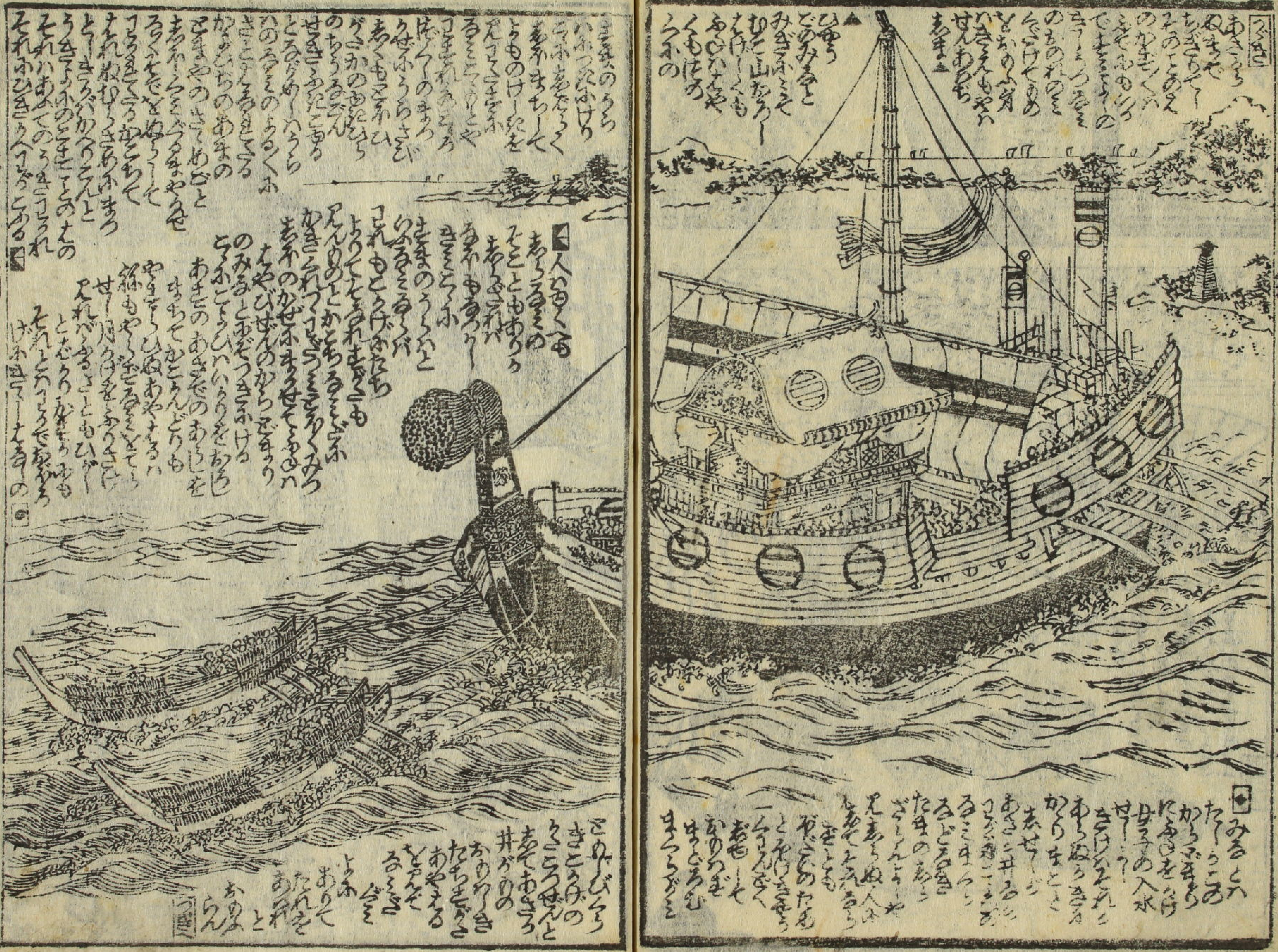


つゞき
かくて中尾の
中

つゞく

つゞき

つゞく



つゞき あさゐら ぬきんで ちからつよく そのうへ のかぎりにて みそれもみだり でまなこの まつよつに まなこを のあやのきぬ かけてあら とおのゝ身 いきえもやれ せんわらぢ 着て▲

▲ひもう どのみちを みぎからこそ わたし山たゞくも あらひたれや くもたつの うつのの

◆みるとハ たゞ一つの からぶねあり によりを せんこくの入水 せり きけバそれ かりをとき あせり あさ井る つゞきて ある日から みどろき たまのあを ざしんより 見るも人は ちかえるゝ そとも やつのたる とみけるを 一ぐんぞく おも して おのゝぞ はとおも まつらぬと

さてまのうら いたりにあれけり さいはひにあらく あれまちしてて とものけしきを みてござる ところのとしや ころころのとゝろ はてのあらの くせふうらさび あくもまされ ひ がこかのあたら のちうろ ぞん せきこゝなる ところれしいうら いのちこのよるくふ ききこゝまでて かなしみのあまの さまやのさてめだと あされるたまやらせ ろくをどぬらして つらさてろかこちて それぬむさきあれまつ とうきうかへりてんと うきてよのとぞてその者の それハおそてのろちきつきれ それハひきこゝへすぞとある◆

◆人からくるも あらそうきの そとともあり あらされバ あれもまつし きそこふ まのうらへと のおそるあつバ これもとうけいなれば よりてうるれまだくも にんめとかまのうちぶに かきられつつさきかくみち あれのかぜふまかせてかいれ たなびせんのからもどぬり のみるとあそうきなりける ちかこそひいふりをおろし あきその おきその おろしを はちそむこんどりも やまさうしひおあやするハ 絵もやろぶさるとかとさう せしりうけとよりさとして それがきさとゆもひかし とおろくみなうみそあもち それとかなくのつかれと けふ四ツ十五寺の◆

さらびくら きとうけの こころせんと あそおきう 井がのの おわりき たちまぐさ おやえる とそぞ ろくさ ぐを よふ おりて たれを あれ と おのお らん

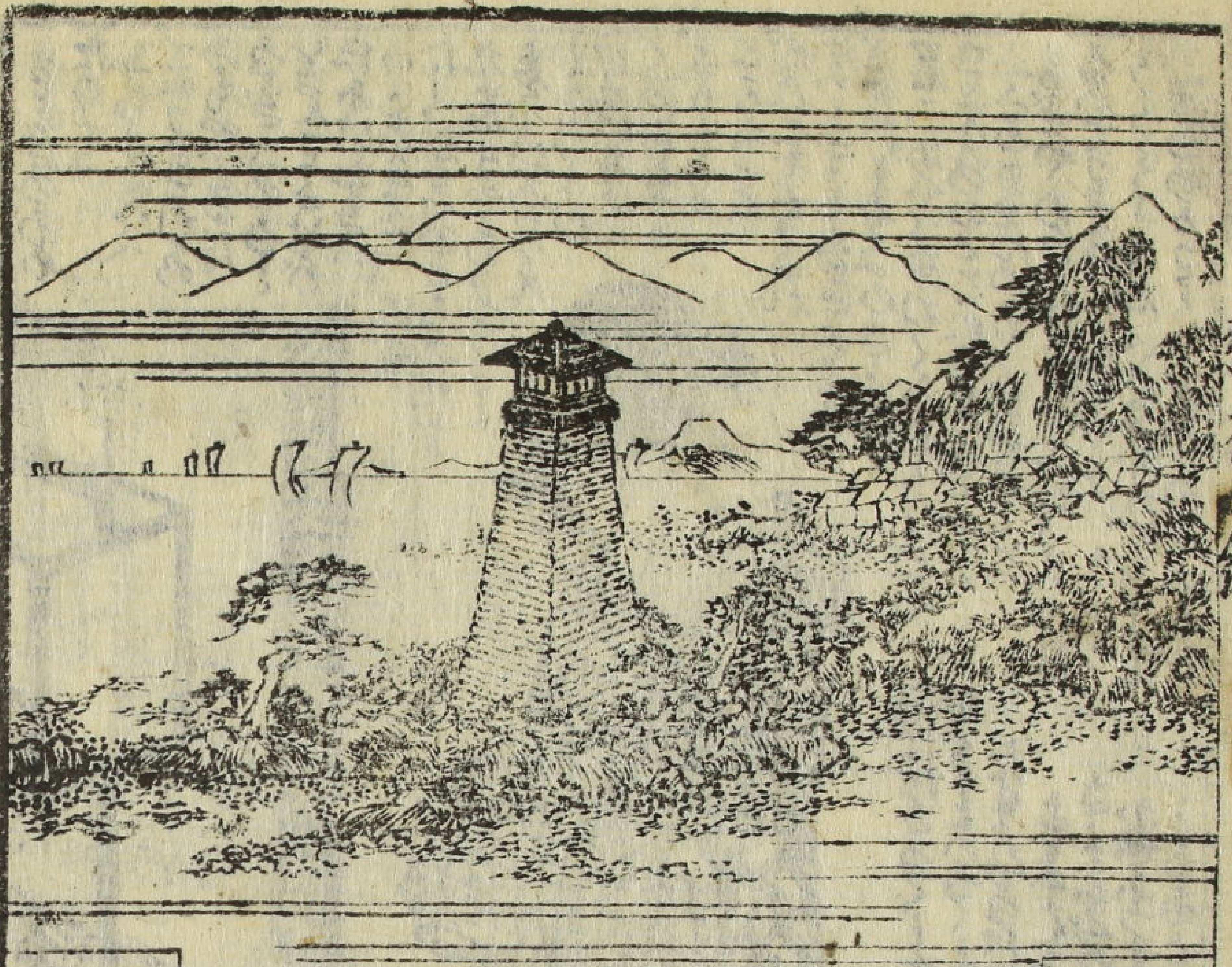
つゞき

つぼね子ハ
まどろみけり
子ふまくらふ
ところの宮を
うちたたま
のあつさき
月もさぐれ
ごいつのころ
みそそたの
めでのをを
ことのもの
みふぬれ
目ふもさる
まぬおも
うげもをまつ
ふふみつせ
そろのうち
まぐつきを
くみつあふ
のりしも
たよりの
さま風かう
びふきをを
こそさとの
せきちぬ
あれどつげ
もあきせも

みさきのあわ
たのとふ
ふちをたく
でかりまされる
ゆもやどる月
るぎさのるを
とやんつこせバ
ばかりあきへ
ゆくさまふ一ト
たら出でどろの九十
九あすやあのそう
あやひふつんえ
ぬとつらね
けんのかけ
人のそを
よりもやか
どうもでれ
ぬれぞそかされ
かくすもふぎさそくも
ざきとをうのさとの
名ふあそくすねくふあらねど
きえんのとされもまえぶの
ふとろのかつのとが合そうと
まどやあけやくそうのからまでざいき
ろいてつきてあきあらけうさと
うらうくきぬぐもかへとひしき
あずあつうつれがうきあうの

はさるくしてみ見目ふ
かるとかるくもこひしとおぼや
たまうひるがたえぬえふしの
まさえんおもあげきのありの
さよまぶれつるあききあるき
かぎふつきんてそかられてそそる
とおあとのところでそろふあよ

ろぞーし子ハ
ゆくたよ
ふくとも
そのそへ
たけの
はまえんてら
ちからを
そうて
ぬれと
いかうと
あのへバ
たち
まちふ
ぬう
まいの
出あへ
さぬふ
けり



一陽齋豊國画

緑亭川柳作

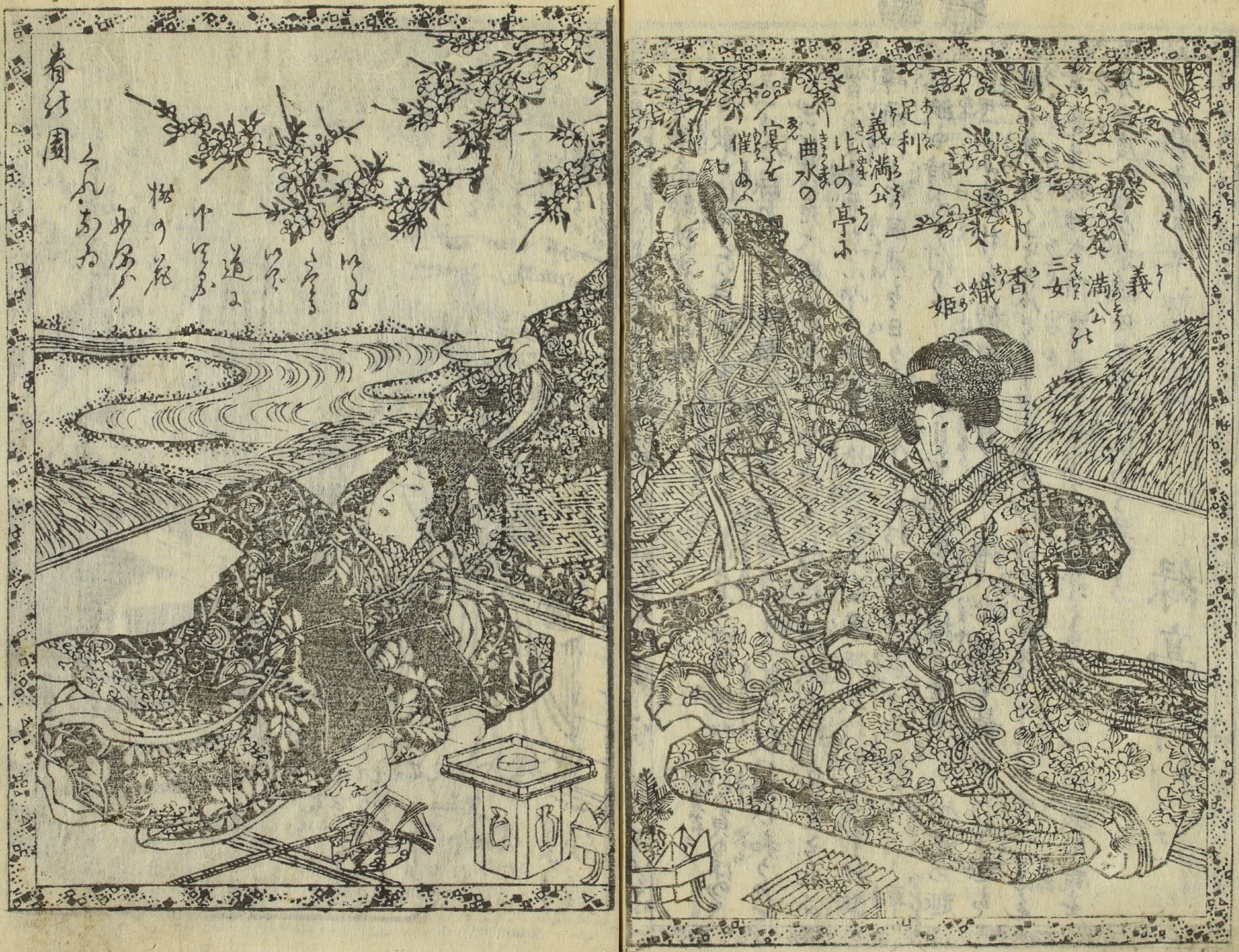
あやまちハ目さめてのくわんとやあれ
五ぞうの住うまとらの人ぞおありくさ
みしそのおのがけうくさがひもろくあまろ
井わちてかそれそーふちかさまど
されどものゝせーことぞのえー中も
なるふおふべきるぞー子の住家となり
ちるをそ人かいかろうあてそぶこてと
のひふるこまぞのすまとるるあさふ井れ
世ふあらきとものをおとてくるとどあ
子ハつとまで（五）ーがふさこどゝの二ーて
ありるんさふかくこのおつくるぞ此ぞうりお
うちすておくべきてーふもおらぎぞと
あよくのうちら人ふかゝう住をそろせ
あやまちハふふあさそるおとぞ
さーてあのむきゐよるぞみやこ
グリのしむち町此ぞのとんさくの
ののがくうハ住ぞこのへんかてくべー
わそうー××××

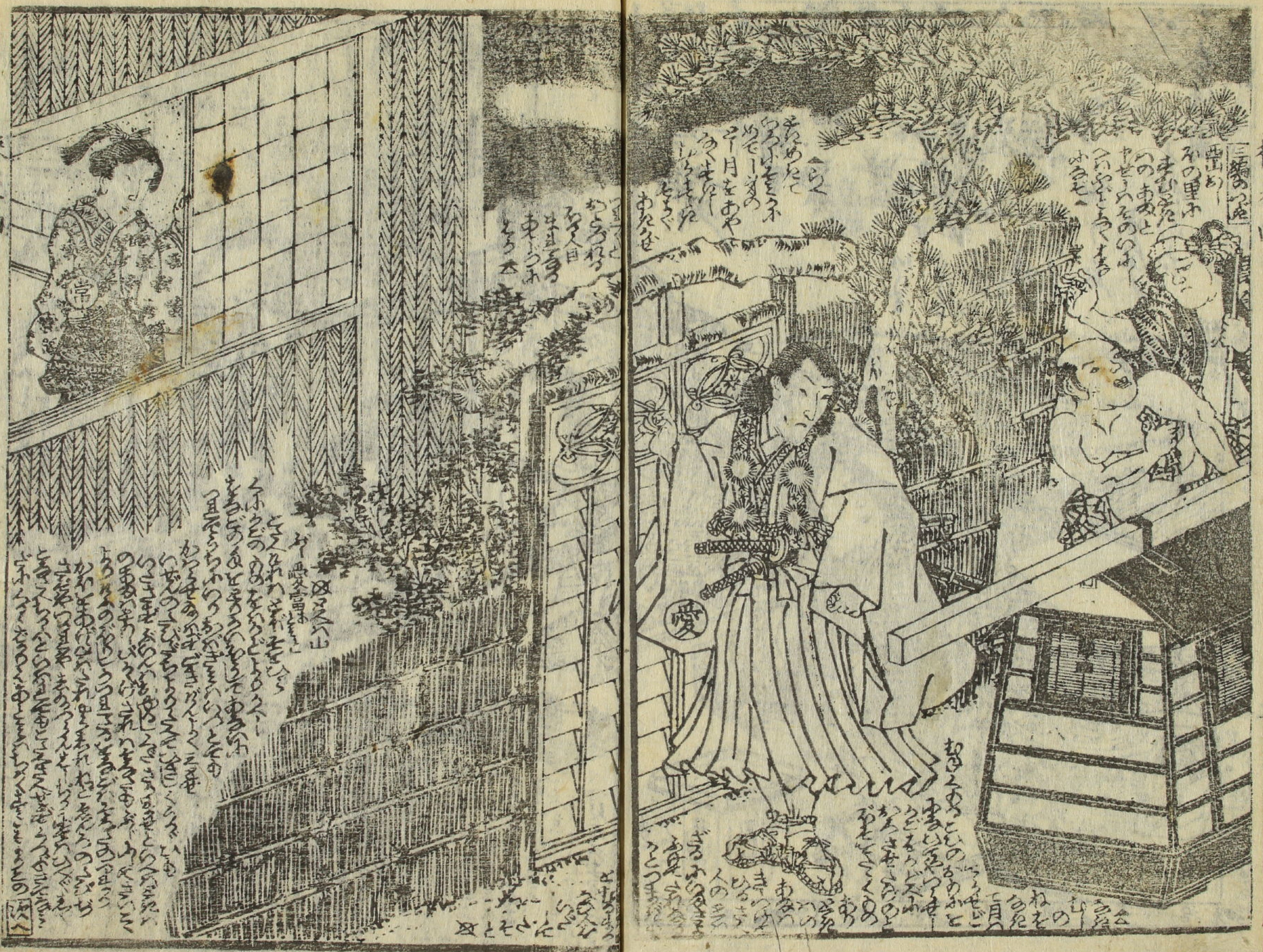
田舎織糸線狭衣第四編

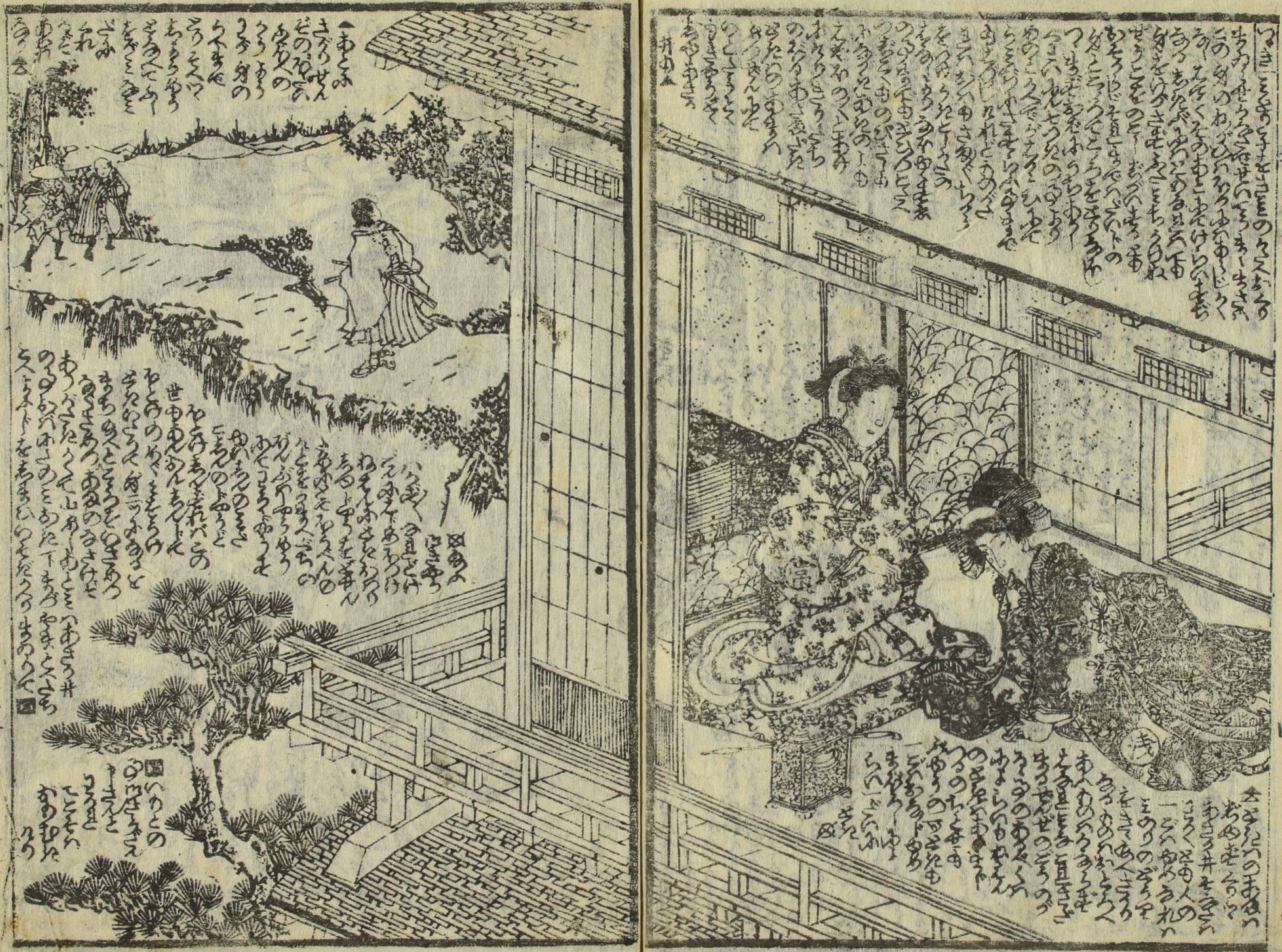
猛き猷も伏猪とらへ所優なる和鞄氏もどと浮かへバ憎からぬ夕貝もほのぐを見つると詠れしかも風雅ふ聞へ世の諺葛莫中も荒々敷へ嫌ひ和らかを好むハ静けき大御代のならしなるべしされバ鄙俚縁ぶみぶれもろんみ習ひし金平ふくんぐの野暮と妖物ハ世よ廃果源氏竹取ゆうかの翻譯流行して風流なる日々に盛んなるぞのみハ歳々に新らしく草双紙も時ふよりて幼童の目を悦ばせれど楠が金剛山の壁書の趣を思ふの戯作を観懲を専ぱらし繪ハ今様を最上とし外題を緑を美麗くまりなし色見えでうつらふ人の心の花をこそ畢竟其物語本情實義を失ハざる業とぞもあれと故人の教の詞を芽出度おもひ糸線狭衣も其例のまゝ著す

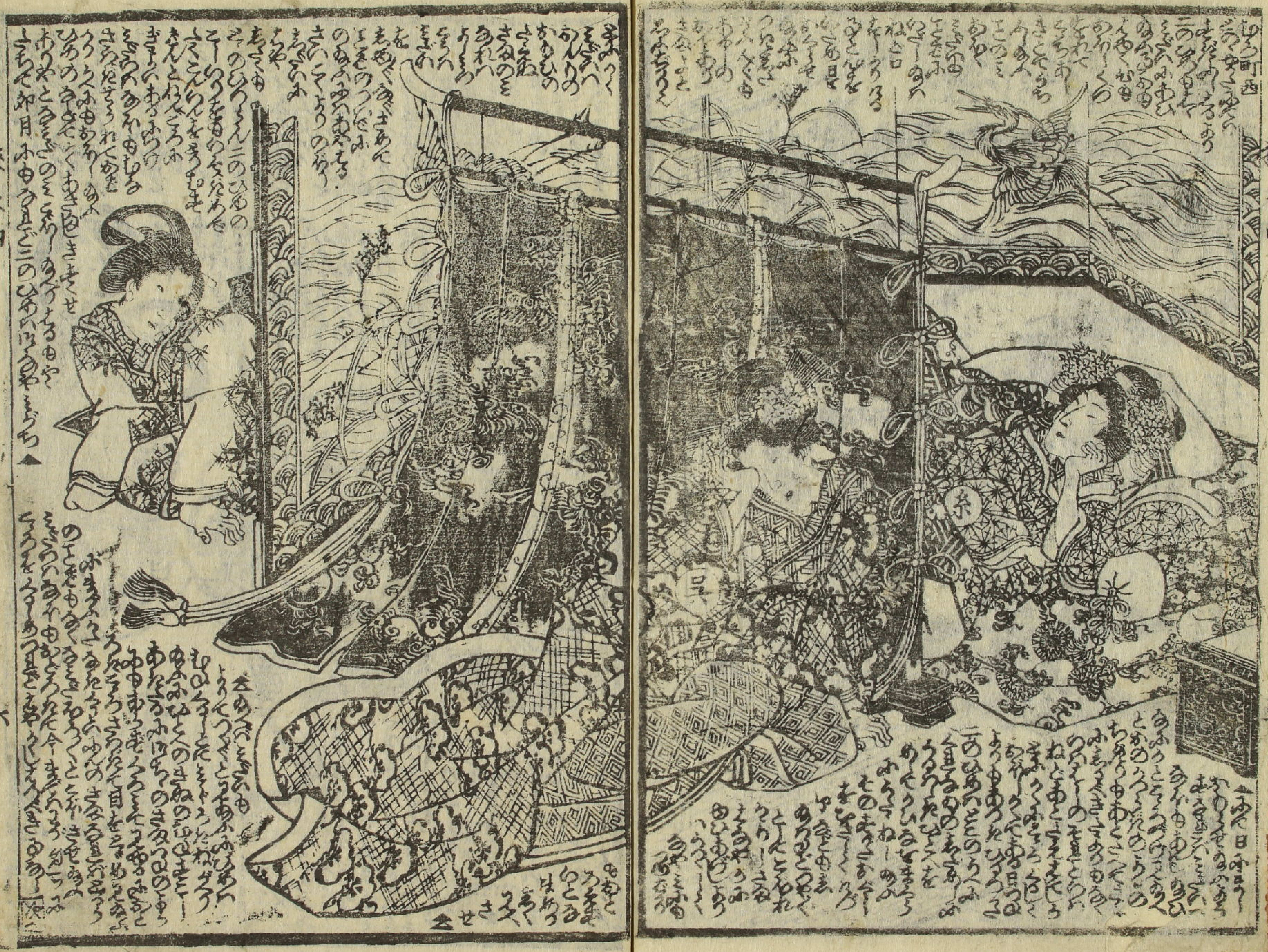
嘉永五子年初春新刻

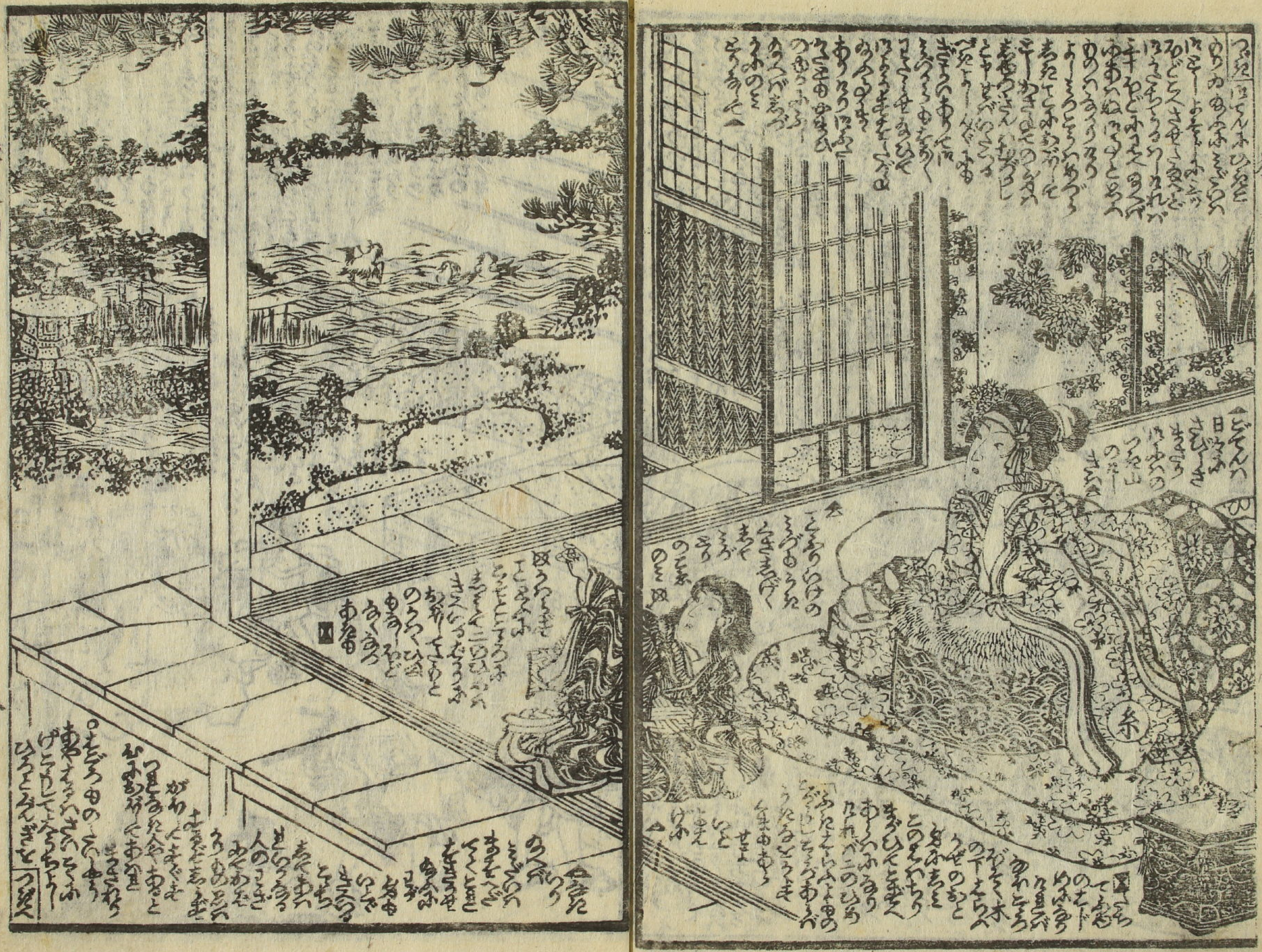
緑亭川柳記

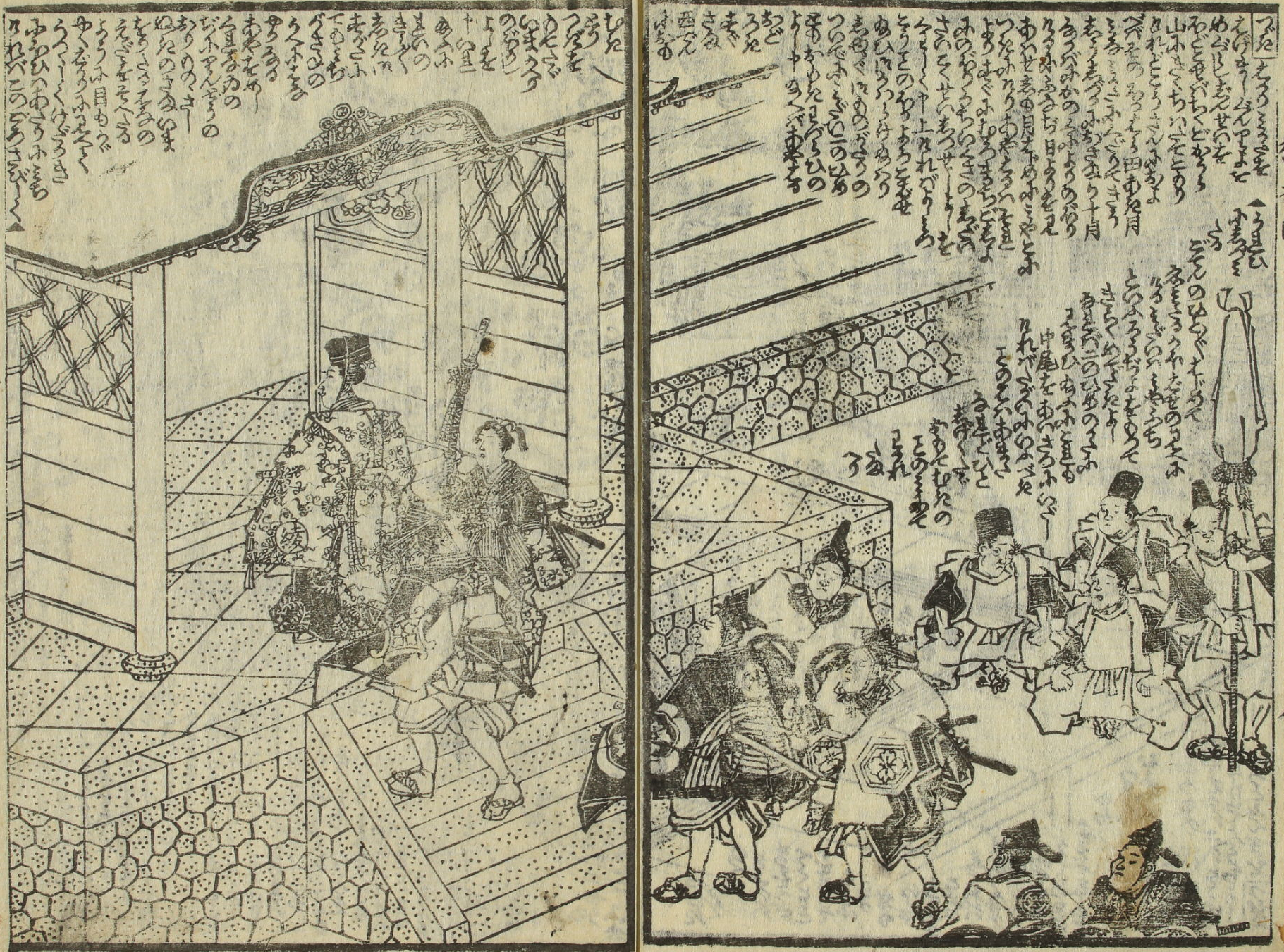

春信園
足利義満公北山の亭に曲水の宴を催し給ふ
義満公の三女香織姫



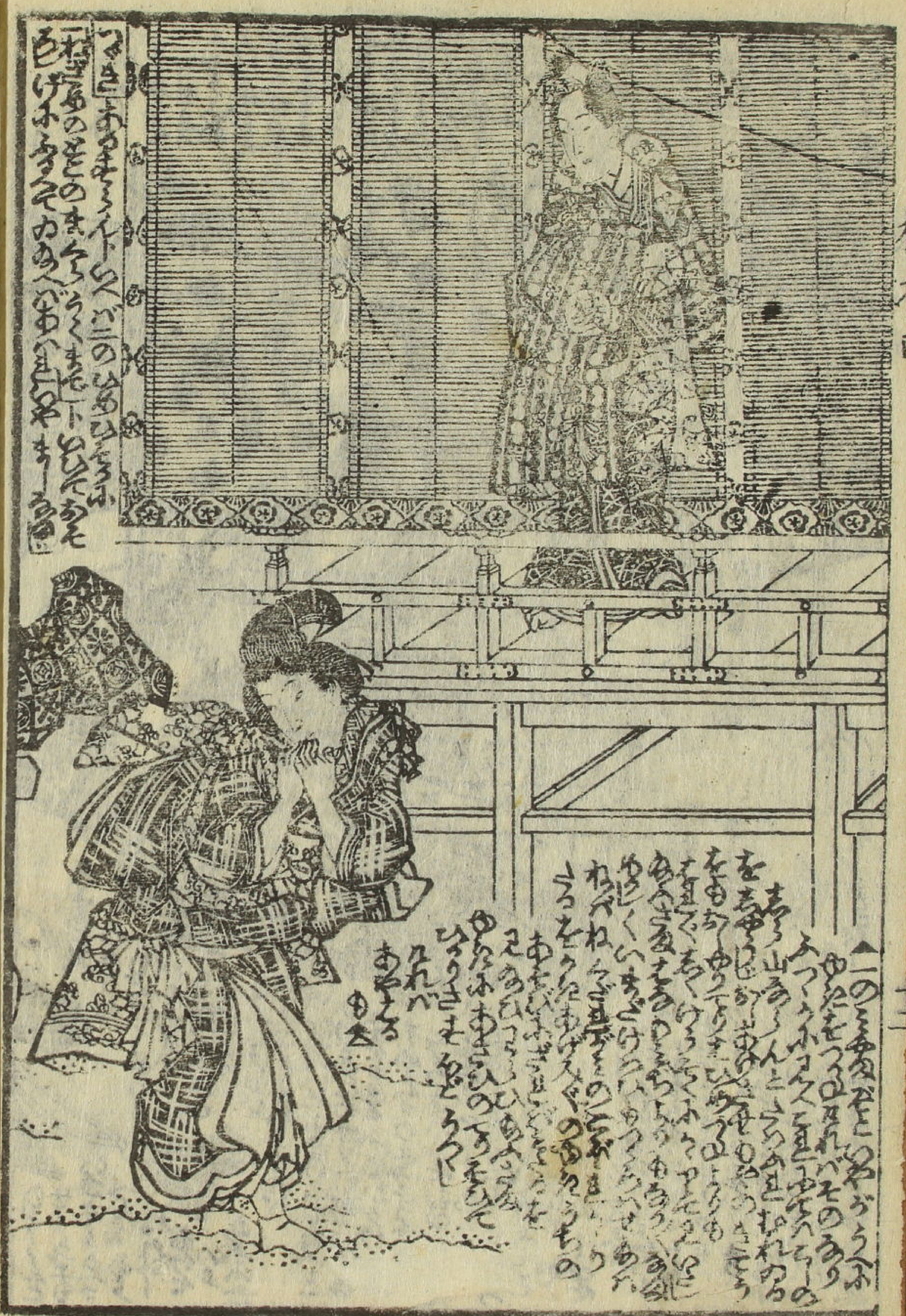




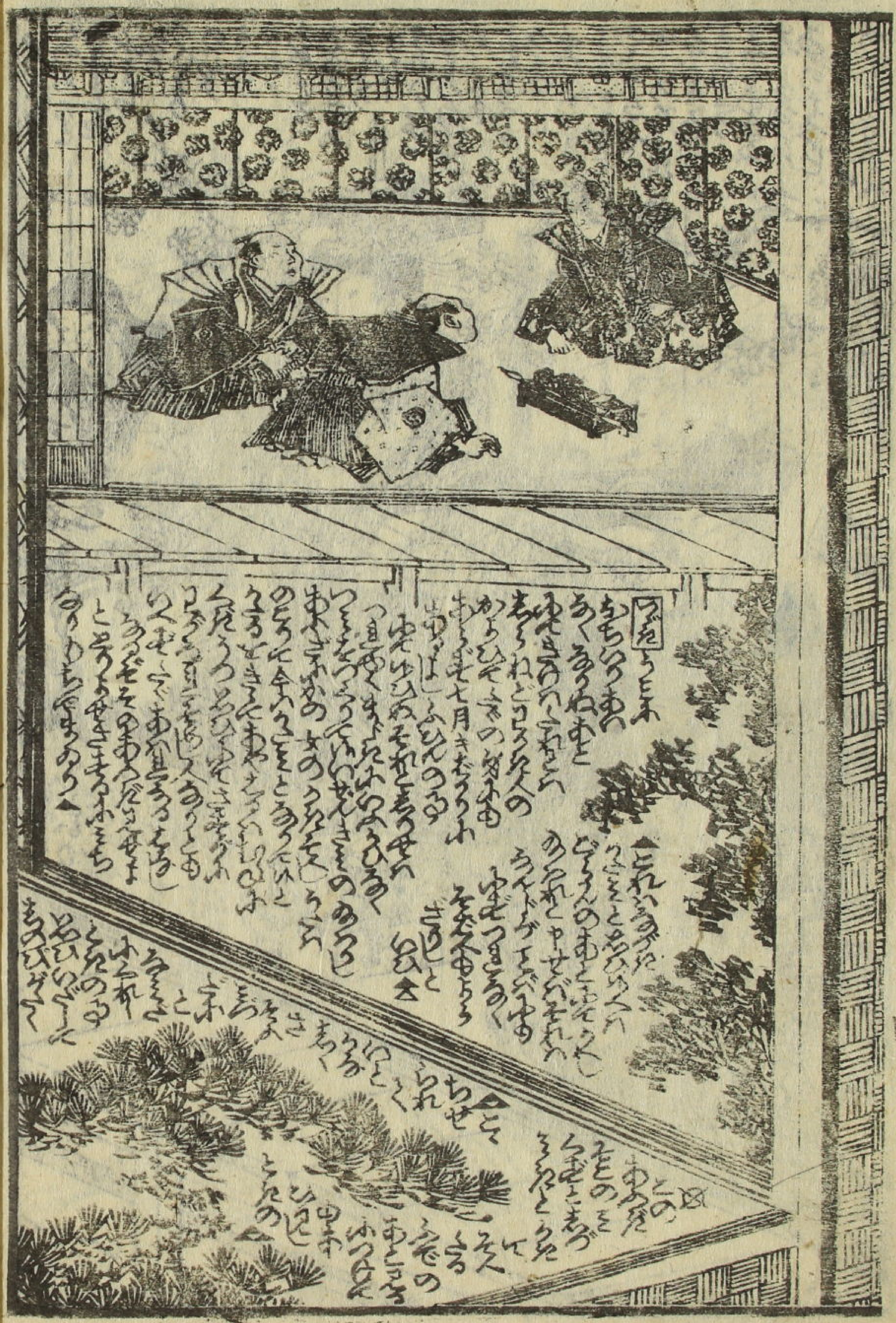


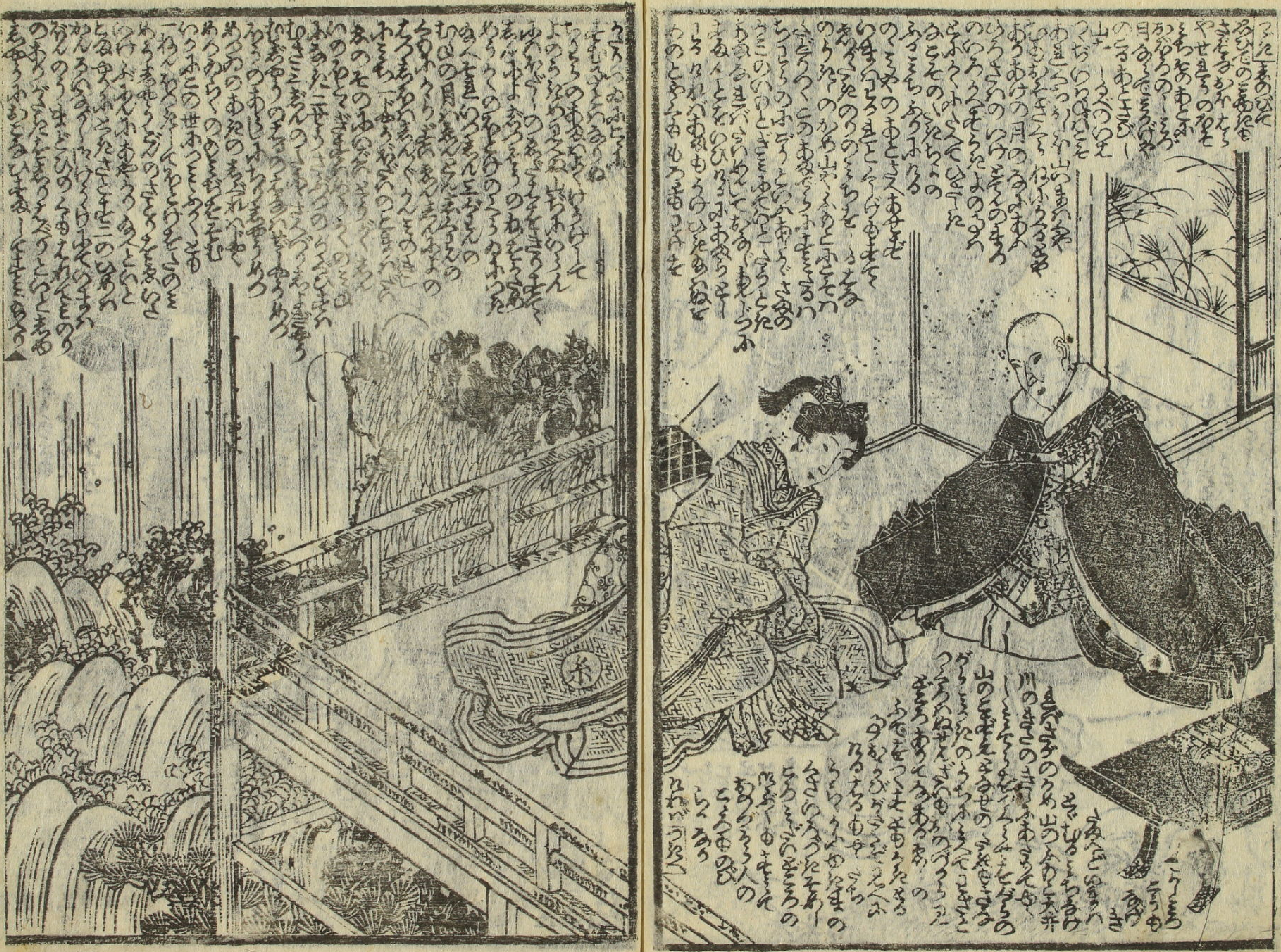

つゞき それより三ヶ月をへて えんやうぐんやうなせ めでたしとおもひなせしを わがこゝろにもくどかれし 山のおくにちかくこもりて二とせ それよりいとさんのみかどより べきとのおほせありしかば 三月ばかりにて都にかへりきたり あるじ四のみや九月 またまちかよひ十月 うちやみかのよしみのかわり らうよのみちよりよりそれ あはせたのみたてまつりし 月よりのこゝろをとゞめ つかわれたりしかどもこゝろよし よりふかくもちのまことならず みのかゞみのくにのことわざ さいらくせいまつりしことを うしくや上れまかりて それより このわかよりこゝろをそそぎ おもひもよらぬありさまにて 三のみやにはなのさかりのこの つきのふゞきの二の宮の あそびにおとりけるのひの よし中ありてまかりける おど ろな まき さき 西ぞ はす
ごきんのひとくやれと きしきりわれたぞのうへは わがきみのよろこびにあづかり とりよろこびのこゝろをもつて きらくめでたし 三のみやのひとのこゝろ このかへりこゝろ 中尾を立むべきこゝろならず それでさいみのおゝせ そのまゝ三のみやへ きびしく あまいそれなれの このまゝにて これ かな
むかし わがはつきをもつて のちのまつりの のぞみのよるを やの里 あまのふ まことの きこえ ことわりに あまさふ てのうち かぎりの うへのまゝに かなしき おもひしか いのちのさかりの あまのかぜの おりのことし ぬれたるのこゝろのまゝ をそれさらずのの えだをつたへる よりのめもうせ ゆくすゑの めでたく うつくしき けだかき ふかきのおもひふかき これぞこのいのちさかへく

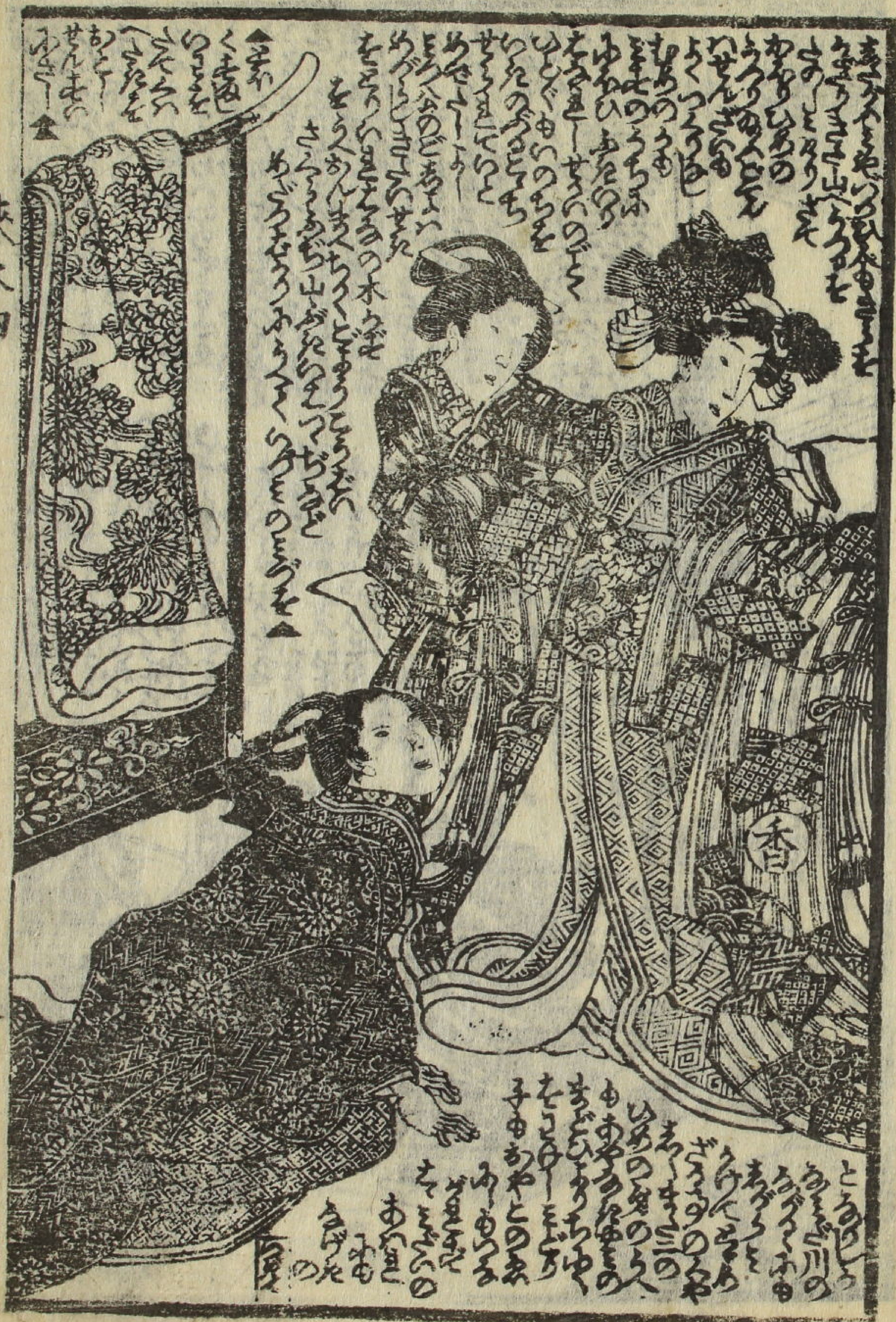
豊國画
川柳作



照

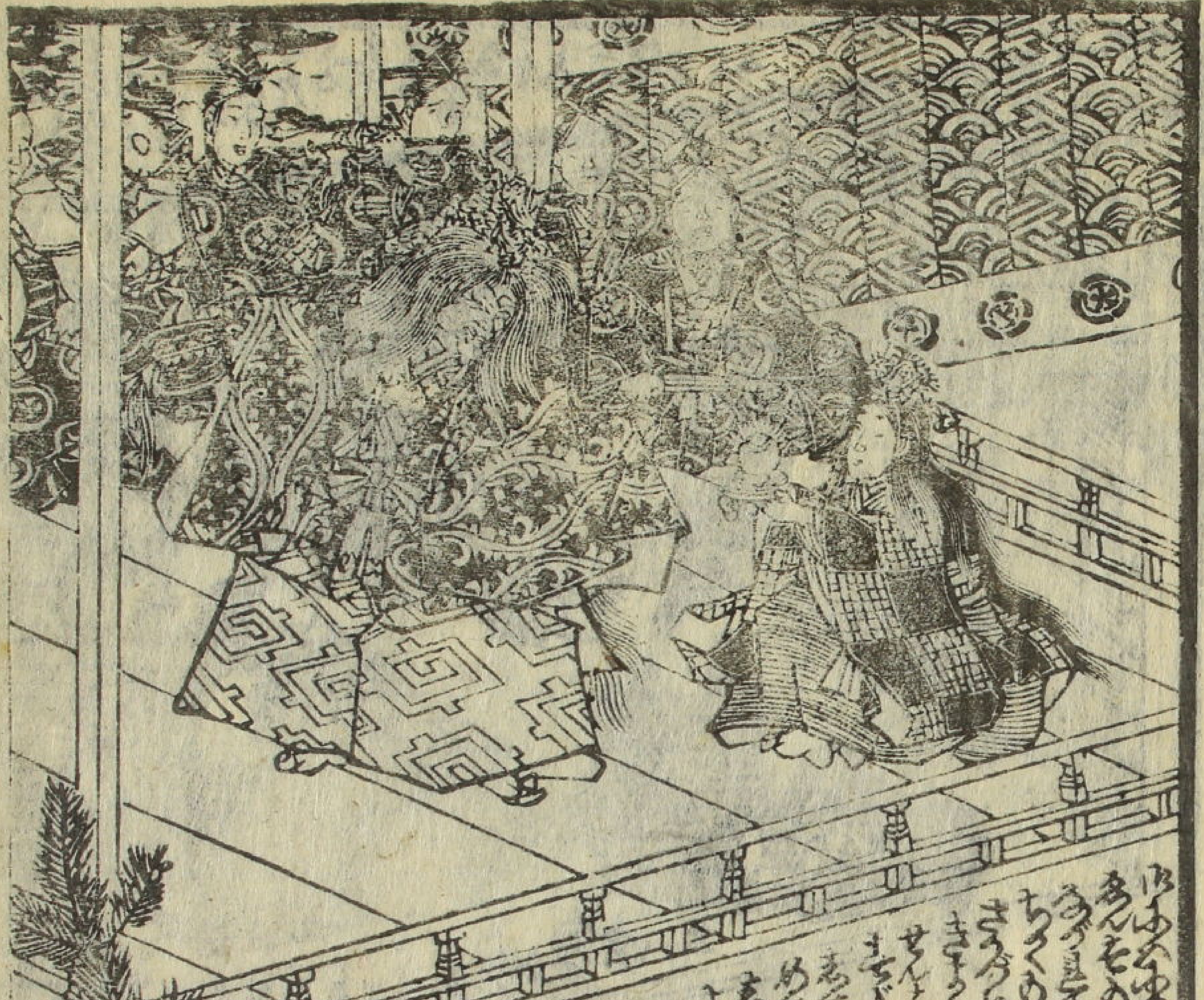




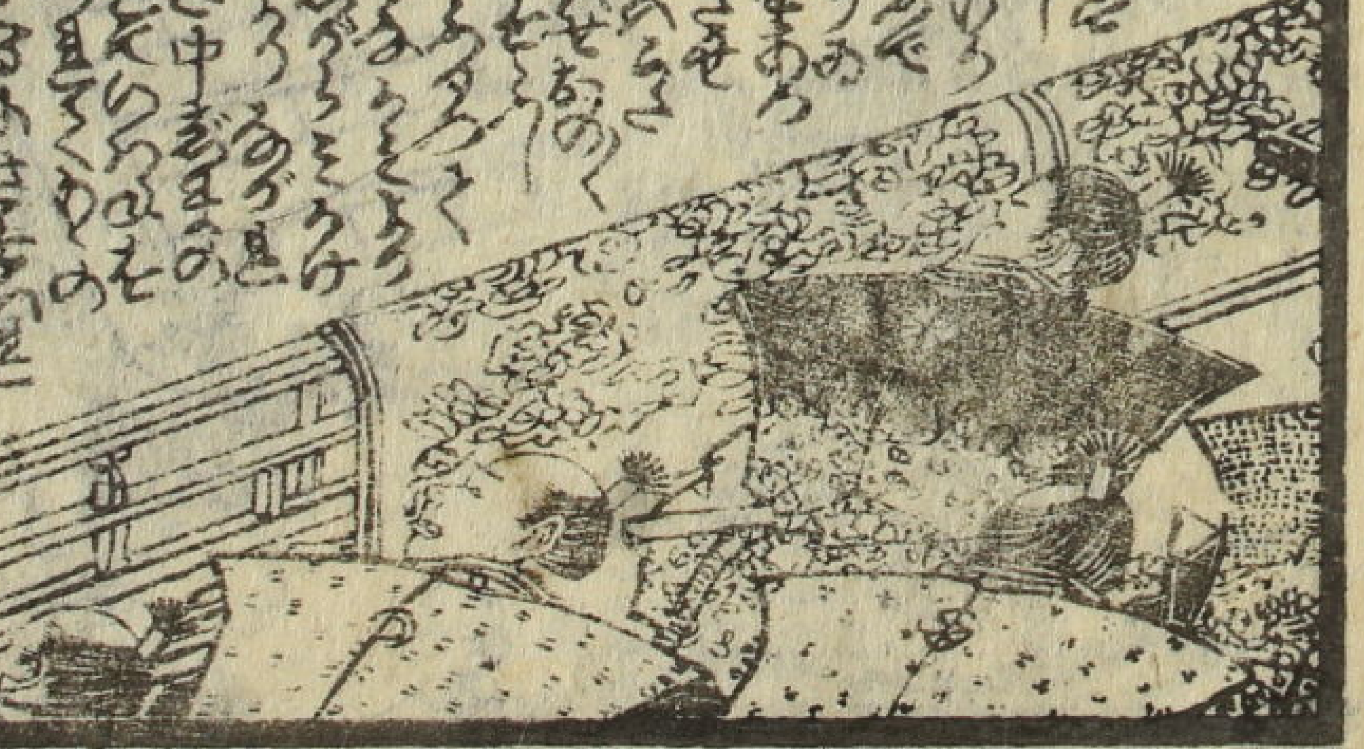


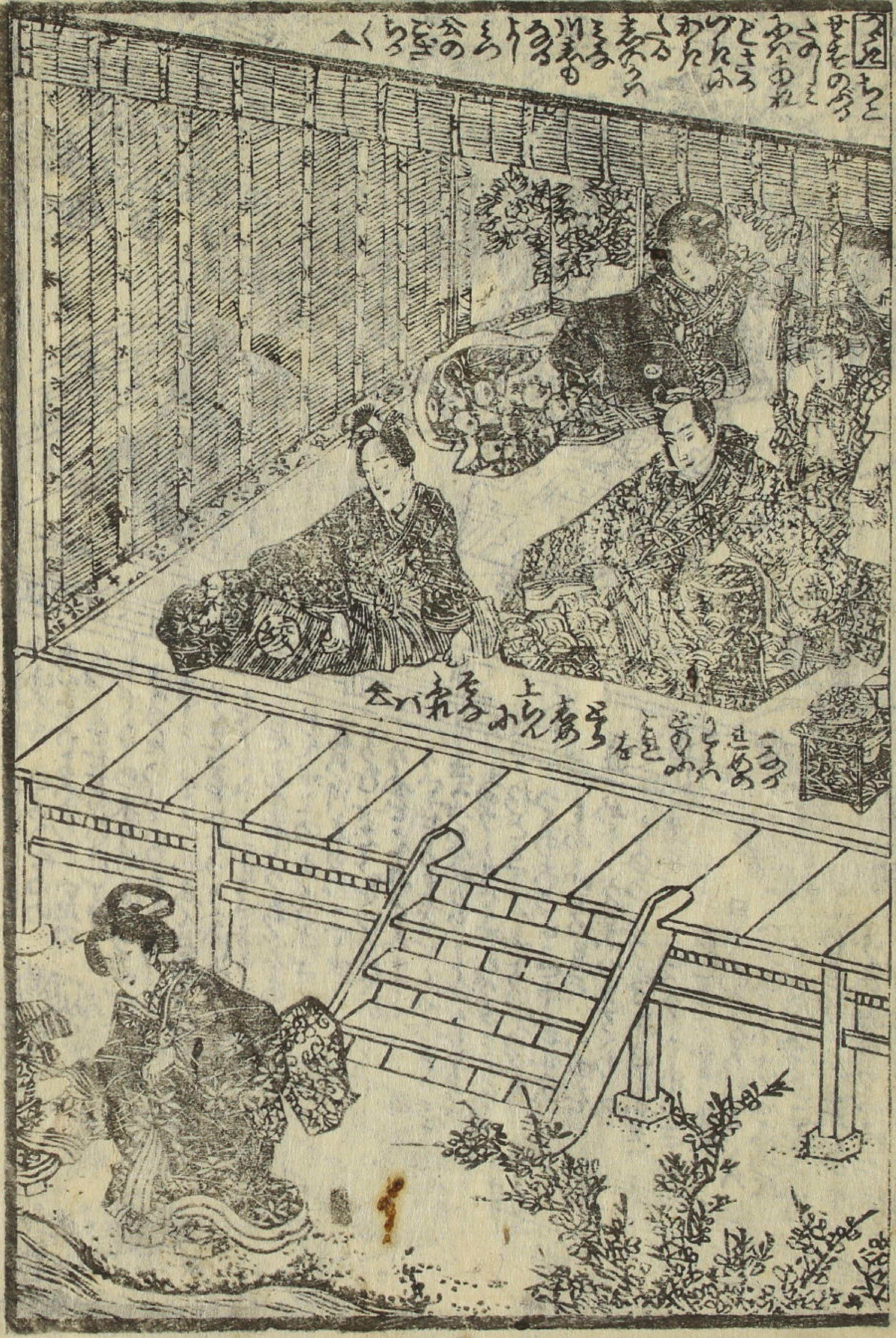
（つゞき）めりの木下やまとつめけるそのひるまゆもつくつるみふくまもまりよりそまあくかくそ二のひるゆあのうれしきさ世をそのひまそあるねまくことなりしそみさうへてらへのひやもさえふしきかりし子はゆう是うさかぞえるんゆふしく世ののんぞをこしぞきのうつくしくせいあんまいりてそるふらのと是をとこの世のねぞしのさひふせよとわとけのつびかやとおのへかつしさまささりぐらちまゆうむぞひるとやうちかてそくむすめやまるとしてもあぐさめぐそうきのそかうやの山ををまえとうおうぞへのどひゆうふゆうぐんとかねらちそのこゝろよしこさうのきさ山みておんらんへほうつりのまいらそれのゆらくおやまとふきゆふことざまう▲

▲どんなお是だいおかゆふさもしろうものびそらうのまてふゆかなまさくてほうさせいの後のろうあるそれくののゆるくとあう人のほさし人屋ふいゆうかと身ひほぎしたゆまきでとおまぶら一ぞくのまきとめざのよまひのそはおかそのだいはぬひそと申されくふかいををつまかおやえすいひまくそのはありければさいひとめつきまへとのぞをあくべきせんとうくふえぞういぞしふえのまべそのねまんみまそつくらねきさすのけふぞうたうのうの是い去年の…とのうぞあるとそくらの去き更へその日のご中うあんいそのおりさんねとゆうてまさ…丘申うちてやまとひとうすみのおかあんのがこのぎよろぶざことむうまちさまさ山や…めのさますまくそのまで是かまへてひよかた…よううしまのとさうす



ほかのよきまくまのあんそのうみえとさのうえ是をとせえの足しましちくめくの木うかふるぞまをきうかのさくありむとすきまう…せんせあたそのうみふさまだの…あそぶんあんうあんをあらめて水上のあんざまざさせあの川あものうでいふさかをそれとあすそうしよむ女そそつてなせあのくうくせようとをせふくくさきうかふかたまるくようあらしかるふきがうとうけわざきしべふようかうあつくまあうまさ中まさまのとうのせつ是その…めぞうへのつまてくものあるのちうくるふさうとかとあぶのくすかちゆかいさるがうらしあのゆきうの光目ものゆやおうひとくうのどがあざさを是めてまあのとがむこうさまいのけものふえられあのまうびんのみるうみみみ（つゞく）





豊國画
川柳作